
DEAD of PARADISE

シュヴァルツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEAD of PARADISE

【Nコード】

N3838U

【作者名】

シュヴァルツ

【あらすじ】

病気は常に形を変えていく、突然変異し、人間に牙を向くしかし、それらは人間の手によって駆逐されていくのもまた、事実である。ここに新たな病気が蔓延する人災か天災かそれは分からない。人が人を喰らうそんな非常識な事が現実起こってしまう。しかし、人々は常に戦っていかねばならない。それは運命とも言えるであろう。日本で、世界でそれが蔓延する時、人々はどのような行動をするのであろう。近い将来、こういう事があってもおかしくはない。そんな非常識の中でどのような物語があるのかこれから話していこ

う。さあ、ゲームの始まりだ

そう命を掛けたゲームがな

主人公と作者の声

主人公：名前 古知屋 修

年齢：20

趣味 特技：武器改造、修理 鍛錬

体格的には筋肉質ではあるがそこまでムツキムキではない。しかし、親父からよくけいこの相手をされるので近接近での体術はお手の物である。

主人公について

修は日本科学技術大学と呼ばれる大学に通っており、親は代々受け継がれてきた貿易商人である。しかし、本人はバイトなどをして社会勉強に励む立派な大学生である。

家は日本にあるのだが、親は海外に仕事に言ってるため、現在はメイドと一緒に暮らしている

作者の声

はいどうもシュヴァルツです！今回もゾンビ物をやってみる事になりました。名前にオリジナルに見えますが場所は学園黙示録の床主市を設定しています。もちろん、本来の主人公達も出す予定です

ぜひ、楽しみに見て言って下さい！尚、今回は主人公のチート能力は使わない設定でやって行きたいと思えます。

では、楽しみに見て言ってね！

平和とも言える日常（前書き）

始まるよー！！

平和とも言える日常

ここは、床主市のとある邸宅、そこでは一人の人物が寝ていた

「修様、もう朝ですよ。今日は一限からって言ってたじゃないですか」

メイドが起こす

「う、うん、後、三時間半」

一人の青年が布団をかぶる

「はあ、なんでそんな中途半端な時間帯なんですか。せめてきつちにしておさいよ。というかさっさと起きて下さい。」

メイドは冷静に突っ込みを入れるが再度、起こしにかかる。だが、青年は起きようとしなかった

「仕方ないですね。奥の手と行きますか」

そう言ってメイドは一旦、部屋を出るとすぐさま戻って来た。手元にフライパンとお玉をもって……

「行きます！地獄のラジオ！」

そう言いながらお玉とフライパンを思いっきりぶつけさせる。その音量は計り知れない。しかもこのメイド準備が良いのかちゃっかり耳栓までしている。部屋にいるのは二人だけという事は……

「ぎゃあああああああ……！！！！！！！！み、耳が……！！！！」

寝ていた青年だけとなる

「やっと起きましたね。おはようございます。修様」

そう言ってメイドは何事もなかったように挨拶をする

「おい、琥珀、頼むから、ラジオだけは勘弁してくれよ、耳、痛て
」

そう言いながら起き上がる青年

彼の名は古知屋 修

代々受け継がれてきた貿易商人の一人息子である。

しかし、親は海外で仕事なので現在はメイドの琥珀と二人で生活している。ついでにメイドの事も紹介しておこう

彼女は矢代 琥珀

代々古知屋家の専属メイドとして勤めてきたメイドである。プロポーションは抜群で街を歩けば振り向く人が多いと言われる。修の専属メイドとして働いている

「さっ早く起きて下さい。朝食が来ていますから」

琥珀が言う

「わーったよ。着替えるから外で待っていてくれ」

「むしろ、見してくれて」「あっ?」「何でもないです。」「

琥珀は修LOVE属性が付いているため、最近に変態じみた行動が多いという(修談)

琥珀が出るのを確認すると着替え始める

「全く、最近は大変なっかしいな。琥珀は・・・今度、親父に相談してみようかね」

そう言いつつクローゼットから迷彩のズボンと普通のシャツを取り出す、春が過ぎて夏に近い気候なので軽い軽装となっている。

〈廊下〉

「お待ちせ」

「お待ちしておりました。どうぞ」

そう言って食堂に案内する琥珀

そして、食堂に着くと朝食の出来立ての匂いが鼻に来る。するとおなかの虫が鳴る

「さっさと食べて、行くとしますかね」

そう言って席に着く、反対側に琥珀が付く

「「頂きます」「」

そう言って朝食を取る。

「琥珀、今日は誰か来る予定はあるのか？」

俺が聞いた

「そうですね……いえ、今日は誰も来ない予定ですね。それがどうかしましたか？」

琥珀が聞く

「いや、友達をさ今日家に招こうかと思ってな。」

「そうですね。御友人を……大学では友達は多い方ですか？」

「ん〜割と気の合う奴らが多いからな。結構いると思っぞ」

そんな話をしながら朝食を取って行く

そして、食べ終わると一旦部屋に戻って授業の準備を始める。そして、地下にある車庫からハンヴィーを取り出す

ハンヴィーは二十歳の誕生日に親父の貿易仲間（軍関係）から頂いた本場のハンヴィーで現アメリカ軍が使用しているのと同じタイプである。

しかし、修はそれを改造してハンヴィーのデメリットを失くさせた。そのため本来のハンヴィーより燃料の貯蔵が大幅に上がっている

ハンヴィーは問題を起こすことなく動き出す、ガレージのシャッターを開けて外に出す、玄関では琥珀が待っていた

「行ってらっしゃいませ。修様」

「おう、家のお守り、頼んだぜ」

琥珀はメイドとしての役割もあるのだが他にも家の警備も受けている。そのため、武術、銃の扱いは軍人並みに優れている

琥珀はお辞儀をしながら俺を見送ってくれる。俺はハンヴィーで大学を目指す。大学は日本科学技術大学という大学で俺は親の跡を継ぐつもりでいたため貿易専門コースを受講している

「さーて、好きな音楽でも聞きながら行くとしますかね」

そう言っただけ音楽を流す

数分後大学に到着した。車は大学の外にある学生専用の駐車場だ。金は払っていない。

何故かという入学当初、親が大学に多額の寄付をしたと噂されている。そのため大学から無料で車を置けるらしい。

俺自身はそういう事はあまり好きではない。だが、使える物はすべて使う、それが信条にしている

車を降りると話しかけられた

「よう。修、おはよう」

「おう、秀治、おはよう」

こいつは上佐和 秀治 かみさわ しゅうじ 大学に入って初めてできた友人である。出身は九州地方らしい彼は軍事オタクで結構な知識量を持っている

「今日もこれか。やっぱりいいねハンヴィーは」

「そうか？まあ、否定はしない」

「分かる人でじゃあ、教室に行くか」

「ああ、そうだな」

そう言いつつ教室に向かう俺達

今日も平和な一日となるはず……………だった

平和とも言える日常（後書き）

「はいどうも、シュヴァルツです」

「修だ」

「始めました！新小説が！」

「そうだな・・・しかも、チートなし」

「そうだね。今回はチートなしという条件でサバイバルに臨んでもらうよ」

「おいおい、どんな無理ゲーだよ」

「大丈夫大丈夫、主人公は必ず死なないで生還するっていう法則があるんだから」

「でも、作者、ここ最近じゃあ主人公が死んじゃまうアニメやゲームが出て来ているんだが？」

「あるにはあるけど、あれは認めないね。」

「ほう？なぜだ？」

「だって輝いてこそその主人公だよ？ヒロインとかも大事だけどね。モブキャラは知らん」

「まあ、こんな偏見な作者ではあるがこれからも読んでいただきた

い。よろしくお願ひします

パンデミック

俺は普段通り、朝から授業を受けて普通に昼食を友達と食って学校生活を満喫していた。しかし、今日に限って感覚が違つように思えたのだった。

昔から勘だけは冴えていた。そのおかげで事故になりそうな所で巻き込まれずに済んだという経験がある

〈大学内 喫煙所〉

「いや、疲れたな」修

秀治が言う

「ああ、しかも小田切の奴珍しく怒つてたな。何かあったのか？」

俺はタバコを吸いながら言った

「ああ、情報によると前の授業で注意したらしいだが、中々言う事を聞かなかつたらしくてな。それでキレたらしいぜ」

秀治が言う。秀治には情報を集められるコネが大学内にいるらしい。その人のおかげで今までやってこれたんだと秀治は言っている

「まあ、何にせよ。俺達には関係ない事だがな。フワ」

俺はそう言つて欠伸を出す

「なんだ、寝てないのか？修」

「ああ、昨日と一昨日バイト続けだったからよく眠くてしょうがないんだ」

「へ〜ボンボンの坊ちゃんがバイト何かしてるんだ！？」

「ボンボンだろうと関係ない。社会勉強はどんな人間でも必要な事だ。この先、何があるか分からないんだしな。秀治はバイトやってないのか？」

「うんと言うより、うちは造船業だからね偶に親父の仕事を手伝ったりしてるんだ。だから、バイトをする必要がないってわけさ」

「ほ〜初耳だな。造船業なんかやってるんだ」

「そう。ついでに言うとお修の親父さんが経営してる会社の船だっのうちで整備する事が多いんだぜ？まあ、お得意さんって奴だな」

「へえ〜」

そうこうしてる内に四限のチャイムが鳴った。俺らは三限で終わりのので後は帰路に着くだけだ

「あつ秀治、今日は家に来ないか？いい銃が手に入ったんだ」

「マジ！？行く行く！！」

「決まりだな。じゃあとっどと行くとするか」

そう言つて俺達は大学の外にある駐車場に向かう事にした。

〈道中〉

「おい！早く運んでくれ！」

大学内でどうやら誰かが倒れたようだ。他の生徒が手伝ってくれるように頼んでるみたいだ

「あちゃ〜誰か倒れたみたいだな」

秀治が言つた

「仕方ないさ。人間、いつでも健康つて訳にはいかないだろうしな。そんな事よりさっさと行こうぜ」

「ああ、そうだな」

そう言つて俺達はその場を離れる。しかし、ここで気づいていればもっと早くに行動に移すことができたであろうに……

〈正門〉

正門に着くとなぜか、人だかりができていた

「なんだ？」

「さあ、とにかく行って見るか」

そう言つて俺達は人だかりの近くまで行って見たが人が多くて中心

が見えなかった。そこで秀治が近くの生徒に話しかけた

「なあ、何があったんだ？」

秀治が言う

「ああ、不審者みたいですよ。多いですねやっぱり」

どうやら原因は不審者らしい俺は人だかりの隙間からその様子を覗く事が出来た

人だかりの中心

「なあ、あなた、いい加減に帰ってくれないか？いつまでもいられちやあ迷惑なんだよ」

警備のおっさんが言う

「あゝ……………」

不審者はふらふらとしながらうめき声を上げていた。酔っ払いにしては行動がおかしい

「はあ、帰らないつもりならこっちだって手段を選ばないよ？警察に連絡するけどいいね？」

「……………」

「おい！聞いているのか!？」

他の警備員が不審者の肩に手を置いた。次の瞬間……

「アアアアアアア！……！！！！！！！！！！」

「グア！？離せ！」

不審者がなんと警備員の腕に噛みついたのだ！

「おいおい……」

他の奴らが声を上げた

「おい！何やってるんだ！離せ！」

おっさんが不審者を剥がそうと力を入れるがびくともしなかった

「くそ！なんて力だ……全く効かない」

「力なら任せな！」

そう言っ出てきたのはアメフト部員の奴だった。見た目的にも不審者よりがちりしているためすぐにはがす事が出来るだろう

「すまない、助かるよ」

おっさんはそう言っアメフト部の奴に任せた

「任せな！おら！！」

アメフト部員が渾身の力を出して不審者を警備員から引き剥がす、

うまくできるかと思われたが……

「きゃああああ！……！！う、腕が……」

不審者が離れた際、警備員の腕の肉と一緒に持って行かれたようだ。その証拠に骨が視認できるほどはつきりしている

「きゃああああ！……！！！！！！」

女子大生が叫ぶと他にも動揺が走ったみたいだ

中には吐く奴までいた

「しっかりとして下さい！今、応急手当をしますから！」

そう言つて一人の学生が警備員の腕にタオルを巻き止血に入ったが……

「ぐあ！？がああ……ぐああああ！……！！！！！！」

警備員は転びながら断末魔を上げ……死んだ

「そ、そんな！？こんな早くに死ぬはずがない！なんでだ！？」

手当を行っていた学生が驚いている

「きゃあああああ！……！！殺しよ……！！！！」

そう叫ぶと周りは電話をしたりカメラ撮影を行っていた

「はあ、はあ、修、ちよつと休憩」

秀治が言う

「ああ、そうだな。ここまでくれば大丈夫だろう」

そう言つて俺達は近くにベンチに座つた

「なあ、修、何が起きたんだ？」

「ああ、実はな……」

そう言つて俺は見てきた事を秀治に話す

「そんなのありかよ!？」

「ああ、俺も信じがたいとこだがさっき起きた事実だ。信じるしかあるまい」

「だけど、なんで死んだはずの人間が？」

「分からん。とにかくここら辺も騒がしくなるな。どうするべきか……」

そう考えていると校内放送が入る

「生徒の諸君に連絡します! たつた今、正門で殺人事件が起こりました! 生徒は直ちに出る準備を始めて下さい! 繰り返します……」

そう言って警察に電話を入れた。しかし……

「現在、回線が込み合っているためつなぐ事ができません。しばらく……」

電話は無機質な機械音だけが流れた

「くそ！」

「ど、どうした？修」

「電話が繋がらない……まさか、他の区域でも同じ事が起きてんのか？」

「ま、まさか、だとしたら日本は終わりだぜ？」

「しかし、いつまでもここにいらねん。行動あるのみだ」

そう言って動こうとした瞬間

『ウウウ……』

一人の学生がふらつきながらこっちに来ていた。服は血まみれ、どう見ても瀕死の状態だった

「お、おい、あいつ怪我してんぞ。助けようぜ」

秀治が助けようとするが俺が抑えた

「な、なにするんだ！？修」

「秀治、あいつのわき腹を見ってみろ」

「何があるんだ？……ツ！」

秀治は驚いた。それもそのはず、その学生のわき腹からは腸らしき管がだらしなく垂れ下がっていた。しかし、学生は気にすることなく歩き続けていた

「何なんだ！？」

「分からん、今は逃げに徹するぞ。来い！秀治！」

そう言っつて走り出す俺

「ま、待てよ！修！」

秀治も俺の後に続いた

パンデミック（後書き）

はい、第二話はここで終了です。

いや〜チートじゃない物って難しいですね。だけど、頑張っていくんでこれからもお願いします！

感想などお待ちしています。

終わりの始まり

俺らは目の前で人が死ぬところを見た。正直言って二度も見るとは思わなかった。なぜそんな事が言えるかって？

まあ、本編を見れば分かる事さ

〈大学内〉

「はあ、はあ、」

俺と秀治はあの後、走りっぱなしであった。後ろには生きた屍共が大行進しながら獲物である俺達に向かって来ていた

「くそ！生存者はいないのか!？」

秀治が言う

「とにかく、今は走れ！生き残りたきゃあ走るんだ！」

俺が言った。しかし、いつまでも体力が続く訳でもない。どこかであいつらをやり過ごす事が出来ればな

そう思って俺は走りながら周りを見た。

近くには教室棟があり、その隣には食堂が建っていた………ん？食堂………

「秀治！俺について来い！」

そう言って食堂の裏の道に行く

「おい！修！そっちは行き止まりじゃないのか！？」

秀治が言う

「大丈夫だ。この先に食堂の屋上に繋がる梯子がある。そこを昇れば勝ちだ」

「分かった。」

そう言って梯子めがけて走って行く

数分後、屋上に繋がる梯子に到着した

「よし、秀治先に行け」

「OK」

そう言って梯子を昇る秀治

だが、奴らもすぐそこまで来ていた。ろくな武器も持ち合わせていないので俺もすぐさま梯子を昇る奴らの手が伸びたが拳一個分の間が出来ておりギリギリ掴めずにいた

「よし、これで、なんとかなるだろ」

そう言って下をのぞく

「うはっテラキモスWWW」

「修、そんな事言ってる場合じゃないっしょ」

秀治が呆れながら言う

「いいじゃん、人間追い詰められた時こそ心に余裕を持たなきゃいけない。じゃないと生き残れる戦争も生き残れないぞ」

「確かにそりゃあそうだが……つとその前に一つ質問」

「なんだ？」

「修、妙に落ち着いてるよね。なんか死体を見た事があるって感じだったけど……」

「ああ、その事か……理由は簡単、一度死体を見てるからな」

そう言っつてタバコに火を付ける

「ええ！？いつ！？」

秀治が驚いた

「こいつは話してなかったな。高校の時親父と一緒にアフリカに行っただよ」

そう言っつてタバコを吸う

「アフリカ？」

「ああ、あそこは紛争が多くてな。銃撃戦なんざ日常茶飯事だった。荒野の西部でも顔負けのな。死体なんざそこらへんの石ころと同じように普通に転がってたさ。まさか、日本で見る羽目になると思わなかったが……」

「そうか。道理で」

「ああ、だけど、歩く死体なんざあっちでも見られなかったよ。やれやれだぜ」

「で、これからどうする？」

「そうだな……いつまでもここにいるわけにもいかない。とりえず、食堂に降りて何か食おう。腹が減っては戦は出来ぬって言うしな」

「ははっ確かに」

そう言って俺らは下に降りた

（食堂）

「おっし、クリアだ」

そう言って俺が下に降りる。その後、秀治も降りた

「で、何食う？」

秀治が言う

「そうだな。軽い物にしておう」

「じゃあ、パン？」

「そうだな。」

そう言っただけで食堂の中にある購買に向かいパンをいくつか。もらっておく

「にしても、この状況は何だ？なんで、死体が歩いてんだ？」

秀治が言う

「恐らくは”ゾンビ”とでも言うべきかね。大学内でこうなってるんだ。他の地域でも同じ事が起きてるって考えた方がいいかもしれないな」

俺が言った

「でも、それだったら自衛隊が動いてるんじゃないか？」

「じゃあ、なんで、自衛隊はとまかく警察まで動かないんだ？答えは簡単、この県だけじゃない日本中であの死体共が蘇ってるのかもしれないな」

「おいおい、どこぞのスプラッター映画じゃああるまいしさすがにそれはないんじゃないか？」

「だったら、この状況をどういう風に説明する？」

そう言つて外の状況を指さす

外は地獄絵図のまんまな状況だった。死体が歩き、生者を襲い、また別の生者を襲う。この負の連鎖を地獄絵図ではなくなんと説明すればよいのか。秀治は答えられなかった

「修の仮説が本当なら、原因はなんだ？テロか？」

「それは分からんな。もしかしたら新型のウィルスかもしれないし、テロなら政府機関でも察知してるはずだ。なのに突然、前触れもなく起きたからな」

そう言つて椅子に座る

「まっ今はここを出ることに専念しよう。作戦も立てずに突っ込むのは愚の骨頂だろ？」

「そつだな。どうする？」

「そつだなまず（ガタン！！）・・・お客さんのようだ」

俺が作戦を言おうとした時厨房の方から物音が聞こえた

「どうする？」

「俺が行つてこよう」

「大丈夫か？」

「ああ、殺人ならあの地でやって来た。今さら後悔する物もない」

そう言って俺が厨房に向かう

（厨房）

「さて、どうするかね」

そう言って近くにあったフライパンを手にする。言っておくがギヤグじゃないぞ。本当は包丁の方が良かったんだがどこを探しても見当たらなかった。それだけだ

俺は物音がした方へ静かに歩いた……そして、角まで来た時相手の方が動いた

「おろ!?!」

「いやあああ!!!!来ないでええええ!!!!」

そう言って俺を思いつき突き飛ばした。俺はそのまま後ろの棚にぶつかつた。その衝撃で棚に置いてあつた調理器具が俺の頭を直撃する

「みやお!?!」

つい、変な声が出てしまった。誰も聞いてないよな?

「え?人・・・間?」

女性は俺を見て茫然としていた

「あいたたた……酷いなきなり突き飛ばすとは……」

そう言っただち上がった

「すみません！てっきり、あの化け物が入って来たのかと……」

そう言っただち頭を下げる

「いって気にするな。俺は古知屋 修、あんたは？」

「は、はい、私は古城こじょう 美麻みまといます」

美麻はそう言っただち頭を上げる。髪はロングヘヤーで腰辺りまで伸びている。プロポーションは抜群琥珀と同じくらいであった。胸は……でかめだ

「ん〜性欲を持って余す」

「はい？」

美麻は俺の発言にキョトンとした

「気にするな。それより、良く無事だったな。これから、脱出しよ
うと思っただ所だ。美麻さんも一緒に来るか？」

「は、はい！」

こうして、新たに仲間が出来た

その後、食堂に戻り俺は秀治に美麻さんの事を説明した

「へへよく無事だったね。俺は上佐和 秀治、よろしく、美麻さん」

「いちからこそ」

そう言っ互いに握手をする

「そうだ。美麻さん」

「はい？」

キョトンとした顔が可愛く思えたのは俺だけか？

「美麻さんはどうして、厨房にいたのかな？」

「あ、はい、私もあの化け物が出て来て友達と一緒に逃げていたんですが、途中で逸れてしまってそしたら、あの化け物が多くなってきたんで近くにあったこの食堂に逃げ込んだんです。修さん達はどっしてここに？」

「俺達もあの化け物共から逃げていたんだ。途中で食堂の屋上に昇ってたな。腹が減ったんで中に入ったらさっきの状況になった訳さ」

「そうでしたか。で、これからどうするんですか？」

美麻が聞く

「そうだな。とりあえず、武器になりそうな物を集めよう。それに

情報も必要だ。何も分からない状況じゃあ動きづらい」

「あっでしたら私、あそこに置いてあるパソコンで調べますよ？」

そう言って隅っこにあるパソコンを指さす

「でも、アレってネットは繋いであるけど、校内専用じゃあなかったけ？」

秀治が言う

「大丈夫です。わたし、こう見えてもパソコンは得意なんです。」

そう言って胸を張る。それに伴って双子山が揺れる

「おおぅ……じゃあ、美麻さんは情報を秀治と俺は武器になり
そんな物を探すぞ」

「分かった（りました）」

「よし、行動開始！」

そう言って俺達は行動を開始するのであった

終わりの始まり（後書き）

人物紹介

く古知屋 修く

本編の主人公である。親は代々受け継いできた貿易商人で現在、両親は海外で仕事中である。そのため今はメイドである琥珀と一緒に床主市に家で住んでいる。趣味は武器改造で車にも興味があるが、軍事的な物の方が一番興味がある。

しかも高校の時にアフリカへ行き、銃撃戦を経験しているため、大抵の事に対しては動じなくなった。このゾンビ騒ぎの中でも冷静沈着に行動できた

最近の悩みはメイドである琥珀が変態属性になりつつある事を悩んでいる

く上佐和 秀治く

修と同期の大学生で九州地方出身、かなりの軍事オタクで修にも負けないほど知識を持つてはいるが実銃を持った事はない。

しかし、体力的には修よりちょっと下のためあまり疲れる事はない

く古城 美麻く

ゾンビ騒ぎの中食堂で出会った生存者、プロポーションは抜群で琥珀と同等である。胸もでかめ

趣味はパソコンをいじる事でそのおかげでハツカー顔負けの技術を習得している。パソコン一台あればあらゆる情報を手に入れる事が出来る

しかも、親が医療関係の仕事だったため大抵の怪我などは手当てできるとらしい

性格的にはちょい天然属性が入ってたりする。いわゆるドジっ子と
言う奴だ。

く矢代 琥珀く

修と一緒に住んでいるメイドでプロポーションは抜群、道を歩けば振り返る人多数と言うほどだ。胸は……ん？インターホンだ誰だろう？

家の警備も任されているため銃の扱いや体術などもプロ級である、
一応、免許は持っているが滅多に運転する事が無いらしい

まあ、こんな感じにやって行きたいと思っています。これからも応援の方よろしくお願いします

下準備

前回のあらすじ：新たな生存者 発見以上！

〈食堂〉

俺らは美麻さんと出会った後、この大学から脱出するため情報と武器の搜索を開始した

「秀治、そっちは何かあったか？」

俺が言った

「まあ、武器になりそうな物って言ったら、包丁とかフライパンしかないぞ。そっちは？」

「こっちは防犯用のさすまたがあったぞ。正直、必要なのか？食堂で」

「さあ？まあ、武器になる物があるだけでもマシじゃないか？」

「それもそうだな。」

しかし、これじゃあ心もとないな………いつそ改造でもするか
そう思ってさすまたを手にする

「修、どうしたんだ？」

秀治が言う

「何、ちょっとした改造を施すのさ。秀治、ドライバーはあるか？」

「ああ、あるけど……ほい」

そう言ってバックの中からドライバーを取り出す

なぜ、用意がいいのかと言うと秀治自身が実家で働いてるため常に持ち歩くようになったそうだ。

「サンキュー よし、またの部分を取って……」

そう言ってまたの部分を取り外す、こうなるとただの棒になるので包丁をガムテープで固定する

「おし、簡易槍ができたぞ」

そう言って掲げる

「ほゝそんな簡単に作れる物なんだな」

秀治が感心したように言う

「まあ、あつちでサバイバル経験もあるからな。偶々遭遇した民族に教えて貰ったんだ。他にも結構できるぜ。定番的な武器からちよつとした本格派までOKだ」

「へゝ俺じゃあ思いつかないな」

「さっ他のも作っちまおう」

そう言っただけ武器を造り出す、と言っても銃より攻撃力は劣るのであまり頼りたくはないが無い物を嘆いてもしょうがない。ないなら作るまでだ

〈数分後〉

「はあ〜いろんなのできたな」

秀治が言う

「そうだろそうだろ。まっ銃よりかは攻撃力は劣るけどな」

そう言っただけ厨房の机を見る。そこには簡易槍から火炎瓶といろんな武器が出来ていた

「一番、頼れるとしたらこの火炎瓶かね」

そう言っただけ

「でも、数が少ないから多用はできないね」

秀治が言う

秀治の言う通り、多く作るべきだったのだが材料がないため多くはできない。火炎瓶は合計で十本しかない。つまり、使いどころを誤ればこっちが全滅してしまうかもしれない

「武器はこんなものかな？情報はどうだろうね」

秀治が言う

「様子を見に行つて見るか」

そう言つて美麻さんがいる食堂に向かつた

〈食堂〉

「美麻さん」

「あつ修さん」

パソコンから目を離れた美麻さんを見るとがっかりした様子だった。
何かあつたのだろうか？

「どうだい？情報は」

秀治が言う

「ええ、その事なんですけど、これを見て下さい」

そう言つてパソコンの方を見せた

「ん？……おい、これってマジか？」

俺が言う

「ええ、政府機関の所に侵入して得た情報です。間違いはないかと」

美麻さんはため息をつく

パソコンには自衛隊の情報部の画面が開かれていた。（ハッカーも驚きだ！by作者）

そこには航空自衛隊の映像で生中継で日本の至る所を撮影しているのだろう。日本の首都 東京 大阪 京都と映されていたのだが、どれもこれもが崩壊した街の映像だった。こっちと同じくゾンビが生者を襲っては仲間を作って行く

時折、一人に対して複数のゾンビ共が貪っていた映像もあった。俺は何とか耐えたが美麻さんと秀治は耐えられなくなり戻ってしまった

「こいつは……修の言う通りかもしれないな……」

秀治が言う

「ああ、正直当たって欲しくはないと思っていたが、厳しいもんだな……」

「それと、こっちは一般のニュース映像なんですけど……どうやら日本だけじゃないみたいです」

そう言ってYAOOOのニュースサイト映像で緊急ニュースが流されていた。

その内容は……

が起きていたと言っ事だった。日本だけでなく世界中でこのズンズン騒ぎ

ニューヨークによるとアメリカではホワイトハウスを破棄して、洋上の空母に移転したようだ。中国は通信途絶 イギリスでは鎖国体制に入っているようだ。ロシア・メキシコ・オーストラリアでは暴動が発生現在、軍隊が鎮圧に当たっているようだ

「どこに逃げりゃあいいんだ？」

秀治が言う

「分からんね。自衛隊はまだしも警察はもう駄目だろうな。壊滅されているかもしれない」

「じゃあ、私達はどうすればいいんですか!？」

美麻さんが言う

「確かに、これは孤立無援と言ってもいい。だとしたら、生き残るために自分たちの力で生き残るしかないな………とりあえずはここからの脱出だ。」

俺が言う

「でも、どうやって出るんですか?」

美麻さんが言う

「プランは二つ考えている。一つ目は今持つてる武器で強行突破だ。だとしてもこれは賭けに近い方法だ。二つ目はまず、俺が車を取りに行つて、食堂まで移動させる。二人は食堂で待機と言つ方法だ」

二人は驚いた

「一つ目は断然却下だな。今の武装じゃあ脱出できるかどうかも分からない。もしかしたら、そのままいつらの仲間入りをするだろうな」

秀治が言う

「二つ目も駄目だと思います。修さん一人が危険な目にあつなんて」

美麻さんが言う

「じゃあ、二人に聞くがこれより最良なプランがあるか？あるならぜひ、聞きたいもんだ。因みに二つ目ならリスクの危険性は少ない。やられるにしても一人だからな」

俺が言った

「でも、それじゃあ……」

美麻さんが言った所で秀治が遮るように言う

「修、覚悟はできてるのか？」

「ああ、正直、これ以上の最良のプランはないと、俺は思ってる」

「……そうか。分かった。行ってくれるか？」

「秀治さん！」

「大丈夫だよ。美麻さん、これでも修は実戦経験をしてる。少なくともこの三人の中じゃあね……」

秀治が言う

「……分かりました。ですが、修さん、これだけは約束して下さい」

「なんだ？」

「決して、自決するような真似はしないでください。これ以上、人が死ぬのを見たくはありません」

彼女は真剣な顔で俺に言った

「ああ、俺は自決して英雄になるとか。そんな詰らん物にはこだわらないからな。どんなに汚い手を使っても生き残れば大勝利だ」

そう言って笑った

「そうですか。それを聞いて安心しました」

美麻さんも笑顔になる

「じゃっ行って来るとしますかね」

そう言って簡易槍と防犯用のスタンガン（食堂にあった物）を持つ

「気お付けて下さい」

美麻さんが言う

「ああ」

「修、good luck」

秀治は親指を立てて言う

「おつよ。」

そう言って行動を開始する俺だった

下準備（後書き）

「どうもー作者ですー！」

「秀治だよーよろしくねー」

「あれ？修君は？」

「ああ、修なら美麻さんと一緒にどっかに行ったぜ」

「マジか・・・もう手を付けていやがんな。それはともかく四話が終了しましたー」

「今回は武器が手に入ったね」

「そうそう。と言っても武装集団が使うような物程度だけだね」

「でも、火炎瓶とか陰険じゃね？」

「関係ない！汚物は消毒じゃい！」

「作者、それはいかんよ」

「それはともかくとして、今回は別の視点を描こうと思っています。」

「ほーまた、違う人物が出てくるんだな」

「そうそう。あっそれと学黙の原作キャラも出そうかなーって予定

しています。まだ、どこで合流するか分かりませんが」

「そうか……まあ、頑張ってくれよ。そしたら奮るからな」

「マジで！？頑張ります！」

「じゃあ、次回も楽しみに待っていてくれ」

汚物は消毒じゃあああ！！！（前書き）

すみませんすみません、ただの出来心なんです

今回は別視点から始めますよー

汚物は消毒じゃあああ！！！！

（床主市上空）

修達が大学から脱出を試みている頃、床主市上空で数機のブラックホークが飛んでいた。機体の横には陸上自衛隊という文字を掲げて

「いいか？今回の任務は発電所をあの化け物から守る事だ。」

隊長らしき人物が隊員達に向かって話している。本来なら基地でこう言う事を行うのだが、緊急だったためか機内でブリーフィングを行っているようだ

「隊長、日本中いや、世界中に現れたあの化け物共は何なのですか？それに北海道支部などは連絡が入らないと言う事も耳にしましたが……」

一人の隊員が質問と噂を言った。全体に知られていないのか周りの隊員はざわめく

「化け物の事はまだ、良く分かっていない。しかし、北海道支部と連絡が取れなくなっただぐらいで動揺するな。今は、任務に集中してくれ」

そう言って隊長はパイロットに指示を出しているようだ

「なあ、篠田しのだ」

一人の隊員が女性隊員に話しかける

「何？」

「この騒ぎは一体なんだろうな。」

「分からないわ。けど、私達がすべきことは任務を全うする。それだけよ」

「そ、そうか。」

話しかけた隊員はそう言うのと窓の外眺める。しかし、そこには平和な街ではなく黒煙が立ち上り、人々があの化け物どもから逃げ惑う姿だった

「いくら、軍人をやってるとはいえ、これはさすがに堪えるわね」

篠田とは反対側の席に座っていたもう一人の女性隊員が言った

「綾瀬^{あやせ}、少し黙ってて」

篠田が言う

「はい」

そう言っただけで彼女もまた外の景色を眺める

「目標！見えてきました！」

パイロットが全員に聞こえるように言った。

「いいか？もう一回確認するぞ。今回は発電所の確保だ。民間人の救出はその後、行う」

隊長が言った

へりはホバリングに入る。そして、両扉を開け、ファストロープの状態に入る

「綾瀬、先に行ってるわね」

「はーい、気お付けてね」

そう言つて篠田はへりから降りるのであった

side out

〈大学 食堂〉

「さーて、どうするべきかね」

俺は食堂から屋上に戻つてどうやって車を取りに行くか決めかねていた。下はあのゾンビ軍団 上は屋上しかない

「仕方ない。下から行くとしますか」

そう言つて最初に昇つた梯子の方に向かった。下を覗いてみると今まで集まっていた奴らはどこかへと行ったみたいだ

しかし、数体が梯子付近とその路地に屯っていた

「ん〜このぐらいなら槍で倒せるか……よっしゃ、そうと決まりゃあ行動あるのみだ」

そう言っつて梯子に手を掛ける。そして、ゆっくりと降りて、途中でジャンプし着地した

『アアアアアア』

着地した音に気付いたのかゾンビ共がこちらに向かってきた

「気色悪い声をあげてんじゃないよ！そら！」

そう言っつて槍を突き出し、一体のゾンビの頭に刺さった。すると糸が切れた人形のようにその場で崩れた

「はっ他愛も無い。そら！」

今度は後ろから掴もうとしていたゾンビを回し蹴りで吹っ飛ばした。ゾンビはそのままゴミ場に入った

「ゴミはゴミらしく、そこに居やがれ」

そう言っつて俺はそのまま路地を出た

〜大学内で一番大きい通り〜

「うわ〜こいつは……臭いな」

修が見たのは数百体という数のゾンビ共だった。恐らく、大学内で？まれた学生だろう

「こいつはちと厳しいな。他の道から行くとしますか」

そう言って表とは反対側の道を進み、隣の建物の敷地に侵入した

「よつと」

俺は塀を越えて着地した

『アアアアア』

ゾンビが来た

「ちっ、ここにも居やがんのか。それ！」

そう言って槍を投げた。

槍は吸い込まれるようにゾンビの額に命中し深々と刺さった

「よし、次行くぞ次」

そう言って槍を取り戻し、その場を去って行く

く学生駐車場

俺は無事、駐車場に辿りついた。

「俺の愛車は……あつた。無事だな」

そう言って自分の愛車ハンヴィーを見つけ出す。しかし、みよんな

事に周りの車はほとんどが火災を起こしていたり事故を起こしていたりしていた。

中には車内が真っ赤に染まっている車まであった

「酷いな・・・さて、行くとしますか」

そう言ってハンヴィーに乗り込む、エンジンは問題なく始動した

「よっしゃ、二人とも待つてなよ！」

そう言ってアクセルを踏んだ

（正門）

俺は正門に辿りついた。だが、正門にはたくさんとしか言いようが無いほどゾンビの集団で埋まっていた

「おいおい、どっかの進行パレードじゃあないんだからよ。ちったあ散っててくれよ」

俺が愚痴るように言う。しかし、車が通れるのはこの正門しかないのでどっちにしろここを突き抜けなければならなかった

「うーん、このまま行くとなんかフラグが立ちそうだから・・・
そうだ、こんな時こそ・・・」

そう言って持ってきたバックの中を漁る

「あつたあつた」

そうやって出したのは火炎瓶であった。俺はジッポで火炎瓶の紐に火を付けた

「よし、汚物は消毒じゃあああああ！！！！！！！！！！」

そう言ってアクセルを思いっきり踏んだ。

急加速で発進するハンヴィーその先には……あのゾンビ集団だった

そして、ぶつかった。ぶつかることにゾンビ共は跳ね飛ばされたり轢き殺されていた

「ふははは！！！！見る！人がゴミのようだ！」

某ジブリ作品の大佐が言っていた台詞を言いながらゾンビ共を殺したり燃やしたりしていた。そんなこんなで食堂の前まで辿りついた
しかし、修が通ったあの通りはゾンビ共の死体によって埋め尽くされていた

（食堂）

「うーす W A W A W A 忘れ物」

今度は某アニメの脇役が言っていた台詞を言いながら食堂に入った

「何やってるんですか？修さん」

美麻さんが頭に疑問マークを付けて言った

「ぬおっ!?!? すまん、ごゆっくり!?!」

「待って下さい!何がしたいんですか!?!」

「修、はしゃぎ過ぎだ」

秀治が俺の頭を叩いて言った

「いたた……だって、しょうがないじゃないか。電波を受信したんだから」

俺がそう言つと秀治は呆れたように首を振り、美麻さんは若干引きそうな顔で俺を見ていた。やめて!そんな目で俺を見ないで!

数分後、ようやく落ち着きを取り戻した俺は脱出の準備を始める

「秀治、飲み水とかはこのバックに入れてけ」

そう言つて空のバックを渡す

「OK、行つて来るよ」

そう言つて冷蔵庫に保存してある飲み物を取つて行つた

「美麻さんはこっちのバックに食糧を積んで来てくれないか?」

そう言つてもう一方のバックを渡す

「わかりました」

そう言ってお菓子屋やらパンやらを積んでいく

「さて、俺は……」

そう言っ武器の確認をする。現在使われたのは槍と火炎瓶である。

槍は耐久が少し減っただけだが、それでもまだ、使える状態であった。火炎瓶は10本から5本にまで減っていた

「うむ、いささか、使いすぎたかな……仕方ない、新しい武器を作るか」

そう言っ周囲を見渡すと、防犯用のためか棍棒が隅っこに置かれていた

「おっこいつは使えるな。槍がダメになった時、代わりに使おう」と

そう言っ棍棒を机の上に置いた

数分後、秀治と美麻さんが戻って来た

「修、こっちは完了したぜ」

「私もできました」

バックはパンパンになるほど詰め込まれたようだ

「こつちも準備OKだ。さあ、覚悟はできてるな？」

そう言ってニヤリと笑う俺

「俺はもちろんさ」

と秀治

「私も大丈夫です！」

と美麻さん

「よし、行くぞ！」

そう言って俺らはハンヴィーに乗り込んだ。そして、奴らの襲撃を受けることなく、無事、大学からの脱出に成功するのだった。

汚物は消毒じゃあああ！！！！（後書き）

いかがだったでしょうか？

まだまだ、文才能力が甘いですね。慢心せずこれからも頑張ってくださいと思っています！では

街の状況とメイドと機関銃

俺達は無事、大学から脱出した。そして、一番近い俺の家から寄る事になった。尚、美麻さんの両親は俺と同様海外で仕事をしているらしくこの時期は一人暮らしの状態だそうだ

なので、俺の家と秀治の家を回ることになった

↓国道↓

「こいつは、酷いな……」

秀治が言う

大学からそのまま国道に出た俺達、しかし、街は悲惨な状態だった。車は事故や火災を起こしており、店のショーウィンドウには血がべつとりと付いていた。そして、生存者が見当たらない。

まるで、ゴーストタウンのようだ

「街の人達はどこに行ったんでしょうか？」

美麻さんが言う

「ほとんどの人間がゾンビ化して生存者を追って行ったんじゃないか？ ちらほらとゾンビの姿は見えるけど、」

そのまま、町を通り抜けるようにして過ぎていく、途中、ゾンビが襲うと追いかけてきたがすぐに離されてしまい、うめき声を上げる

だけで立ち尽くしていた

「さて、まずは俺の家に向かうとするか」

俺が言う

「そういえば、修の家ってメイドがいるんじゃないっけ？」

秀治が言う

「ああ、そうだ。」

「もしかして、手遅れって可能性は……」

美麻さんが最悪の状況を想像する

「いや、家のメイドは特殊な訓練を受けていてな。ゾンビ如きに後れをとるはずはない。なんたって古知屋家最高のメイドとまで言われたからな」

そう言って笑う。琥珀はあらゆる軍事訓練を受けている。そのため、ちっとやそつとじゃあやられないのは俺が一番よく知ってるからな

「ついでに言う俺の家には銃があるからな。そこで装備を整えて、これからのサバイバルに挑もう」

「サバイバルって……」

秀治が苦笑いしながら言う

「というか。修さん、銃なんて持つてるんですか!？」

美麻さんが驚く

「ああ、家に飾ってある模造品もあるが、親父のコネでな。秘密裏に家に置いてつてくれたんだよ。多分、一年位は戦争を続けられるかもな。はっはっは!!!」

俺はからからと笑いながら言った。

親父のお得意様の中には軍関係者もいるので、友好の印に銃をプレゼントする事があるそうだ。そのおかげで、家には様々な武器が所狭しと置いてあるそうだ

そんな中、一番広い大通りに出た。そこを抜ければ修の家は目と鼻の先だった……が、世の中、ハプニングと言う物は付きものである。

「ん?何だあれ……」

秀治が後ろに何かがあるのを気が付いたようだ。俺は曲がった時に気づいていたが……

修達の乗るハンヴィーの後ろをタンクローリーが走っていた。しかもトレーラー型の大型車が

「修、後ろのトラックって生存者かな?」

秀治が言う

「どうだろうっ？だとしたら、向こうから何かしらの反応は（ガシヤアアアン！！）！！」

サイドミラーから後ろの状況を見ると、トラックは標識などをぶつた押しながら進んでいた。運転席の方を見ようとしてもライトが付いていて中の状況が見えないでいた

「？なんか、様子が変わですよ？」

美麻さんも気が付いたようだ

「ああ、確かにおかしいが、運転席が見えないからな」

俺が言った

「！修！もっとスピード上げろ！」

秀治が突然、大声で言う

俺はそれに伴ってハンヴィーのスピードを上げた

「秀治、どうしたんだ！？」

「あのトラックは生存者なんかいない……死体だけだ」

青ざめた顔で言う

どういう事だ？と思い、窓から顔を突き出して後ろのトラックを
視する

「……………！こいつはヤバイ！」

そう言っただけにスピードを上げた

「ど、どうしたんですか！？」

美麻さんが言った

「秀治の言う通りだ。あのトラック、死体が動かしてろぞ」

俺が後ろを見た時、丁度、ヘッドライトが届かない所まで来ていたため、運転席を見る事が出来たが、そこにいたのは生存者ではなく、ゾンビがトラックを操作していたのだった。

恐らく、ゾンビに襲われた後、何とかその場を逃げる事が出来たが途中でゾンビ化してしまい、今に至るって所だろう。しかし、厄介だこの大通りは大通りのくせに交差点が全くないのだ。そのため、途中でやり過ぎす事も出来ないでいた

「クソ！どうすればいい！」

俺はアクセルを踏みながら言った

「修、これ以上は出ないのかよ！？すぐそこまで来てんぞ！」

秀治が後ろを見ながら言う

「これが限界だよ！」

アクセルは全開に踏んではいるが、トレーラーに比べると馬力はちよっと少ない方だ。大してトレーラーはスピードこそ遅くは行くものの馬力は怪物並みに性能を持っている。そのため、直線的なこの大通りではトレーラーが有利となるわけだ

「くそ、もう駄目なのか!？」

秀治が言う

その時だった。どこからか銃声が聞こえた、しかも警察が使用する銃ではなく明らかに連射音が聞こえたしかも、めっちゃ速く

銃声が聞こえたかと思うと、トラックのタイヤがパンクし、その衝撃でよろめいた車体は大きくバランスを崩し、横倒しに倒れた。

「!？」

俺以外の二人が何が起きたか分からない状況のようだ

「真打ちの登場ってか？」

俺はニヤリと笑いながら言った

「修!まだ、追いかけてくんぞ!」

トレーラーは横倒しになってもそのスピードを落とす事はなかった。

「おし!家が見えてきた!あそこに入りゃあ俺達の勝ちだ!」

俺が言った。

数メートル先には俺の邸宅が見えていた。

「よし！曲がるぞ！掴まれ！どっせいいいいい！！！！！！！！」

そう言っつてハンドルを限界まで回した。ハンヴィーはドリフトするように家の門を潜りぬけた。その数秒後にトレーラーが通り過ぎていき……………その先で大爆発を起こした

「ふう〜間一髪つてのはこの事だろうな〜」

秀治が言った

「ああ、今回は運が良かったよ。家のメイドに感謝しな」

そう言っつてハンヴィーを降りる。そこには一人のメイドが主の帰りを待っていた

「お帰りなさいませ。修様」

琥珀がお辞儀をして言った

「ああ、琥珀、ただいま。無事だったようだな」

「当たり前です。これでも、古知屋家のメイドをしているのですから」

「そうだったな。よし、門を閉めよう。あの化け物共が入ってこないようにな」

「承知しました」

そう言つて俺と琥珀で門を閉め、破られないようにバリケードを作つた

（数分後）

「では、改めまして、古知屋家のメイドをしています。矢代 琥珀と申します。」

琥珀が自己紹介をする

「あ、俺は、上佐和 秀治って言います」

「私は古城 美麻と言います」

そう言つて二人も挨拶をする

「琥珀はさっきも言つた通り、家に仕えるメイドだ。訓練も受けるから、多少、無茶なことでもできる。さっきの攻撃だつて琥珀がやった物だ」

俺が言つた

「ええ！？マジかよ！」

秀治が驚いた

「修様、私にも限度があります。そこを弁えて頂きたい。まあ、あの距離など私の愛用する銃ではどうってことないですけど」

琥珀が反論した

「因みに、どんな銃を？」

美麻さんが言う

「これです」

そう言ってどこから出したのかわからないが、外見はバレットM8
2A1だったが、それを改造してフルオート射撃とボックスマガジ
ンを付けたようだ。さらに、撃ちやすいように銃身も短く切り詰め
てある

「これは？」

秀治が言う

「これは、XM-101というフルオート型の狙撃兼機関銃です」

琥珀が言う

「は、こんな初めて見た」

秀治が言う

「すごいですね。琥珀さん」

美麻さんが言う

「いいえ、それほどでも、これも修様のためですから」

「まっそんな事よりも家の中に入ろう。戦の準備をしなきゃあな」

「無視ですか・・・せっかく、主の期待に応えようとしたのに・・・
・・・分かりました。お二人ともこちらへどうぞ」

琥珀が若干拗ねたように言うが、口元は笑っていた。久々の射撃と主が無事に生還してきた喜びと一緒にこみ上げての笑いなのだろう。そして、俺達は家の中へと入って行った

こうして、危機を切り抜けた俺達であった

街の状況とメイドと機関銃（後書き）

銃紹介

X M - 1 0 1

使用者 矢代 琥珀

概要

外見はバレットライフルに似ているが、中身はとんでもない化け物である。まず、フルオート射撃機能を取り付けて、狙撃銃だけでなく機関銃としての役割も果たせるようになっていく

そのため、マガジンも機関銃用のボックスマガジンとなっている。

さらに、琥珀自身が扱いやすいように銃身を切り詰めている。これによる反動がすさまじいが琥珀は難なく扱えている

弾は、本来のバレットと同じ、12・7mm弾を使用している

念願の銃 取ったどー！！！

俺は、自分の家で琥珀と合流した後、秀治、美麻さん、琥珀と共に家に入った。そこで、装備を整えてこれからのサバイバルに挑もうとしていた

くエントランスく

「うわ〜でかいな〜」

秀治が言う

「本当ですね〜」

美麻さんが言った

「家の方はお袋のデザインでな。なんか、イギリスの宮廷をイメージしたんだと、俺には分からんがね」

「修様、その発言はどうかと思いますよ?」

琥珀が言う

「いいんだよ。本人がいなけりゃあ」

「そうですね」

「二人とも、付いて来い。琥珀、お前は食糧の準備と自分の車を整備しとけ、ここは捨てると思うし」

俺が言った

「了解しました。では、二人とも、後ほど」

「「あ、ああ（え、ええ）」」

両者ともそれぞれの反応をした

「ほら、二人ともはぐれないようについて来い。武器庫はこっちだ」

そう言つて二人を地下室に案内する

（地下室）

俺達は車庫より下の階の地下に来ていた。ここは、親父がよく俺を連れて来てはいろんな銃を見せたり、撃たせたりしていた。もちろん、射撃場だつてある

「は〜広いな〜」

秀治が言う

「ここは、武器保管庫だからな。ありとあらゆる銃が置いてある。

さあ、お披露目と行こう」

そう言つて近くのスイッチを押した。

すると、一部の壁が凹んでその周りの壁が裏返しになるように次々と動いて行く、例で言うなら映画のスパイアクションで秘密基地に

作られた武器庫のような物だ。そして、裏返った壁には、世界中の名銃が飾られていた。

もちろん、作り物ではない。れっきとした武器だ。持てば重量はあるし撃てば、反動だってある。全部が本物だ

「うつひょー！！！！これ全部本物！？」

秀治が興奮しながら言う

「ああ、友好の印に送られてきた物だ。間違いはないぜ？」

ニヤリと笑いながら言った

「どこぞのスパイ一家ですか？この家は」

美麻さんは呆れたように言った

「すごい！すごい！M870とかM9とか全部、本物だ！！修！お前と友達で良かったよ！！！」

そう言って手を上下に思いっきり振りながら言った。って言うか痛い

「分かった分かった。手を離してくれ秀治」

「おっと、悪いね」

「さて、二人とも、本物で撃った事はあるか？」

俺が聞いた

「私は、銃に興味はそこそこありましたが実銃は撃った事がありません」

美麻さんが言う

「俺は、ハワイに行った時、射撃場で撃たせてもらった事があるくらいかな」

秀治が言う

「ふむ、rookieが一人、成り上がりが一人か。なら……」

そう言うて俺は銃が置いてある部屋に入っていく。そこで、二丁の銃を取り出す

「ほい、二人とも、まずはこの銃からだ」

そう言うて二人に手渡した

美麻さんの方は9mm機関拳銃という国産のサブマシンガンだ。日本のミネベア社が作りだしたサブマシンガンで主に自衛隊指揮官や砲兵などが主に使っている銃である。開発当初、UZIに似ていた事もあり許可を取っていなかったため本家からクレームが来た事もある銃だ

秀治の方はAK-47という旧ソ連が作りだした傑作アサルトライフルである。現代の紛争においても反乱軍が使用する事から別名革命の銃とも言われる。安価で単純構造のためコピー品が流れている。現在でも約7000万挺ほどが使われている。銃声がうるさく伏せ

撃ちが出来ないとの指摘もあるが信頼度が高い銃だ

「おっほー！AK-47！革命の銃！」

秀治はそこで踊るかのように回っていた

「これは……自衛隊の銃でしたっけ？」

美麻さんが言う

「その通り、そいつは9mm機関拳銃と言ってUZIと似た構造だが、扱いやすく女性でも安心できる銃だ。精密射撃はできないが、ばら撒きにおいてはサブマシンガンの中じゃあ一番かな」

俺が説明をする

「美麻さん、銃の扱いは分かる？」

俺が言った

「と言ってもネットで見たぐらいですから、そこまでは……」

「そうか、じゃあ、弾薬の補給……つまり、それ自体が弾切れを起こした時、マガジンの入れ替えは分かるかい？」

「はい、そこまでなら」

「そうか。じゃあ、ちょっと先に言った所に射撃場があるから、そこで練習していくといい」

「修！おれもいいか？」

「ああ、好きにどうぞ」

「ヤッホー！！」

秀治はウキウキしながら進んでいく

「あー」

「ん？どうした、美麻さん」

「弾はどれを使えばいいんですか？」

「ああ、それなら、ハンドガンとかと同じ9mmパラベラム弾を使えばいい、ほら、あそこの弾薬箱にそれぞれ、振り分けをしてあるから、見に行つて見るといい」

そう言つて指さす方向には弾薬箱が大量に置かれていた。そして、間違つて使わないようにそれぞれの口径で色分けをされていた

「分かりました。それじゃあ、練習してきますね」

「ああ、好きなだけ、撃つてきたまえ」

そう言つて一旦分かれる

「さてつと、今の内に銃を出しとくしますかね」

そう言つて隅っこに置いてあつた大型のボストンバックを取り出す、

このバックは軍でも使用されていて壊れないとの評判らしいと親父が言ってたような気がする。

「とりあえず、いれるだけいれるか。途中で必要になっても帰られるかどうか分からんしな」

そう言つて積み込む作業を続けて行つた

〈数分後〉

「ふいふ終わつた終わつた」

俺の目の前には大量のポストンバックと弾薬箱が置かれていた

「修様、こちらの作業が終わりました」

琥珀が来たようだ

「おう、自分の車は大丈夫だったか？」

「はい、エンジンengineにも問題はありません。と言つか全部積み込んだのですか？」

「ああ、俺とお前の車なら問題ないだろ？」

「まあ、それはそうですね、大雑把ですな」

「いふな。聞いてて悲しくなるから」

「分かりました。」

「そうだ。俺のハンヴィーも改造しとくか。琥珀、秀治と美麻さんは射撃場に居るから終わって出てきたら、積み込みの作業をやってくれ」

「了解です」

そう言うて俺は車庫へと上がる

（車庫）

「さて、まずは……」

そう言うてハンヴィーの上部にM134ミニガンを取り付ける。こいつは米軍で最も使用されている兵器の一つで破壊力は折り紙つきだ。こいつで撃たればどんな奴も文字通り塵となる

そして、ドアは装甲板が付いているドアに変換し簡単には開かないようにしてある。窓も防弾ガラスに変え、タイヤは軍用タイヤに変換する

ん？なんで、そんな装備を持つてるかって？答えは簡単、前回も話したがこのハンヴィーは誕生日の日に軍関係者がくれたものだがオプシオンで米軍で使用されている物と同じ物を一緒にプレゼントされた。それだけの話だ

「よし、こんな物かね」

そう言いながらさらにハンヴィーの調整をしていく俺であった。

街は崩壊の一途を辿り、死者は生者を追いかけて食らう、外の世界はまさに地獄絵図と化していた。

街の状況とこれからの方針

前回、俺の家で武器を確保した後、俺達はある準備を整えていた

く修邸 車庫く

「フンフンフンフン」

俺は鼻歌を歌いながらハンヴィーの改造を行っていた。

「修様、秀治様と美麻様が準備ができたそうです。」

琥珀が来た

「OK、じゃあ、居間の方に案内してくれ。俺も行くから」

「分かりました」

そう言って車庫を出る琥珀

「よし、後は、この弾薬を入れればいいな」

そう言ってハンヴィーにミニガン用の弾薬を押しこんだ

「それじゃあ、行くとしますかね」

そう言って俺は車庫を後にした

く居間く

居間に着くと秀治と美麻さんと琥珀がお茶を楽しんでいた

「紅茶淹れるのうまいですね。琥珀さん」

美麻さんが言う

「これは、メイドとして当然のことです。美麻様も淹れてみてはどうですか？」

琥珀が言う

「ええ〜？私なんて素人同然なんだよ？無理だよ〜？」

と苦笑いしながら言った

「そうでもないですよ。紅茶を淹れるのはさほど、難しい事ではありません。練習すればきつとうまい紅茶が淹れられるようになりますよ」

そう言ってニコツと笑う琥珀

「分かった。挑戦してみる！」

そう言ってポッドを持つ

「じゃあ、俺が飲む役をやるうかね」

そう言って俺が出た

「修さん、お願いできますか？」

「応！任せろって！」

そう言って俺は秀治の隣に座る。秀治は紅茶ではなくお茶を飲んでいるようだ

美麻さんがカップに紅茶を注ぐ、コポコポと音を立てながらカップの中を満たしていく

「どござ

そう言って俺に紅茶を渡す

「どれどれ・・・」

そう言って紅茶を口に含む

「・・・どうですか？」

美麻さんが恐る恐る聞いて来た

「うん！うまい！さすがに琥珀には負けちゃうが、素人が淹れた紅茶とは思えないうまさだな。美麻さん、素質があるんじゃないか？」

俺は感想を言った

「本当ですか！？良かった〜やりましたよ！琥珀さん！」

そう言って琥珀の手をブンブンと上下に振りながら言う

「良かったですね。美麻様」

琥珀も笑って言う

「さて、和んだ所で話し合いと行こう」

俺はさっき飲んだ紅茶を置いて皆に向かって言った

「話し合い？」

秀治が言った

「ああ、これから先、どんな事が起こるか分からない。ましてやこんな騒ぎだ。イカれた奴が出て来てもおかしくはないだろうよ。」

俺が言った

「確かに、修様の言う通り日本で、いや、世界中でこんな騒ぎになっ
ているんですよ。だとしたら、正気を失っている輩が出て来ても
おかしくはないはず……」

琥珀が言った

「で、でも、助けを待ってる人だっているんじゃないですか？あんな
な化け物が出てきたら為す術が無いと思って立てこもる人だってい
るはずですよ」

美麻さんが言う

「でも、美麻さん、こんな状況だ。逆に助けたとしてもその内、裏切るって方向もあり得るよ。」

秀治が言う

「でも、目の前で助けを求めている人がいるならそれを助けるってのは道理じゃないですか？それこそ、人としておかしいと思います」

美麻さんが反論した

「まあまあ、二人とも熱い論争は置いといて、今は何をやるべきか、じゃないか？」

俺が言った

「た、確かに」

「そ、そうだな。すまなかった」

二人は俺に謝った

「いや、分かってくれれば結構さ。さて、最初は情報だ。琥珀」

「はい、修様」

琥珀はそう言ってどこから取り出したか分からないが一台のノートパソコンを取り出す

「修さん、これは？」

「これは、非常時用のパソコンだ。これなら、電波の届く限り情報を入手できるからな。それにこの騒ぎは一月や二月では収まらないと思うし、最悪テレビも使えない状態になるのではないかと俺は思うね」

「? ? どういう事だ? 修」

秀治が言った

「このゾンビ騒ぎ、そう簡単に収集が付くと思っっているのか? 答えはNOだ。前例が無い上に歩く死体なんて科学的根拠が無いからな。仮に何かの病原菌だとしてもこの手はワクチンが無いってオチだからな」

そう。歩く死体なんてものは映画の世界でしかなかった事、科学的根拠が全く存在しないのだ。それに新型のウイルスだとしても、その元を断たねばならないが、今の俺達にそこまでの力はない。ならば、どうするべきか。答えは生き残る事だ。正確な情報を仕入れ、それを元に行動を開始していく。そして、いつになるかは分からないがきつとワクチンができるだろうその日まで生き残ればいい話だ。

「だったら、どうするんですか? どこかに閉じこもったとしてもやられるのがオチだと思います」

美麻さんが言う

「美麻さんの言う通りだ。仮にここに閉じこもったとしよう。食糧などの備蓄も入れたとして持つのはせいぜい、8ヶ月〜12か月つて所だ。それに武器・弾薬も無限にあるわけじゃないしな。」

俺が言った

「確かに……でも、どうするんだ？世界中でこんな風になるなら、安全な場所はないって事か？」

秀治が言う

「いや、確かに世界中で起きたとは言っているが、やられているのは主に人口が多い場所の国だ。島国や無人島だって生き残る可能性は残っているぞ。」

「だとすると、日本を出るといふ事になるのか？」

「ああ、だが、それは最終手段だ。日本だって島国だ。沖縄とかはまだ、安全じゃないか？あそこにあるのは自衛隊じゃなくアメリカ軍なんだからよ。それこそ、軍人が統制を行ってるかもしれない。」

俺が言った

「しかし、修様、そう言う所は速く収集を付けて外部からは入れないようにしてるんじゃないですか？」

琥珀が言った

「琥珀の言う通り、それも一理あるが可能性は捨てたもんじゃない。それはそうと情報を集めなきゃ始まんないな。琥珀、テレビを付けてくれ」

「分かりました」

(親父やお袋は……まあ、あの二人なら早々にやられる事はないだろう。なんたって武装夫婦なんてあだ名が付いてるんだからな)

俺も自分の両親の事を思っていたが、現実に戻り、話を進める

「これが、現在の状況だ。大学で言ったかもしれないが、警察は当てにならない。むしろ、自衛隊の方が生き残る確率は高い」

「だとしても、どこに向かえばいいんですか？この状況じゃあどこに避難しても同じですよね？」

美麻さんが言う

「確かにそうだが、閉じこもってるって訳にもいかん、だったら、秀治の家に行つて、両親の安否を確認した後、船で脱出すればいい話よ」

「え？俺ん家？」

秀治が言った

「ああ、このメンバーで目的が残ってるのはお前だけだからな。お前の両親を確認した後、そこら辺に残ってる船で脱出した方が話が早い」

「そうだな……よし、修、次の目的地は俺の家だ！」

「了解……美麻さんもそれでいいよな？」

「はい、私の両親も気になる所ですが、修さんと同じ海外に居るの
で連絡が取れません。ですから、これからも宜しくお願いします」
そう言っって頭を下げる美麻さん

「こちらこそ、よろしくな。さて、話し合いが終わった所で二人は
仮眠を取っていてくれ。この先、安心して寝る事なんて難しいだろ
うからな」

「修や琥珀さんはどうするんだい？」

秀治が言った

「何、俺達も仮眠は取るさ。その前に準備しなきゃあいけない事が
あるからな」

「そうか。無理はするなよ？俺や美麻さんはお前のおかげで生き残
れてるような物だからな」

「分かってるって、それじゃあ琥珀、二人を寝室に案内してくれ」

「分かりました」

そう言っって居間から三人が抜けていく。俺はソファーに座り、再び
テレビを見る

「さて、この先、何が待ち受けているだろうね」

そう言っってテレビを見る俺だった

そうだ 街へ行くころ

俺達は俺の家で仮眠をした。終わりの始まりの一日目が終わった。そして、二日目の朝が迎えた

「ふわ〜、」

俺は欠伸を欠きながら食堂についた

皆はすでに起きていたようだ

「修、おはよう」

「修さん、おはようございます」

二人が俺に気付いてあいさつした

「おはよう〜二人ともよく寝られたか〜？」

「ああ、ばっちりだぜ」

「私もよく寝られました」

「そうか。これで、支障をきたす事はないな」

俺が言った

「そうですね。」

琥珀が朝食を持って現れた

「おはよう。琥珀」

「おはようございます。修様」

そう言って机の上に朝食を置く

その量は半端ない。まあ四人で食べるんだからな

「うわ〜結構な量だな〜」

秀治が言う

「何、腹が減っては戦はできぬってよく言うだろ？」

俺が言った

「確かにそうですね。」

美麻さんが賛同してくれた

「じゃあ……」

「……いただきます」「」「」

そう言って朝食を取る。

朝食の風景？何それ、おいしいの？

そして、皆で身支度を始めた。と言っても秀治と美麻さんはすでに終わらしていたらしく俺と琥珀だけ着替えることになった

「じゃあ、琥珀 戦闘服でいくぞ」

「分かりました」

そう言ってそれぞれの部屋に入る

（修の部屋）

「さてっと、やっぱりあの服装が良いかね」

そう言ってクローゼットの奥からある一式を取り出す

上下の迷彩服 マガジンポーチ 最新型の防弾チョッキ

米軍部隊で使用されている一式と同じものである。なぜあるかって？それは（以下略）

そして、数分して着替え終わる

「よし、こんな物かね。えっと俺専用の武器は……」

そう言って机の上に備え付けてあるスイッチを押す

すると、机の隣の隙間から階段状に隠し箆笥が現れる。言わずもがな修専用の武器が収まっている。中には二丁のソウドオフショットガンと銃剣付きのモシナガンが収まっていた

そして、これをうまく使いこなせればそれだけで敵を圧倒する事が出来る上級者向きの銃でもある。

「さて、お前らの出番だ。しっかりと働いてくれよ?」

そう言ってモシンナガンとミシガン（命名 修）を取り出し、準備を整えた

部屋を出ると同時に琥珀の方も準備ができたらしく同時に出る形になった

「おう、琥珀、やっぱり凜々しいなその姿は」

琥珀の姿はメイド服からマフィア風のスーツに入れ替わった事だ。ただ、銃はそのスーツに似つかわしくないあの対物ライフルを背負っていた

「久々に着ましたからしつくりときますね」

琥珀が言った

因みに琥珀が持っている対物ライフルの名前はジャッカルだそうだ。何でも、有名な賞金首の名前なんだと

「んじゃあ二人の所へと向かいますか」

「そうですね」

そう言って二人が待つエントランスへと向かった

くエントランスく

「お前ら、どこぞの軍隊とマフィアだよ」

着いた早々この言葉が出た。まあ、予想はしてたけどね

「何、ただの戯れだ。気にするな」

「気にするよ！美麻さんを見るよ！茫然としちゃってるだろ！」

「（。o。）ポカーン」 美麻さん

「H A H A H A！！！気にしたら、そこで試合終了だよ」

俺が言った

「はあ〜まあいいや」

秀治はため息をつきながら言った。どっか具合でも悪いのか？

「それより、もう出発するのか？」

「ああ、ここに長居は無用だ。さっさと出て他の生存者でも探しに行くとしますかね」

そう言って俺達は車庫に入って行く

〈車庫〉

「そういえば、ハンヴィーで移動すんのか？」

秀治が質問した

「いや、琥珀は自分の車で運転するって言ってたからな。それに生存者がいても全員が乗り切れる訳じゃないだろ？」

「うーん、確かに……」

「あっそうそう。美麻さん」

「なんですか？」

「昨日渡したパソコンあるよね？あれ、改造を施してもいいから美麻さんには情報を集めて貰いたい」

「はい、分かりました。と言ってもネットは繋がられるんですか？」

「ああ、パソコン自体にも改造はある程度してあるが、俺の改造なんてたかが知れてる。だったら、パソコンに強い美麻さんに任せようと思っただけ」

俺が説明した

「分かりました。お役にたてるように頑張っていきます」

美麻さんが言った

その時、丁度、琥珀が乗る a n g e e l がやって来たようだ

「……………こいつは……………」

「すごい……………」

秀治と美麻さんは啞然としていた。そりゃあそうだな。目の前に”
軍用車両” がありゃあ

琥珀が乗りまわしている a n g e e l とは L A V - 2 5 の事であった。
しかも、琥珀独自の改造が施されており本来の人員より、大幅に乗
せることができるようになってる。武装は 2 5 × 1 3 7 m m 口径
の M 2 4 2 ブッシュマスター砲 を一門装備している

「なんで、こんな物が？」

「それは、私から説明します」

琥珀が a n g e e l を降りて言う

「と云うと？」

「実は、このメイドをする前は武器商人として働いていました。
その時に移動用として使っていた物をここに持ち込ませてもらって
いました」

琥珀が説明する

「ああくだから、そんな服装なんですわね」

秀治が納得したように言う

「まあ、そんな所です」

「さて、武器弾薬はそれぞれの車両に乗せてある。二人はどっちに
乗りたい？」

俺が言った

「うーん、オタクの俺としては迷う所だな」

秀治はニヤニヤとしながら言う

「私は、琥珀さんの方に乗ってみたいです。」

美麻さんが言う

「ここは、レディファーストだな。秀治」

「むう、仕方ない」

「決まりだ。行先はどうする？」

「とりあえず、警察署に向かわないか？」

秀治が言う

「どうしてだ？」

「いや、警察署ならある程度は把握してるかもしれないし、もしかしたら、生存者がいるかもしれないぞ?」

「ん〜そうだな。展開的になんか面白くないが、行って見るとしますかね」

俺が言った

「修様、不謹慎ですよ」

琥珀が言う

「んだよ。そう言う琥珀はどうなんだ?」

「私は………実に充実していますよ」

笑顔で言う

「琥珀さんの方が危ないですね」

美麻さんが言う

「まあ、ともかく出発するでしょう」

そう言って二両の車に分かれて乗る

ハンヴィーもangleも問題なくエンジンが始動した。そして、車庫のシャッターを開ける

「おし、行くぞ!」

そう言ってアクセルを踏む

（広場）

門の方にはバリケードがあるため、ゾンビ共は入ってこれないでいたが………

「おいおい、どこぞの無理ゲーか？」

門の前にはいつの間にか40〜60体のゾンビ共がいた。きっと、爆発音を聞きつけて来たのだろう。そして、こちらの存在に気付くと一斉に門に寄って来た

『アアアアア』

「ったく、容赦しないな。これじゃあhardと言うよりLunaだな」

俺が言った

「修、それ東方だよ。」

秀治が突っ込む

「おっといけね。じゃあ、秀治、銃座の方についてくれるか？」

「おk、把握」

そう言って助手席から銃座に移る秀治

「撃ち方は分かるよな？」

「もち」

その時だった。門の方でけたたましい音が立った。ゾンビ共が門を破って中に侵入して来たのだ！

『アアアアアアア』

「行け！秀治！」

「OK！」

そう言っつてM134のトリガーを押す、砲身がゆっくりと回転し始めやがて、弾が吐き出される。毎分2000〜4000発という鉄の雨がゾンビ共を襲う。抵抗もなく塵となって消えていくゾンビ共

「ははは！！！見る！ゾンビ共が塵のようだ！」

秀治は笑いながら言う

「おま、それ前に使ったネタ……」

俺が言った

数分後、ゾンビ共の死体は文字通り塵となっていた

「ふう〜すっきりした！！」

秀治は清々しい笑顔で言った。全く、狂ってるのは俺だけじゃあないって事か？まあいい、それはそれで面白いじゃないか

「では、気を取り直して出発進行！」

そう言って俺達は家から出る。前回、タンクローリーが事故を起こしたため本来、警察署に繋がる道とは反対の道から出ることにした

こうして、無事、出発する事が出来た俺達であった

そつだ 街へ行こう（後書き）

銃紹介

ソウドオフショットガン

狩猟用の散弾銃をストックと銃身を切り詰めたものでサイズのハンドガンで収まるような感じである。しかし、弾は二発しか入らないので撃つ度にリロードが必要になるショットガンなのだ。

モシンナガン

ロシア帝国陸軍大佐のセルゲイ・イヴァノヴィッチ・モシンとベルギーの銃器メーカーである（エミールとレオンの）ナガン兄弟社が設計したボルトアクション式小銃。

ロシア帝国の制式小銃として1891年に採用。日露戦争、第一次世界大戦、ロシア革命など、ロシア帝国からソビエトへと移り変わる時代と共にあり続けた。1930年には近代化を施したM1891/30の生産が続けられ、第二次世界大戦でも主力小銃として大量に生産された。第二次大戦後は、AK-47の採用で主力小銃の座を譲ったものの、高威力と命中精度を生かして狙撃銃として使われ、1960年代にドラグノフ狙撃銃が後継となるまで第一線で使用され続けた。

ゾンビ共の特性

前回のあらすじ：準備は整った。出撃だ

（修邸前）

「ウラウラウラ！！！！この死体共が！！！」

どうも、現在ハンヴィーを運転している修です。じつは、悩み事が出来てしまいました。親友である秀治君がミニガンをぶっ放しながらゾンビ無双を展開中です。しかも、楽しそうにヤツテいます。どうしたらいいのでしょうか？

「秀治、そろそろ変われや、お前だけずるいぞ。」

俺が言った

「良いじゃんかよ。修だって轢き殺したりしてんじゃん。」

「そいつはそうだけだよ。やっぱ、銃を撃ってなんぼでしょ。」

俺が言った。いや車で轢き殺すのもありかもしれないけど、ただ、轢くだけじゃあね……。分かるっしょ？え？分からない？

「はいはい、だったらどこかで休憩に入るか？」

「だな。え〜とこの辺だと……。」

そう言ってカーナビを点ける。今来ている道は本来の警察署に向か

う道路の反対側を進んでいる。理由は（以下略

「修様、休憩でしたらこの先にある。スーパーはいかがでしょう？」

無線で琥珀で提案して来た

「おっ場所は分かるか？」

「はい」

「じゃあ、先頭を走ってくれ。俺は着いて行くから」

「分かりました」

そう言うと琥珀の乗る *angel* が俺らのハンヴィーを追い抜いた。

「よし、今度は俺がやるからな。秀治」

「チエツ、分かったよ」

秀治は助手席に座りながら言った

（数分後、床主スーパー）

この床主スーパーは床主市でそれほど大きくはないが昔からあるスーパーだ。そこまででかくはないが近所にあるため俺も、昔はお世話になった場所だ

そして、なぜかゾンビ共はいなかった。

「さて、少しきゅ（ドカーン！！）おいしいい！！！！！！何やっっちゃってんの！？琥珀さーん！」

秀治に休憩時間を言おうとしたが、その前にangelがスーパーに突っ込んでいた。俺はすぐさまハンヴィーを降りてangelに向かった。

丁度、angelから琥珀が出て来た

「おい！琥珀！何やってるんだよ！」

俺が言った

「すみません、ブレーキとアクセルを踏み間違えました。テヘツ」

「なんだよ。それ！今どきおじいさんやおばあさんがやりそうな事をやっちゃってんの！？」

俺は突っ込んだ。っていうか。琥珀ってあんな顔もできるんだな。思わずグツときちゃったぜ。この野郎

「ふえ〜ん、何が起きたんですか〜？」

後部のハッチから美麻さんが出て来た。しかも泣きながら、あんな事故を起こしたってのに美麻さんは無事みたいだ。ついでにいうとパソコンも無事だ

「美麻さん、無事で良かったよ。家の馬鹿が迷惑かけて申し訳ない。」

俺は謝った

「え！？い、いいですよ。修さんが謝る事じゃあないですし、それに、私も怪我をしてませんから」

美麻さんは慌てて言う

「この通り、修様も謝っていますので、ここはお願いします」

琥珀が言う

「おい、事故を起こした当事者が言うんじゃあねえよ。締め上げんぞ」

「あらあら、怖い怖い」

琥珀はどこ吹く風だ。むかつく

「ま、まあ、無事だったんだし、良かったじゃないか。それより、休憩しようぜ」

秀治が言った

「確かにそうだな。よし、琥珀、お前は罰として皆に飲み物を取って(盗って)来い」

俺が言った

「分かりました。もとはと言えば私の責任ですからね。それとなんか文字が違うような」

「気にするな」

「そうですか。では、行ってきます」

そう言って琥珀は壊れた部分からスーパーの中へと入って行った

「よし、じゃあ美麻さん」

「はい？」

そう言って首を可愛らしく傾げる。んゝ性欲を持て余す

「パソコンの方は改造できた？」

「あっはい、粗方できました。システム自体も軽い物だったんで、改造してスーパーコンピュータ並みに上げてみました。」

さらりとすごい事言ったな。スーパーコンピュータ並みだって？アメリカの心臓部とも言えるくらいのシステムに上げましたよ。この子秀治は口を開けてポカーンとしている

「そ、そうか。じゃあ、この辺の地図とかは出せるか？」

「はい、ちょっと待って下さい」

そう言ってパソコンを開き、カタカタと打ち込んでいく

「これ……ですね。どうぞ」

そう言っつてパソコンを渡す美麻さん

「ありがとう。どれどれ……………」

そう言っつて俺はパソコンを見る。丁度、現在位置を中心にして、半径1.5キロが出されていた。東には俺の家があり、更にその向こうには橋を挟んで床主警察署があった。北には藤美学園という高校がある。西には俺達に通っていた。日本技術大学がある。

「修、どういうルートで行くんだ？」

秀治が言っつた

「そうだな…………俺に家から東の途中はタンクローリが横転、炎上してるからな。だとしたら藤美学園の方に向かって回り込む形かな。そうすれば、床主大橋とは別に御別橋の方から抜けられるだろうな。」

「なるほど、それに伴っつて障害はあるか？」

「そうだな。これは憶測だが橋は警察が封鎖してると思う。それにイカレタ奴らだな。多分、街の中心は暴動やら何やら起きてるだろうしな。」

俺が言っつた

「でも、なんで、警察が橋を封鎖してるんですか？」

美麻さんが言っつた

「簡単だよ。橋を中心としたら警察署の方はまだ、ゾンビ共が現れていないんじゃないか？それか、拡大を防ぐためか。だな」

秀治が言う

「それと、あのゾンビ共、目は見えていないぜ。多分」

俺が言った

「え？どういうことですか？」

「推測だが、あいつらは視力とかの感覚を失う代わりに聴力が以上に高いかもしれないな。現に目を合わせていないのに一人、こっちに向かって来てるぜ」

『アアアアアア』

そう言っつてソウドオフショットガンことミシガンをゾンビに向け構える。ゾンビは一步一步ゆっくりと歩きながらこちらに向かって来ていた

「ヒッ！」

美麻さんは驚いた

「シッ静かに」

そう言っつて俺は美麻さんの口を塞いだ。秀治も合わせるように静かになった

俺はもしもの時のためにミシガンだけは構えていた……が

「？」

美麻さんは訳が分からないといった顔していた

(やっぱりか……思った通りだ)

俺は今の動きを見て確信した。どういう理屈が分からんが、こいつらは耳が良くなっている。その代わり視覚などの感覚が無いに等しく、現に俺の方を見てはいるが全く反応しないのである

「お疲れさん、実験は終了した」

そう言ってミシガンを撃つ、12ゲージの弾がばら撒かれて行く、近距離だったため上半身が吹っ飛んだようだ

「これで、確信した。こいつらは音に反応するんだ」

「ああ、俺も見て分かったよ」

秀治が言った

「これからは、あまり音を出さないようにしよう。大きければ大きいほどこいつらは大群になってやってくる」

「そうですね。気お付けましょう」

「じゃあ、一旦休憩だな。」

そう言って休憩を取ることにした俺達であった

ゾンビ共の特性（後書き）

あらすじの方で書いていなかったのですが、一応原作キャラもだそうと思っています。そして、時間軸が若干違うため、矛盾している時もあるかもしれません。ご了承ください。

皆で行けば怖くないさ

(前書き)

最初は別視点で行きます。

皆で行けば怖くないさ

（床主発電所 篠田視点）

「撃て！撃て！相手を人間と思うな！」

隊長が叫びながらアンデット共に銃弾を浴びせてく。他の隊員達も自分の持っている銃で奴らに発砲している

自衛隊員の標準装備は89式小銃という国産物の銃である。しかし、重装備兵などはMINIMIという分隊支援用火器を持っている。もちろん、私の隊にも支給されている。

「もうどれだけいるのよ」

綾瀬が言った

持っているのは親友である綾瀬あやせ 薫かおるだ。普通なら機関銃なんて代物は女性が使うべきではないのだが、なぜか彼女は見事に扱えているのだ。まあ、そこは気にしないでおう

私も自分の愛銃89式でアンデット共を撃ってはいるが如何せん数が多すぎる。一体、どこから湧きでているのか気になってしょうがないのだ。しかも、弾が乏しくなってきた。中にはハンドガンで撃っている者までいた

「くそ！これじゃあ、ギリ貧あやせだな。俺について来い！ここは持たん！」

隊長である小ノ牧三等陸佐が大声で言う。

「綾瀬！行くわよ！」

「あ〜ん、待つてよ〜篠田〜」

綾瀬が走りながら言う

他の隊員達も走ってはいるようだがこちらにも犠牲者がいるようだ。その証拠に自衛隊員の格好をしたアンデットの姿がある

「隊長！どこに向かうんですか！？」

私が言った

「この発電所は捨てる！このままじゃあ我々があいつらの仲間入りになる！だったら、今は退くだけだ！」

隊長が言う

「しかし！本部の命令ですよ！」

「なあに、人間、生きていれば何とでもなる。無理にやろうとしたってこちらがやられるだけだ。だったら、しっかりと準備を整えて今後に備えればいい。」

そう言って笑う

「分かりました。だったら、私もついて行きます。」

私が言った

「ふえくん、隊長く私達だけになりましたよ」

綾瀬が言った。って言うかよくもってるわね

「何!？」

隊長が言う

確かに周りには小ノ牧隊長、私、綾瀬の三人しかいなかった。他の隊員は無事だろうか？

「隊長、どうしますか？」

私が言った

「仕方あるまい、ここは我々だけで逃げよう。あそこにバンがある！それで脱出だ！」

隊長が指さす先には発電所の作業用のバンが止められていた。それほど、大きくはないが三人なら十分な大きさだ

「よし、私が動かしてくる！君達はここで防衛してくれ！」

「了解（しました）！！」「」

そう言って私と綾瀬はその場に留まりアンデット共に向いた。奴らはそれほど多くはなかった

「綾瀬、行くわよ！」

「もうう、こうなったらヤケよ！」

そう言っつて銃弾を放つ、私は正確に綾瀬はばら撒くように撃っている
奴らは糸が切れた人形のように次々と倒れて行く

「ちっ、弾切れね。仕方ない」

そう言っつてサブとして持っているコルトパイソンを出す

え？なんで持つてるのかつて？簡単、知り合いに武器マニアがいたから譲つてもらったのよ。私のスタイルは二丁拳銃というスタイルだ。銃を二丁で扱う物で相当な訓練が必要なものである

「来なさい！死人はもう一回死んできなさい！」

そう言っつてありつたけの弾を撃ち出す、それと同時に後ろでエンジン音が聞こえた

「篠田！綾瀬！乗れ！」

大声で隊長が叫ぶ

「行くわよ！綾瀬！」

「うん！」

そう言っつてバンに乗る

〔篠田視点終了〕

〔床主スーパー〕

俺達はスーパーで休憩していた。

「ふゝ、さて行くとしますか」

俺が言った

「そうだな。ルートはさっきの通りで良いな」

秀治が言う

「おk、把握」

「じゃあ、出発だ」

そう言ってそれぞれの車に乗る

「秀治、お前が運転な」

「ほゝい」

そう言って運転席に乗る。俺は銃座に乗ってミニガンの弾を補充する

「よし、準備完了だ。行ってくれ」

そう言つとハンヴィーとangeriが動き出す

く大通りく

ここは俺の家とは別の大通りだ。周りには奴らの死体や廃車、事故車が転がっている

「こつちも酷いな」

秀治が言う

「ああ、だが、見慣れただろう？これから先、どんなことが起きるか分からんがな」

俺が言った

「確かにそうだ」

そのまま、何事もなく進んでいく俺達

く街中く

俺達は中心にあるオフィス街に到着した。ここも他と同じように悲惨な状況になっていた。その時だった

「おろ？生存者か？」

俺達が進んでいる道の先でマイクロバスが遠くに見えたが、行ってしまった

「お〜お〜、事故を起こしてんな」

街の中を走っている都バスであろう事故車が横転炎上しながら燃えている。周りにはゾンビ共が燃えながらうろついている。熱くないのかね？

「じゃあ、排除しておきますか」

そう言って車から降りる

手にはモシンナガンを持って、そして構える

「goodnight」

引き金を引く、パァーンという乾いた音が響き一体のゾンビの頭に吸い込まれてぶち当たる。他のゾンビが銃声に気付いたので余裕を持って排除しちゃったZEE！

「よし、排除完了」

傍から見たら気が狂ってるように見えるだろうな。だが、気にしない

「よし、移動しよう」

「おk、把握」

そう言って再び、俺らは移動する

さっきの生存者に会えば良かったかもしれないが、先に行っちゃったしな。再び会える事を祈ろう。

「さてさて、どこから向かいましょつかね？」

俺が言った

「とりあえず、床主大橋に繋がる大通りに出ているけど、どうする？」

秀治が言った

「そつだな……とりあえず、向かおうか」

「そつだね。」

そつ言つて俺達は橋の方に向かった

皆で行けば怖くないさ (後書き)

なんか、最後の方が中途半端な気がするが……次回に繋げよう。
頑張れ、俺！

新たな生存者達（前書き）

やっと、合流できた

新たな生存者達

俺達は床主大橋に続く大通りを通っていた。周りは相変わらずの状態であり、俺はハンヴィーの屋根からモシンナガンで撃ち続けている

「はあく生存者はいないのかよ？」

俺が言った

「そうだな〜一人ぐらい居ても良さそうな感じだけど、周りがね・・・」

秀治が言う

秀治の言う通り周りはゾンビだらけで生存者の影すら見えない。マンションなどの高層住宅では上の階が明かりを付けているという事は生存者なのだろう。だとしたら怖くて出て来れないという所か。所詮は、無駄な事だ。ずっと居座れば様々な問題が発生する。まず第一に食糧・飲料水が無くなるだ。人間にとって食は重要なことであり生きるためには絶対に欠かすことのできない物である

逆にゾンビ共は食事を取らなくても数年、数十年は生きていられる。これが大きな差だろう

「マンションとかには生存者がいそうだが、出てこないだろうな」

俺が言った

「どうしてだい？」

「簡単さ我が身が大切って所だろう。自分さえ助かればいいと思ってる連中だ。どんな事をしても出てこないだろうよ」

「確かに……おっ？」

秀治が何かを見つけた

「どうした？秀治」

「修、この道にやたらと空薬莢が落ちてるよ。見た感じ、それほど時間が立ってない」

そう言っって自分達が走っている道路の上を指さす。確かにそこには薬莢が転がっていた。一発ではなく何百発と言つ数の薬莢が落ちていた

「ふむ、生存者か？」

「多分、自衛隊じゃない？薬莢の長さ的には89式の銃だと思つよ」

秀治が言つた

「おお、言われてみればそうだな。よし、秀治、一旦停止しろ」

「おk 把握」

そう言っってハンヴィーを止める。琥珀達が乗るangelも止まった

幸い、周りにはゾンビ共がいなかったというよりも修がモシナガ

ンを使つてある程度排除しておいたのだ

angelから琥珀と美麻さんが降りてくる

「修様、どうかされたのですか？」

琥珀が言う

「ああ、お前らも気づいてはいると思うがこの道路に入ってから急に薬莢が多くなってきた。」

俺が言った

「あつ、確かにそうですね。でも、それがどうかしたんですか？」

美麻さんが言う

「薬莢の数的にもそれほど多くはない。しかも、撃ってからまだ、数分が立ってない事が分かる」

そう言つて足元にあつた薬莢を拾う。

「どうして分かるんですか？」

美麻さんが言う

「簡単だ。この薬莢、裏に撃つた後、空である事が分かるように印が付くんだ。しかも、時間が経つことに薄れていく。ほら、まだ、赤いだろっ？」

そう言っつて薬莢の裏を見せる

「ほんとだ。でも、撃った後ですからこんな必要ないじゃないですか？」

「美麻さんが言うのは最もだ。これは昭和の頃に作られた制度でな。なぜか、日本だけが守ってるんだ。まあ、そんな事はどうでもいいが、もしかしたらこの近くで自衛隊が戦っているのかもしれない。可能性は低いが行ってみる価値はあると思う。そこで、皆の意見を聞きたいんだ」

「そうですね・・・自衛隊が加われば、結構な戦力になると思います。私は行くの方に賛成ですね」

琥珀が言う

「俺も同じ意見だ。生存者がいれば格段に生き残れる確率は高くなるからな」

秀治が言う

「私も賛成ですね。この中じゃあ私は戦力にはならないですし」

美麻さんが言う

「決まりだな。出発するぞ」

そう言っつてそれぞれの車両に乗り込み発進する。

薬莢は床主大橋の手前で曲がっており俺達もそれに続いて曲がって

行く

「ん？秀治、何か聞こえないか？」

俺が言った

「聞こえるね……こいつは89式か？」

秀治が発砲音を聞きながら言った

「俺も同じ意見だ。銃声はあの角を曲がった先だな」

そう言っで一軒のラーメン店の角を指さす

「おk 把握」

秀治がそう言っってハンドルを握る

「琥珀、お前らも後に続いてくれ。50m先にあるラーメン店を曲がった先に生存者がいると思うから」

そう言っくと無線から「了解しました」と聞こえた

「さあ、partyの始まりだ……」

そう言っってミニガンに弾を装填する

（篠田side）

私達はなんとか発電所を脱出する事が出来た。その後もひたすら車

で逃亡を図っていた。しかし、アンデット共は分かっているかのよ
うに私達を追いかけてくる

「くそ！篠田、後ろはどうなっている!?!」

小ノ牧隊長が言う

「ダメです！減るところか増える一方です!」

私が言った。隣では綾瀬がMINIMIで撃ち続けている

「え〜ん、なんで、減らないの〜?」

泣きながら言った

「うつさい！泣く暇があったら撃ち続けな!」

そう言って私もパイソン×2で撃ち続けている

「くっそう、どうすればいいんだ!」

隊長が運転しながら言う

「た、隊長！前！前!」

「え?うお!?!」

拍子でハンドルが大きく左に傾く、その瞬間世界が回った否、車自
体が横転したのだ!

「いつつつつ……はっ!?綾瀬!?隊長!？」

私は二人を見た

「きゅっ」

綾瀬は目を回しながら

「おゝいたたた……」

隊長は頭を摩りながらベルトをはずしていた。二人とも無事だったみたいだ

「ほら、綾瀬、さつさと起きな!奴らの仲間入りになるよ」

そう言って頭を叩く

「ふぎゃ!?いたた……一体何が起きたの?」

「車が横転したのよ。外の状況を確認しなきゃ」

そう言って私が出た

「あらあら……こりゃあ、ヤバいわね」

周りはアンデット共がひしめいていた。

「篠田、どうだ?」

隊長が言う

「二人とも早く、車の上に乗って！」

二人はすぐさま横転したバンの上に乗った私も後に続く

「うゝむ、どうするべきか」

「絶体絶命ね……」

その時だった

「ヒィーハァー!!!!!!!!!!!!!!」

どこからか声が聞こえた

（side out）

「よっしゃあああ!!!!!!!!!!戦争をおっぱじめんぞ!!!!!!!!!!突撃いいいいい!!!!!!!!!!!!!!」

ハンヴィーはスピードを上げていく、その間にミニガンの砲身を回転させる

毎分2000発以上の弾が多くのゾンビ共に直撃していき細切れになっ
て行く、おや？あのバンの上に乗っているのは生存者だな

「秀治！あのバンの後ろに停める！こいつを盾にするんだ！琥珀！
angelのブッシュマスターを使い！」

そう言うとハンヴィーは横転したバンの後ろにangelはドリフ

トしながらブッシュマスターを奴らに向けて発砲していく

ゾンビ共は吹っ飛んだり細切れになって行った

「逃げるゾンビはヘタレゾンビだ！逃げないゾンビはよく訓練されたゾンビだ！」

ベトナム方面の軍人さんが言ってた言葉を発しながら撃ち続けた

数分後、ゾンビ共は壊滅した。それと同時に生存者が声を掛けてきた

「すまない、助かったよ。我々は陸上自衛隊第5師団の者だ。私は小ノ牧三等陸佐だこの隊の隊長を務めさせてもらっている」

そう言って敬礼した

「運が良かったですね。俺達は日本技術大学の生徒です。俺は古知屋 修って言います。」

俺が言った

「古知屋ですって!？」

一人の女性隊員が言った

「知っているのか？篠田」

隊長が言う

「はい、古知屋家といえば日本が誇る貿易会社の一つです。実はそ

この者と友人関係にあります。」

篠田という女性隊員が言った

「と言う事は、お袋の知り合いですか？」

「ええ、私は篠田しのだ 訓子のしこと言います。佳織さんは元気にしてる？」

「まあ、元気にしてるっちゃあ元気にしてますけど、今、親父と一緒に仕事で海外にいましてね。連絡が取れないんですよ」

「そうか……無事だといいな」

「まったくです。まあ、あの二人なら大丈夫だと思いますよ。なんせ、武装夫婦なんてあだ名がありますからね」

「ふふ、そうだな」

「お〜い、修、置いてくなよ〜」

秀治が言った

「おつと悪い悪い、こっちの二人は同じ大学の生徒で上佐和秀治と古城美麻と言います。もう一人は家のメイドで矢代琥珀と言います」

「「「よろしく」お願いします」」」

「「丁寧にもな。こちらの二人は篠田訓子と綾瀬あやせ 薫かおるだ。」

「「よろしく」」よろしく〜」

二人が挨拶する

「さて、小ノ牧さん」

「なんだね？」

「あなた達はどうしてこんな所に？」

俺が言った

「実は、発電所を守るように言われて来ていたんだがな予想以上にこのアンデット共が多くてな。仕方なく脱出してさっきに至るという事だ」

「そうですか。大変でしたね」

「ああ、君達も無事みたいだな。それにしても、なんで、ハンヴィーとLAV-25があるんだ？」

二車両を見ながら言った

「ああ、どちらとも家の所有物ですよ。」

「なるほど、君に言われると妙に納得してしまうな」

「そうですね？まあ、そんな事よりもこれからどうするつもりだったんです？俺達はこの街から出ようかと思っっているんですが」

「そうだな……本部とも連絡が付かんし、しばらく君達と一緒に

に行動がしたい。良いかね？」

「ええ、大歓迎ですよ」

こうして、新たな仲間が俺達のチームに加わった

新たな生存者達（後書き）

人物紹介

篠田 訓子

陸上自衛隊第5師団に所属する女性隊員である。身長は高めで訓練で鍛え上げられた体はモデル並みにすごい

バストは大きいほどではないし小さくもない本人曰くあんな物肩がこるだけ、だそうだ。銃は89式とコルトパイソンを使う
尚、彼女は数少ないトゥーハンドの使いだそうだ

綾瀬 薫

篠田と同じく第五師団に所属する女性隊員、篠田とは親友の中だという性格は天然系でよくドジってたりすることがあるが大事な場面では軽機関銃をぶっ放す

女性では珍しく軽機関銃を扱っているため仲間内からは〇〇〇〇と機関銃の再臨だと言われたらしい

バストはでかめでメロンが二つ垂れ下がっていると思ってくれればいい、

小ノ牧隊長

第五師団の隊長を務める隊員で冷静かつ決断のできる隊員である。自衛隊の中では銃の神様と言われるほど扱いがうまいらしい、最近では89式ではなくアメリカ軍から支給されたM14ライフルを使用している。しかも改造仕様らしい

本人曰く自分はそこまで扱いがうまい訳ではないただ、銃が好きなのだけだとの事

床主大橋

俺達は生存者である自衛隊の小ノ牧隊長と共に床主大橋に来ていた。その頃には夜になっており、おまけに道は避難民で溢れかえっていた

「おいおい、こいつは多すぎだろう」

俺が言った

「そうだな。無線では警察が橋を封鎖しているとは聞いていたがこの有り様はなんだ？」

小ノ牧隊長が言う

因みに今、ハンヴィーに乗っているのは俺、小ノ牧隊長、篠田軍曹の三人である。残りは *angle* の方に乗っている

「でも、このままだと埒が明かないんじゃないですか？他の道から行っても良さそうな気もしますが」

篠田軍曹が言う

「確かにそうだな。修君、この橋以外で通れそうな所はあるか？」

「そうですね……少し、北に行った所に御別橋っていう橋がありますけど、多分、同じようになってるんじゃないですか？」

俺が言った

床主大橋でこの状態なんだ、他の橋なんか、もっと酷い事になるかもな

「だが、君の仮説が正しいならアンデット共はすぐにでも集まってくるぞ。そうなった時には取り返しがつかない」

「そうですね・・・ちょっと橋の様子を見てから決めるとしますか。小ノ牧さん、ハンヴィーの方ちょっと預かってくれますか？」

「分かった。だが、危険を感じたらすぐにも戻ってきなさい」

「わかりました！おい、秀治、いるか？」

無線で秀治を呼び出す

「なんだ？我が同志よ」

「なんだ？その声真似は」

「気にすんな。で、どうした？」

「ちょっと橋の様子を見てこようと思ってな。お前も一緒に来てくれるか？」

「いいともー！ー！」

「おい、それもやめろいろんな人から怒られそうだから」

「おい、把握」

そう言っつて無線を切る

「じゃあ、行ってきます。何かあったら無線で連絡して下さい」

「分かった。」

そう言っつて俺はハンヴィーを降りる後ろの angle から秀治が降りる

「よっ修」

「おう、じゃあ行くとするか。っとそうだ。秀治、AKじゃあ目に付くからこいつを持ってけ」

そう言っつてM92Fを渡す

「おお！M92Fじゃん、アメリカ軍どころか今じゃあ世界中で使われている世界標準の銃じゃん悪いな」

そう言っつて後ろポケットに銃を差し込む

「じゃあ行くか」

そう言っつて俺達は渋滞の列を抜けて行っつた

（床主大橋）

橋の前には人だかりができていた

「なんだあ？」

「さあ？回って行くか？」

「そうだな」

そう言っつて脇の道から橋の入口に近づく

「警察横暴、許すなー！！！！」

「許すな　　！！！！」

前に周ると原因が分かった。一人のメットを被ったおっさんが警察の封鎖に対して抗議を行っているようだ。後ろの団体はそれにつられてだろう

しかも内容をよく聞いてみるとこの流行病は日米共同で造られた生物兵器が漏れ、それが世界中の回ったと言っているのだ

「どこその団体だよ」

秀治が言った

「無駄さ。こいつらは現実を見ようとしていない。設定マニアだろうが無茶苦茶にもほどがあんぞ。日米で共同？あり得ないね。そもそも生物兵器なんぞ。この国が作ってもなんのメリットもないしな」

俺は呆れながら言っつ

日米で共同でやる事といえは大規模な軍事演習や災害などで派遣してくれる程度だ。後は日米安保条約があるだろう。しかし、生物兵

器となると簡単には行かないどうせアメリカが独断で作って配備する程度だろう。日本が関わったとしても部品作りや簡単な作業をやらせてお終いだ。こいつらは軍隊のぐの字もわかつちやいないな

その時、一人の警官が抗議団体の前に出た。かなり年が行ってるから巡査部長とかだろう

「すぐにここを立ち去りなさい。このままではあなた達が危険な目に遭いますよ」

警官が警告を発した

「我々は！そんなことでは立ち下がらないぞ！むしろ、警察がここを去れ！かえーれ！かえーれ！」

メットのおっさんが叫ぶと後ろの団体さんも帰れコールを叫ぶ

「我々は・・・手段・・・守らなければ・・・」

警官がブツブツと独り言を言っていた。帰れコールのせいでうまく聞き取れなかったが・・・後、団体さんうるさい、終いにはハチの巣にしてやんぞ

が、次の瞬間、一発の銃声が鳴り、団体さんは黙ってしまう。

そりゃあそうだろう。自分達を守ってくれるはずの警官が一般市民に対して銃を発砲したのだから・・・被害者はあのメットのおっさんだ

眉間にきれいに入ってしまい、即死だった

「きゃああああ……！！！！！！」

一人の女性が叫ぶ

その後も周りはザワザワと喋っていた

「行くぞ。 秀治」

「お、おう」

そう言って橋の入り口から離れていく俺達

「警察はもう駄目だな。 当てにならない」

俺が言った

「そうだね。 警察があの状態ならもう壊滅したって言ってるようなもんだよね」

秀治が言う

「ああ、最悪の場合、俺達にその狂気が来るかもしれないな。 とにかく、ここから逃げ出そう。 いつ、あのゾンビ共が来るか分からんな」

「そうだね」

そう言って自分達の車に戻って行く

「ハンヴィー車内」

「どうだった？修君」

小ノ牧さんが言う

「警察はもう駄目ですね。壊滅と言ってもいいでしょう」

「それって、どういう事？」

篠田さんが言う

俺は橋の前の出来事を説明する

え？説明が雑だった？今言った奴ら表へ出な。裁判にかけてやる

「まさか、そんなことが……」

篠田さんは驚いたようだ

「ええ、でも現実には起こったことです。ここからさっさと出まじょう。いつ、奴らが来るか分かりませんし」

「そうだな。なら、ルートはどうする？」

「そうですね。もう夜ですし、無理に渡ろうってのはやめた方がいいですね。どこか、落ち着ける場所でも探して……」

そう言った時、後ろから逃げ惑う人々がやってくる

「んあ？なんだ？」

俺はそう言って屋根の蓋を開けた

「マジですか・・・さっさと逃げた方がよさそうですね」

俺が言った。

俺達より後ろの区域に都バスが走って来ていた。しかし、一向に止まる気配が無い目を凝らして見てみると中は地獄と同じだった。運転手も襲われ操縦者のいなくなったバスは暴走バスと化して俺達に向かって来ている

さらにその後ろにはゾンビ共の大群であった。きっとこの音を聞きつけてやって来たのだろう。

「修君、どうした？」

「話すより先です！琥珀、聞こえるか！？」

無線で琥珀に連絡を取る

「琥珀です、どうかしましたか？」

「後ろから厄災が来るぞ。ここから脱出だ。俺の後を着いて来てくれ」

「了解です。こっちはいつでも行けます」

そう言って無線を切る

「よし・・・あそこだ！」

そう言っつてハンヴィーを進める。他にも車はあったがそれを無理やりどかして、大通りとは別の脇道に入っつて行く、ハンヴィーも通れる大きさなのでangleでも十分な幅だろう。俺達はその大通りを抜けた瞬間、後ろから爆発音や悲鳴が聞こえてくる。間一髪だな

「いや、危なかつたですね」

俺が言っつた

「全くだ。あそこにいた民間人達には悪いが生き残るためだ。仕方あるまい」

と自衛隊らしからぬ発言をする小ノ牧隊長

「らしからぬ発言ですよ。今の」

「何、人類が減びなきやあ万々歳だ。あのアンデット共には借りを返さなければな」

そう言っつて笑う。こんな状況だと不謹慎に聞こえますよ小ノ牧さん

「とは言っつても、今日はどうします？夜ですしさすがに危険だと思えますよ？」

「なら、修君、あそこのコンビニはどうか？」

そう言っつて廃墟になっつているコンビニを指さす、暴動にでもあつた

のだろつ至る所が壊れ、ガラスは割れ放題、まさに廃墟と言った感じだ

「いいですね。あそこにバリケードを作って籠るとしますか」

そう言つて駐車場にハンヴィーを止める。その隣に *angel* が停まった

「修、どうしたんだ？」

秀治が言う

「今日はここで一夜を明かそうと思つてな。今の事態なら十分に使えるねぐらだ。」

「でも、このままじゃあ使えないよな？」

「ああ、大丈夫だ。その辺の壊れてる物で補強はするし、屋根を開けてもしもの時ように避難経路は作るつもりだから」

「そうか。じゃあ、さっそく作っちゃうとしますかね」

そう言つて腕をまくる

「そうだな。小ノ牧さん、こちら辺でブービートラップなんかはできますか？」

「ああ、十分にできるよ」

「じゃあ、トラップを作つて下さい。俺達は補強の方をやるんで」

「分かった」

そう言ってそれぞれの役割を果たしていく俺達だった

コンビニでの一夜

俺らは床主大橋から離れて北にある御別橋の方に向かっていたが、夜になってしまったのでさすがに危険かと思い近くにあったコンビニで一夜を越そうかと思っていた

「コンビニ」

「おし、完成だ」

目の前のコンビニを見ながら言った

コンビニ自体は窓などが破損していたので近くの工場から鉄板を持ってきて溶接した。ハンヴィーや angle はコンビニの脇に隙間があったのでそこに停めて屋根からも飛び降りられる形にした

しかも、コンビニでは珍しく入り口にはシャッターが設置されていたので、これで、ゾンビ共が侵入する事はまず無いだろう。

「修君、トラップの方も完成したぞ」

小ノ牧隊長が言った。

隊長によると手榴弾によるブービートラップだそうだ。と言っても入り口付近に置いてあるだけの安い物ではない

「ありがとうございます。よくありましたね。手榴弾」

「なあに、私は幾つ物戦場を見た事がある。それだけさ」

「なるほど、そうしておきましょうか」

俺が言った

「おい、修、屋根にも通れるようになったぞ」

「修さん、裏の食糧庫にまだ、カップめんとかありましたよ」

秀治と美麻さんが言った

「OK!、小ノ牧さん、後の二人は？」

篠田さんと綾瀬さんの事を聞いた

「ああ、あの二人には近辺調査をしてもらっている。心配する事はない。彼女らは私が率いる隊員の中でも優秀の類だ。それにあの二人は個人的な付き合いもあるしな」

「信頼しているんですね」

「当たり前だ。部下を信用してやらんで上官が務まるか。おっ噂をすれば」

そう言うと正面の道から二人が来た

「隊長、近辺調査をしましたが、付近に住民の姿はありませんでした。」

篠田さんが言う

「そうか。ご苦労だったな。中に入って休憩したまえ、夕食の時間だからな」

「はっ分かりました」

そう言つて敬礼する篠田さん

「ふえ〜おなかぺこぺこ〜」

綾瀬さんが言つ

「綾瀬、うるさい」

そう言いながら拳骨を喰らわす篠田さん

「ふぎぢや!?!」

「ははは!相変わらず、仲がいい二人とも」

小ノ牧さんが言つ

「隊長、それは違います。ただの腐れ縁です」

「え〜ん、酷いよ〜訓子〜」

泣きながら言つ綾瀬さん

「うるさい、さっさと中に入るよ」

そう言つて綾瀬さんを引き摺りながら入って行く。綾瀬さんが何か喚んでいるが、気にしないでおこつ

「さて、修君、ここで一夜明かした後はどうするのかね？」

「まあ、計画的には朝、ここを出て御別橋の方に向かいます。その後は状況に合わせて事を進めて行きましょう」

「そうだな。では、我々も入ろうか」

そう言つて店内に入つて行く

（コンビニ店内）

「よう、修、夕食が出来てるぞ」

秀治が言つた

皆は輪になつて座つていた。どうやら俺らを待つていたようだ

「悪いな。遅くなつてそれじゃあ、手を合わせて・・・頂きます」

「」「」「頂きます」「」「」

そう言つて皆でカップめんを食べる。日常じゃ当たり前になつていた食品が災害では大きな活躍をもたらす、人が生きるためにも必要な事だ

.....

夕食を食い終えた俺は屋上に行つて見張りをしている

なんで、そんな事してるかって？ばっかやるう、世の中には”絶対”なんて物はないんだ。入口にあるシャッターが破られたっておかしくはない。そのために見張りをしているんだ

因みに屋上にいるのは俺と琥珀と美麻さんである

俺と琥珀が見張りをし、美麻さんはパソコンにて周辺を調べている。しかも、軍事衛星に侵入してそこからこの周辺を見張っているぞうだ

マジですごいな

俺は周辺のゾンビどもにここが割れないように消音付きのナイツSR-25スナイパーライフルだ。M16をカスタマイズしてスナイパーライフルに転換した銃である

琥珀には、M16A2にスコープを付けた簡易狙撃銃を渡してある。(まあ、某アニメの極太眉毛のおっさんが使っている銃を想像してくればいい。分かんない人はググって調べてくれ。)最初は愚図っていたが、俺がオハナシをしようとあっさり縦に頷いてくれた。

「うーん、ここら辺も来やがったな」

俺はスコープを覗きながら言った。コンビニの周りには床主大橋からやって来たであろうゾンビ共が歩いて来ている

「じゃあ、気晴らしにやりますか」

そう言って近くにいたコンビニ風のゾンビに照準を合わせる

「one kill」

サイレンサー付きのため、本来の音は出ず、パシュという軽い音が出る。数秒後そのゾンビの頭は消えている

「niceですよ。修様」

琥珀が言った

「サンキュー、琥珀、お前も気晴らしにどうだ？」

「ええ、もちろん”楽しませて”頂きますよ」

そう言って琥珀も狙撃を開始する。顔はまさに狩人の顔をしていた。

「ふつ、世の中の秩序が破壊されるか……それまた、一興だな」

俺は小言で言った後、再び、狙撃を開始する

（数分後）

コンビニ付近にいたゾンビ共は全滅してしまったので再び見張りを続行していた。

その時、銃声が聞こえた

「ん？こいつは……」

銃声で聞く限り俺が持っているSR125に近い銃声だったな

「修様、今の銃声」

琥珀が言う

「ああ、どうやら、生存者がいたようだな。だが、場所が特定できん。美麻さん」

「はい？」

「今の銃声、聞こえた？」

「えっと、ずっとパソコンに集中していたので気づきませんでした。」

「そうか。まあ、銃も持っているようだし大丈夫だろう。てか場所的にも遠かったしな」

そう言って再び見張りに戻ろうとした時

「！修さん！この近くに生存者がいますよ！」

美麻さんが言う

「どこですか？」

琥珀が言う

「えっと、ここから北、50m先の民家の庭に立て籠もっています。武装は・・・簡易的な槍みたいですね。でも、多勢に無勢と言った感じです。ゾンビ共が圧倒的に多いです」

「数は？」

「数は・・・うそ・・・70以上!？」

美麻さんが驚く、どうやらパソコンに数が表示されるように設定したようだ

「多いな・・・無闇に出れば返り討ちだな。近くに道路以外で通れそうな所はあるか？」

俺が言った

「塀だけずっと続いていきますね。それ以外は途切れ途切れになっています」

「そうか・・・なんとかできればな・・・」

そう言って周りを見渡す・・・近くには工事現場しかも大型の・・・

「よし、あのクレーンを使おう。それに工事車両もあるからそれも使ってしまうおう」

俺が言った

「そうときまれば行動あるのみですね」

琥珀が言う、さすがは俺専属のメイドだ。役に立ってくれるね」

「じゃあ、美麻さん、小ノ牧さん達に言い訳よろしく、行くぞ。琥珀」

そう言ってコンビニの屋上から降りる俺ら、後ろで美麻さんが叫んでいるがほつとこ。今は窮地に立っている民間人を助けるだけだな

「工事現場」

「さて、琥珀、クレーンを道端まで動かしてくれ。俺は車両をチョイスするから」

「分かりました。」

そう言ってクレーンの方に向かって行く

「さて、ドイツを・・・じゃなかった。どれを使おうかね」

目の前の車両を見ながら言った

数分後

「よっしゃあ、完成！」

そう言って魔改造した車両を見る。チョイスしたのはブルドーザーである。何年か前にアメリカでブルドーザーを改造して暴走する事

件があつたのを思い出して、実際にやってみた。運転席には鉄板を張り付け、キヤタピラにはスカートを付けた。これで、耐久力は若干ではあるが上がるだろう。それにトラックなどの車両では70もの大群に向かつて行っても横転してやられるのがオチだからな。だったら馬力が一番でかいブルドーザーを使うのが一番だ

「これはこれは、修様の趣味が出てますね」

クレーンを動かしてきた琥珀が言う

「まあ、あの大群ならこれが妥当だろう。他に選んでも良かったが数を考えるとな」

「確かにそうですね」

「だろ？それじゃあ、いつちょやってくるから援護はよろしく、ジャッカルは使用許可するぞ」

「マジですか!?!」

おおっ、琥珀の目が輝いてるぞ。そんなにぶっ放したかったのかよ。

「ああ、派手にやってくれ。それと、俺が脱出してきたらクレーンの方を頼むぞ」

「分つかりました!」

元氣よく返事をする琥珀

俺は魔改造ブルドーザーに乗ってエンジンを掛ける、ハンヴィーや

angerと違って普通のエンジンのため音はそんなに派手ではない

「よっしゃ、いっちょ花を咲かせますか！」

そう言っって工事現場から出る俺だった

迷わず行けよ、行けば分かるさ

く?????

「もう！なんで、本署は何もしないの！？っていつか、本庁から援軍が来るんじゃないの!?」

婦警が言った

「そんな事言っちゃってしょうがないだろ？現に橋は奴らに襲われて民間人、警官多数の死傷者、これ以上、正直みたくはないがね」

警官が言う

制服ではないので刑事と言ったところだろう

「ほれ、二人ともこれ以上侵入したら儂とて無理があるぞい、こんな爺に苦勞を押し付ける出ない」

日本刀を振りながら言う爺さん、歳は70を過ぎたくらいか

「そ、そうですね。失礼しました！」

婦警が言う

「カツカツカ、そんなに畏まらなくてもよい、儂はもう警官ではない。ただ、剣が好きだけの爺じゃよ」

そう言いながら侵入してきたゾンビの首を切り落とす

「すごいな、やっぱ」

刑事が言う

「そうね。さすがは……つとこつちにも来たわね。セイ！」

そう言っただけで婦警は侵入した奴らに向かって回し蹴りを喰らわす、吹っ飛んだゾンビは他の奴らも巻き込んで倒れる

「さすがにヤバいわね」

そう言いながらも必死にゾンビ共の襲撃に耐える生存者二名だった

く魔改造ブルドーザーく

「さくて、琥珀、準備は良いか？」

俺は無線で言った

「OK、ですよ。こちらは射撃位置に着きました。いつでも行動して下さい。というか、早く行動して下さい。さっきからつづつづしてるんですから」

琥珀が言った

「あいよ。じゃあ、よろしく頼む」

そう言っただけで無線を切る

「それじゃあ、でっかい花火咲かせましょうか」

そう言つてアクセルを思いっきり踏む、数秒その場でキャタピラが動いて地面を抉る、その後、勢いよく突き進んでいくその先には大群となつてゐるゾンビ集団だ

音に気付いた奴らはこっちに向かつて来ているが、踏みつぶされたり吹っ飛ばされた後潰されると言つた感じにやられて行く、ブルが通つた後は文字通り血の海と化していた

「はっはっはっはっは！！！！最高！！！！アフリカにいた頃を思い出すぜ　！！！！」

俺は笑いながら言つていた。もう、精神的にはサイコノ域まで達しているだろうな

ゾンビの大群を通り過ぎた後、その場に停めた。同時にミシガンで溶接しておいた鉄板を打ち破る

「さうて、生存者は無事かね？」

そう言つてブルから降りた瞬間、一体のゾンビが俺に噛みつきこうとしましたができなくなつてしまふ。琥珀の狙撃によって頭自体が無くなつてしまつたからだ

「さっすが、琥珀、いい仕事してんな」

俺が言つた

丁度、工事現場の屋上に琥珀が伏せ撃ちの状態で狙撃をしている

「おつあそこか。」

そう言つて庭付きの家の門を開ける

「お前さんは……軍人ではないな」

刀を持った爺さんが言う。刀は血がべつとりと付いていた

「おう、日本技術大学三年 古知屋 修だ」

「ほっほっほ、年上に向かつて溜め語とは大胆じゃのう」

爺さんは笑いながら言う

「こんな事態だし、敬語は必要ないかなって思つてさ」

「そうかそうか。久々に活のある若者を見たのう」

「そついえばそちらさんは？どう見ても爺さん以外は警官に見えるけど」

「あ、ああ私は近江^{おつみ} 勲^{いさお}だ。床主警察署の刑事課に努めている」

刑事姿の兄ちゃんが言う

「同じく、床主警察署、機動課のアリシア・メアリーよ。よろしく」

婦警さんが言う

「メアリーさんはあれですか？在日外国人ですか？」

俺が言った

「ええ、元々はNYの警官だったんだけど、知り合いの誘いでこっちの警官になったの丁度、三か月前にね。」

メアリーが言う

「へえ、そういえば、こちらの方は？」

そう言っつて爺さんを見る

「儂か？儂はこの近くで刀屋を開いている 亀 かめ 幸之助 こうのすけ じゃ」

そう言っつて日本刀を鞘に入れる

「ともかく、無事で良かった。向こうにあるコンビニで俺の仲間がいるんだけど、一緒に来るかい？」

「そつだな。どうしますか？亀さん」

勲が言った

「そつじゃな。ここに残る理由もない。だったら連れてってもらおう」

亀爺（命名 修）が言った

「決まりだな。じゃあ、付いて来てくれ」

そう言って庭から出る

「琥珀、生存者は無事だ。先にコンビニに行っていてくれ」

無線で言った

「了解しました。何人いますか？」

「三人だ。二人は警官 もう一人は刀屋の爺さんだ」

「分かりました。小ノ牧さんらにも伝えておきますね」

「頼む」

そう言って無線を切る

「それは、軍用無線？」

メアリーが言う

「ええ、家はいろんな所にコネを持っていましてね。軍関係者ももちろんいますよ」

俺が言った

「と言う事は、あの古知屋家か」

勲さんが言う

「知っているのか？」

亀爺が言う

「ええ、古知屋総合貿易会社 日本じゃあ代表する有名貿易会社ですよ。食糧はもちろん車 飛行機 軍用車までなんでも運ぶ大企業です」

「ほう〜すごいおう〜」

亀爺が言う

「そうでもないですよ。実際、家の親父とお袋は普通の人ですし、家庭的には裕福かもしれませんが、それでも優しい親父とお袋です」

そう言っつて星空を見上げる

「その様子だとまだ、会ってないのねこの騒動が始まってから」

メアリーが言う

「ええ、あの二人は今海外で仕事中でしてね。その時にこの騒動が起こった。と言う訳ですよ。連絡はして見たんですが、まだ、返事が返って来てません。まあ、あの二人は武装夫婦なんてあだ名が通ってますからね、こんなノロマなゾンビ共に後れをとったりはしないですよ」

「ほう〜ずいぶんと信頼してるのう、そういえば、口調が変わってらんか？」

「あつなんて言うか、さつきみたいに戦闘に入ると口調が変わってしまうみたいで、普段ならこう言う敬語口調なんですけどね。もちろん、年上には気を使ってますよ」

「なるほどのう。おつそろそろ見えてきたのう」

そう言うと補強されたコンビニが現れた前には、全員集合して待っていてくれた

「いやはや、君には驚かされるな。修君」

小ノ牧さんが言った

「全く、生存者の救出は私達の仕事なのに」

篠田さんが言う

「修、親友に相談なしとは頂けないな」

秀治が言った

「修さん、信じてましたよ。絶対救出してくれるって」

美麻さんが言う

「修様、お帰りなさいませ」

琥珀が言う

「おう、ただいま、こちら三人が生存者だ。警官二人に刀屋の爺さん一人だ」

そう言った後、それぞれが自己紹介をして中に入って行く

こうして、新たな生存者達が仲間に加わった

迷わず行けよ、行けば分かるさ（後書き）

人物紹介

亀 かめ 幸之助 こうのすけ

床主市市内で刀屋を開いている老人 若い頃には「床主の剣士」と言われたほどの剣の使い手で伝説に残っているほど、元警官である。今は平和な隠居生活をしていたがこのゾンビ騒ぎのせいで生活ができなくなってしまうた
しかし、腕は錆付いていない

武器は日本刀 淀と言われる剣

近江 おじみ 勲 いさな

床主警察署に努めている刑事 この騒動で床主大橋の方に周っていたが例のゾンビ集団が攻めてきた際、メアリーと共に逃げ伸びる事が出来た。

合気道の有段者でどんな攻撃に遭おうとも受け流す事が出来るほどである。銃はコルトM1911A1を使用する。昔は宮本 みやもと 正 ただし という相棒がいた

アリシア・メアリー

元はNYの警官であったが、上からの誘いで床主に赴任してきた警官、アメリカでは相当腕の立つ警官だったそうだ。勲と同じく橋の方に周っていたがなんとか逃げ伸びる事が出来た
基本は体術を繰り出す、それに合わせて銃撃もできる

銃はM92Fの改造版を使用する。時々ナイフも使用する

髪は金髪のロング 目は深緑である

スタイルには一番普通で……あれ？扉が破壊されている。ど
ういう事だ？警察を呼ばなきゃ……

ん？なんか、どんどん生存者が増えて来ていますが、一応、これ以
上増やさない方針ではいます。それと前回の修達が聞いた銃撃音は
分かりますよね？原作を見ていれば

では、失礼します

刀屋って響きが良くない？え？そうですか……

俺らは新たな生存者と共に一夜を過ごした。早朝、起きた俺達は朝食を取り、御別橋に向かおうとしていた

〜コンビニ〜

「さて、準備はいいですかい？」

俺が言った

「我々は大丈夫だぞ。修君」

小ノ牧さんが言う

「俺達も大丈夫だぜ。修」

秀治が言う

「儂らも大丈夫だぞい、修や」

亀爺が言う

「よっしや、出陣しますか」

そう言って出ようとした時

「待て、修や」

亀爺が言った

「なんですか？」

「御別橋に向かう前にちょっと寄りたいたところがあるんじゃないか
ね？」

↳ハンヴィー車内↳

俺達は御別橋に向かう前にある所に向かっていた。今、ハンヴィー
に乗っているのは俺、亀爺、琥珀、メアリー、勲さんの五人である。
angelの方には小ノ牧さんらが乗っている

「亀さん、どこに向かおうって言ってます？」

勲さんが言った

「何、銃じゃあいずれ、弾切れを起こすじゃろう。なら、弾が切れ
ない武器を持って行こうと思ってる」

亀爺が笑いながら言う

「弾が切れない武器……ですか？」

琥珀が言う

「そうじゃあ、日本では古くから使われとる武器じゃ、ここまで言
えば分かるじゃろ？」

メアリー以外は気づいたように顔を上げる。メアリーはアメリカ人

だからその辺は分からないのだろう

「おっと、答えが出る前に到着したぞい。修やその店の前に停めてくれんか？」

「了解」

そうやって一軒の店の前で止まる。店の看板には「鶴亀刀剣屋」と書かれていた

「なんだ？このふざけた店名は」

俺が言った

「これこれ、店主の前で何を言うか。失礼にも程があるぞい」

亀爺が言う

「亀さん、この店は？」

メアリーが言う

「ここはわしの店じゃ、さっあの屍共が来る前に終わらせてしまっぞい」

そうやってハンヴィーを降りる亀爺

俺達もその後に行く

（店内）

店内は以外にも広く所狭しに刀や槍、はたまた規格外の武器まで置いてあった

「すごい量だな……」

秀治が言った

「ほっほっほ、儂が見定めて置いてある商品じゃ間違えはないぞ？」

亀爺はそう言つて奥にある座敷に座り自分の刀 淀の手入れをする

「ほれ、今日時点で店じまいじゃから好きなものを持って行くといいぞい。代金は無用じゃ」

「なら、遠慮なく」

俺が言つたのを合図に皆がそれぞれの武器を探しに店内を歩き回る

「は〜いろんなのがあんな〜」

秀治が言った

「ああ、おまけに国宝に指定してあるような武器まで置いてあるぞ。例えばその刀」

そう言つてガラス張りの中に置いてある刀を指さす

「これは？」

「まあ、簡単に言つとかの有名な妖刀「村正」だ」

「ええ！？これが!？」

秀治が驚く

「ほっほっほ、よく気が付いたのう。その若さで分かるとは」

亀爺が言う

「そりゃあね。貿易関係のだからね。時には表に出せないような商品”だ”って運ぶこともある。それ故にさ」

「なるほどの〜」

亀爺はそう言いながら手入れをしていく

「さてつと、何か良いのはないかな〜つとこいつは……」

村正の隣に展示してあつたのは備前長船長光だった。かの有名な佐々木小次郎が使っていた物だ。通称物干し竿とも呼ばれている

「ほっほ、備前が気になるかね？」

「ああ、こんなにも保存状態が良いのは初めて見たぜ。どこで手に入れたんだ？」

俺が言った

「昔、友人が僕に託してくれた物じゃよ。そうじゃ、せっかくだか

ら使って見るかね？」

そう言つて亀爺がガラスケースの中から取り出す。そして、俺に渡る

「おお、やっぱ違いがあるな」

備前を持ちながら言う

「試しに抜いてみい、因みにそれを抜けたのは儂とさっき話した友人くらいじゃ、他の者ではビクともしなかつたぞい」

亀爺が言う

「へえ〜そうなんだ〜つてあら？」

俺は亀爺と話しながら備中を抜刀して見た。どうせ、抜けないだらうと思つていたが、案外、簡単に抜刀出来てしまつた

「ほほ〜備前に気にいられたようじゃな。」

亀爺は嬉しそうに言つた

「で、これはどうすればいい？」

「それはお前さんの好きにすればいい、好きなように使つてやれ、うまく使つてやれば刀もきつと応えてくれるぞい」

「そうか・・・分かつた。これは貰うよ。亀爺」

「ほっほっほ、さて、他の者は決まつたかのう？ちよいと見てくる

かのう」

そう言つてその場を離れる

「これからよろしくな。備前いや、物干し竿」

そう言つて納刀する。この刀は普通の刀と違い長刀であるため中々使いづらい所がある。物干し竿という名前もただ長過ぎて刀には向いていないという軽蔑的な意味合いも込められているため

「これで、よし」と

そう言つて刀を脇にさす、本当は背中にやるものだが、モシンナガ\nなどの長銃とかさばる為脇にさした。

「おゝい、修」

秀治が来たようだ

「おう、秀治、お前も決まったのか？」

「ああ、見てくれよ。」

そう言つて見せてきたのは九五式軍刀だった。この刀は日本軍が太平洋戦争後期に開発したもので鞘はサーベルに似たような形をしているが、それまで持っていた将校准士官刀などの軍刀よりも遙かに耐久力が優れていた

「おゝおゝ、お前らしい選択だな」

「だろ？」

「ああ、良いんじゃないか？だからと言って腕はど素人当然なんだからな。気お付けろよ」

「ああ、俺はもっぱら後方援護に周らさせて貰つた」

そう言った後、他の皆も決まったようだ。

単純に説明するとこんな感じである

小ノ牧さん 倭刀

篠田さん 大型サバイバルナイフ

綾瀬さん 日本刀×2

勲さん 十字槍

メアリー 鉈

秀治 九五式軍刀

俺 備前長船長光

美麻さん 薙刀

と言う感じだ。美麻さんは小さい頃、薙刀をやっていたらしい、勲さんは警察で槍術をやっている都の事だ。綾瀬さんはなぜか分からないが、一時期二刀流でやっていた事あったそうだ。そのせいで警

察沙汰になつてしまいそうになつたらしい

他にもなぜ？と思う所があるだろうがそこはなんとか主義と言つ事で

「さて、試し切りでもしてみたいもんだね」

俺が言つた

「それなら、ほら、あそこに丁度いい得物があるぞ？」

亀爺が指さした方には丁度よく一体のゾンビがいた

「いいね……やってみますか」

そう言つて備前を抜刀する。え？長さに無理があるんじゃないかって？今言つた奴表に出ろ、首を落としてやる

備前を片手で持つてそのままゾンビに近づく

「せいや！」

そう言つて大きく振りかぶりまっすぐ切つて行く所謂、兜割つて奴だ。刀はきれいに真ん中を通過した。時間差でゾンビの体がゆっくりと二つに分かれて行つた

「ん〜切れ味も最高だな。文句なし」

そう言つて納刀する

「ほっほっほ、気に入ってもらえて何よりじゃ」

亀爺は笑いながら言う

「さて、出発するのでしょうか」

そう言ってそれぞれの車両に乗り御別橋に向かって移動し始めた

御別橋

俺達は亀爺の所で刀を入手して、再び、御別橋に向かって進んでいた。進むにつれて街は酷くなっていく一方だ。いや、それどころかゾンビ共が異様に増えてきた事だ。確かに前の実験で音に敏感になったのは理解できたが、どう見てもおかしい

まるで、こつちの位置が分かっているような………いや、考えすぎだな

「それにしても、眠いな〜フワ〜」

俺は欠伸をした。だって、長時間の運転って睡魔が襲ってこない？あるよね〜

「そんなに眠いなら変わろうか？」

メアリーが言った

「あっじゃあ、お願いしていいですか？」

「ええ、任せなさい」

そう言って運転を俺からメアリーに変えた

俺は後ろの座席に座って背もたれを倒す

「じゃあ、お休みなさい」

そう言っつて俺は瞼を落とす

↳side 秀治

俺達は現在御別橋に向かつて進んでいる。亀爺さんの所で刀を手に入れ、武器の消費も圧倒的に少なくなった（主に弾薬類）

俺は琥珀さんが所有するangel事LAV-25に乗っている。他には自衛隊の小ノ牧さん、篠田さん、綾瀬さんの三人だ

と言っつても俺は後ろで寛いでいる。話し相手に綾瀬さんの相手をさせてもらっている

「あっそうそう、聞いて秀治君」

話してきたのは綾瀬さんだ

「なんすか？」

俺が言っつた

「前の事なんだけど、秀治君をサバゲーで見かけたのよね」

「え？マジッすか？」

俺が言っつた

「うん、私もちよくちよく行っつてるんだけど、あの時は……千葉のサバゲーフィールドだったわね。私も参加してたから」

「へえ〜そうなんすか。因みにどんなのを？」

「え？ああ、電動ガンの事？う〜んとね〜あっこれね」

そう言っ指さした先にはM60が置いてあつた

「え？これっすか!？」

俺は驚いた。だって、M60は大の大人でも運ぶのがやっとだと言
うのに、女性で運べるのはすごい事だ。あつ因みにサブゲーっ言
うのはサバイバルゲームの略で電動ガンっっていう銃の玩具で撃ちあ
う戦争ゲームの事だ

「うん、私っで重装備兵だっし、持つ事には何の苦もなかつたわ
よ。それに玩具ならなおさらだわ」

「へえ〜すごいつすね〜」

「そ、そう？照れるわ〜／／／」

そう言っ顔を赤くする綾瀬さん か、可愛い／／／

「そっいえば、秀治君はどんなの持つてるの？」

綾瀬さんが言う

「俺はこれですかね。イサカM37とM700のガス銃ですな」

「へえ〜ガス銃の方が威力が強いわね〜」

「綾瀬さんはガス銃使わないんですか？」

「うん、と言うより電動の方がしっくりきてるわね。やりやすいから」

「そうなんすか。でも、ビックリだな。まさか、本職の人も参加してたなんて」

「そうでもないわよ？ 実際、関係者がサバゲーをやってるなんて珍しくもないし、それに隊長や訓子だってやってるんだから」

「ええ！！マジっすか!?!」

二人は運転席の方に居るため聞こえていない

「うん、そうよ」

「へえ〜やっぱすごいな〜」

そう言った瞬間、車が止まった

side 秀治 終了〜

「お……………きて……………」

「う、うん」

誰かが呼んでいる気がする

「き……………さい……………修……………ん」

「フワ〜」

それでも起きなかった俺

「もう、しょうがないですね〜でいや!」

「あいた!?!」

俺は飛び起きた

「あっやっと思きました。おはようございます。修さん」

美麻さんが挨拶をした

「あ、ああおはよう。起こしたのって美麻さん?」

「はい、こうすれば修さんが起きるって琥珀さんから」

手元にはいつの間にかあったハリセンだった。っていつか、お・ま・え・か!?!琥珀

「おい、琥珀ちよ〜とお仕置きされようか?」

「ええ!?!まじっすか!?!どんなお仕置きをされるのでしょうか〜も
しかして〇〇調教とか!?!あ〜楽しみですわ〜」

琥珀の目が輝いているというか、何かを期待しているようだ、この
変態メイドは

「え？なにそれ怖い。お前が俺の専属メイドとかないんですけど、マジで」

俺が言った

「もう修様、そんなこと言って、本当は嬉しいくせに」

「なるか！アホか！お前は！」

そう言って車を降りる御別橋に着いたようだ。亀爺や勲さん達は先に降りていたようだ

「おや、おはよう。修君」

勲さんが言う

「おはようございます。御別橋に着いたようですね」

俺が言った

「ええ、けど、あなたの言った通り、こっちも酷い状況ね。確か、こっちも封鎖をしてたはずなんだけど……」

そう言って周りを見渡すが、警察官の姿はなく、車の残骸とゾンビ共の死体が転がっており、床主大橋と同じ状況だった

「じゃあ、様子を見て来てから渡るとしますか、」

「そうだな。それが良いだろう。小ノ牧さんらにも相談してみてもどうだ？」

勲さんが言う

「そうですね。おい、変態メイド、小ノ牧さんらを呼んで来てくれ」

「なんですか、そのランクは」

琥珀が言う

「つつさい、俺の中のランクはそうなってるんだよ。早く呼んでいい。じゃないと、更に下げんぞ。」

「分かりました。少々お待ちになって下さい」

そう言って家の変態メイドこと琥珀が小ノ牧さんらを呼びに行った。数十秒後、小ノ牧さんらが来る

「どうしたのかね？修君」

小ノ牧さんが言った

「ええ、この先が御別橋なんですけど、状況が分からない感じなんで一度様子を見て安全を確認してから橋を渡ろうと思ってます」

俺が言った

「そうか・・・分かった。では、我々が行くとしよう。篠田、綾瀬、準備をしろ」

小ノ牧さんが命令を出す

「了解(しました)」

そう言っつて二人は準備しに戻る

「じゃあ、何か変化があつた場合、連絡して下さい。こちらでも援護できるようにしておきますから、はい、無線機」

そう言っつて小型無線機を渡す

「分かつた。では、行くぞ」

そう言っつて三人は進んでいく

俺はもしもの状況に合わせて秀治と一緒にangelの上に乗つてスナイパーライフルをいつでも撃てる体制にとつた

俺はドラグノフSVD、秀治はSL-9という某国の狙撃銃を使つていた。SL-9とはH&Kの狙撃銃でPSG-1の発展版と思つてくれればいい、威力、距離共に格段に上がっており使いやすいとの評価も受けている銃だ

「さて・・・どんな事が待ち受けてますかね」

秀治が言う

「秀治、縁起が悪いぞ」

俺が言つた

「悪い悪い、つい、な？」

「全く、おる？車の影から一匹、」

そう言つてドラグノフで射撃する。でかい音だが奴らに気付かれてしまつたろうか？まあ、そこは状況を判断してやるべきだな。弾は見事ゾンビ共の頭に直撃し、綺麗な風穴を造つた

「nice kill」

秀治が言つた

「あんがとよ。ほれ、お前の方にも来たぞ」

「OK、任せろ」

そう言つて秀治も撃つ。SL-9はドラグノフほど音は出ないが、弾は高性能な物を使っているので威力は抜群だ。その証拠に撃たれたゾンビが吹っ飛んで他の奴も巻き込んでいった

「いいセンスだ」

どごそのへびのオッサンが言つようなセリフを言つた

「おつ戻つて来たようだが。案外早いな」

秀治が言つた。見ると、小ノ牧さんらは戻つて来ていた

「お疲れ様です。どうでした？」

俺が言った

「ああ、その事なんだが、意外な掘り出し物が出てきたぞ。着いて来てくれ」

そう言っつて再び橋に戻る小ノ牧さん

「なんだろう？」

秀治が言った

「さあ？とにかく行っつてみるしかないね」

そう言っつて俺らは小ノ牧さんらに行っつて行く

橋の中腹

俺達は橋の真ん中まで来ていた。そこにあつたものは……

「おいおい、なんで、73式のトラックが停まつてるんだ？」

「それに、米軍までいるなんて……」

橋の中腹には自衛隊が使用する73式トラックとハンヴィーとかが停まつていた。周りには兵士の死体だけで生き残りはいなかつた

「私達にも分からんが、きつと床主市市内にも兵士たちを展開させて殲滅しようとしたのではないか？」

小ノ牧さんが手を合わせながら言っつた。俺達もその場で手を合わせる

「さて、この人達には悪いが武器・弾薬類はすべて貰ってしまおう」
俺が言った

「確かにそうですね。兵器があっても動かす物が無ければ無用ですね」

琥珀が言う

「よし、秀治、お前は73の方を調べてくれ。俺はハンヴィーを調べろ」

「了解」

そう言うと秀治と綾瀬さんが73の方に向かった。ハンヴィーには俺と訓子さん小ノ牧さんで向かった。他の人達はその場で待機し、琥珀と勲さんが車を取りに行く

「ハンヴィー車内」

車内は意外ときれいであつたが、薬莢が大量に散乱していた。おもに機関銃の薬莢だ。このハンヴィーに載っているのはM2キャリバー重機関銃だつた。その弾薬が大量に置いてあつた。

「お、まだ使えそうだな。このハンヴィーは」

「そうだな。これ自体も、もらっておくか」

小ノ牧さんが言う

「だとしたら、ハンヴィー二台のLAV-25となる訳ですか」

篠田さんが言う

「そうですね。これで、人も物も効率よく運ぶ事が出来ますよ」

俺が言った

「お、おい！修！えれえーもん見つけたぞ！」

秀治が言った

「慌てなさんな。何を見つけたって言うんだ？」

俺が言った

「と、とにかく来てくれ！」

そう言われたので俺達は73の方に行った

（73の荷台）

「ほら、こいつだ」

「おいおい、こいつは……」

そこに有ったのは大量の火薬及びロケット砲などの重兵器だった。よく爆発しなかったな。中には対戦車ミサイルやC4爆弾といった火薬類がたくさん置いてあった

「何に使うつもりだったんだ？」

俺が言った

「意図は分からんが、ゾンビ対策に持って来たのだろう。しかし、これだけ大量となると高層ビルが一つ潰せるほどだぞ」

小ノ牧さんが言う

「ま、まあ、ついでに貰っておこう。何かに使えるかもしれんしな。さすがに俺の所にもRPGとかは置いてなかったしな」

「そ、そうか。じゃあ、もらってしまおう。綾瀬さん、このトラック動きます？」

秀治が綾瀬さんに聞いた。ていうかいつの間にか仲良くなってんな。秀治の奴

「はい、点検しましたがどこにも問題はありませんよ。動かせます」

「そうか。じゃあ、もらってしまおう」

そう言って俺達は新たな車両をもらう事にした。

そして、無事、橋を渡る事が出来、俺達は反対側に到着した

爆弾 爆弾 (前書き)

時間に余裕ができたので出したいと思います・・・テスト中なの
に何やってんだ俺！

爆弾 爆弾

俺達は御別橋にて、新たな車両と武器を手に入れた。だが、疑問に思っているのは何故、米軍が床主市に來ているのか？自衛隊ならまだしも外国の軍隊が介入するほど余裕はないはずだ。なんせ、世界中でゾンビ騒ぎが起きてるんだからな

そんなこんなで俺らは米軍のハンヴィーと73式トラックと一緒に動かして御別橋を乗り越えた。俺達は警察署に向かっていた

〈国道〉

「でりゃあ！！死ね死ね死ね！！！！」

俺は自分のハンヴィーに付いているM134ミニガンでゾンビ共の群れに穴を開けながら進んでいる。弾の嵐を喰らったゾンビ共は文字通り、塵となっていく

「ヒヤッフウウウ！！！！最高！！！！おら！！どんどんこいや！！」

そう言いながら俺はありったけの弾を使っていく

え？そんなに使って大丈夫なのかって？大丈夫大丈夫、俺には強いコネがあるんだからさ。あっ因みにそれぞれの車に乗っているのだが、誰がどこの車両に乗っているのか紹介しよう

ハンヴィー（修専用）

修

美麻さん

メアリー

angel

琥珀

小ノ牧隊長

篠田さん

ハンヴィー（米軍仕様）

勲さん

亀爺

73式トラック

綾瀬さん

秀治

と言う感じになっている。というか。本当に秀治の奴いつの間にか綾瀬さんと仲良くなったんだ？妬ましい

今、俺はミニガンを操作しているので運転はメアリーに任せてある。美麻さんは衛星からこころ辺の状況をモニタリングしてくれている。

非常に便利だ

「修さん、この先、200m先で多重事故がなっています。どうしますか？」

美麻さんが言った

「他に道はない？」

俺が言った

「え〜と、ダメですね。脇道とかありますけど、この車列じゃ幅が広すぎて通れません。」

「そうか・・・多重事故ってどんな感じになってる？燃えてる車とかある？」

「え・・・っと、周りが燃えていますけど、大元であるバスやらトラックやらは燃えずに残ってますね。それがどうかしましたか？」

「閃いた。ちっと面白い事を思いついたぜ。メアリー、このまま多重事故の所まで行ってくれ」

「了解」

そう言って俺らは先へと進んで行った

〜多重事故現場〜

「うわ〜こいつは酷いな〜」

秀治が言った

あれから、現場まで辿りついたのだが、美麻さんの言った通り道を塞ぐ形でトラックやバスなどの大型車両が事故を起こしていた。その間には警察車両が挟まれるように潰れており、中では警官が苦しんだ表情をしながら死んでいた。もちろん、周りにはゾンビ共が徘徊していた

「さて、汚物処理と行きますか。」

そう言っただけは物干し竿を鞘から抜いた。ん？なんでそんな事をするのかって？まあ、簡単に言うると弾薬節約つてのもあるんだが、もう一つ面白い事を行うための準備みたいなものだ

「じゃあ、さっき言った通りにしてくれませんか？できるだけ、音を立てずにお願ひします。銃を使う時もサプレッサー付きので」

「了解した」

そう言っただけで倭刀を持つ小ノ牧さんが言う。

ゾンビ共はそこまで多くないので俺らの人数ですれば容易い事だ。問題はゾンビ共を人間と見てはいけない事だ。少しでも心に隙があつてしまつたらあつという間にゾンビ共の仲間入りになってしまう。今の所、危ないとすれば一体も殺した事のない美麻さんだろう。彼女はほとんど情報面で役に立ってもらつてるだけだ

「美麻さん、大丈夫か？」

俺が言った

「はい、大丈夫です。やる時はきっちりとやります。」

そう言っつて薙刀を構える

「そうか。危なくなったら、いつでも言っつてくれ。俺が援護する」

そう言っつて俺も物干し竿を構える

「はい、お願いします」

「それじゃあ、行くぞ！」

そう言っつてゾンビ共に切りかかっつていく

「せいやー！」

俺は縦に振つた。見事にゾンビは真つ二つに切れた。その後も横に振つたり袈裟切りをしたりといるんな切り方をやつた。全部、親父とやっつているときに修得した物だ。我流ではあるが・・・順調に切っつていく俺だが美麻さんの方が心配になつたので見てみた・・・が

「あつはははははは！！！！！！！！！是非もなし！！！！！」

笑いながらゾンビ共を切っつていく美麻さんがいた

っつていうか、是非もなしっつて・・・信長じゃあ、あるまいし人っつて見かけによらないな、あんなにも変わるなんて、一番の驚きだな

「ワオ！美麻さんも変わる時は変わるんだな！これは負けらんないな」

そう言って切っていく俺らだった

数分後……

「これで、終わりっど！！」

そう言って最後の一体を切った

「よし」

俺は物干し竿についた血を一振りで落とし鞘に収めた。周りを見ると他の皆も終わっていたようだ。ほとんどが首が取れていたり割られていたりした

美麻さんの方も無事に終わったみたいだ

「お疲れさん、美麻さん」

「あつ修さん、」

「いや！すごかったね！あんなにも変わっちゃうなんて！」

「そ、そうでしょうか？でも、薙刀をやめたのってこっぴつ癖が付いていたからなんですよね。」

そう言って少し暗くなる美麻さん

「そういうのもアリなんじゃないか？俺だつてアフリカで人殺しなんかやって来たさ。用はその狂気に飲み込まれない事が大事なんだ。最初は誰だつて気持ち悪がつたりするもんさ。でも、人つてそういうのに慣れちまうと簡単に受け止めるからな。」

俺が言った

「そう……ですか。私はもう少し時間がかかるかもしれないです」

「そうか。でも、一人で抱え込もうとするなよ？それが却って逆効果になるからな。話したいときは俺に言ってくればいい。少しでも力にはなれるはずさ。こんな世界だからな。いや、こんな世界だからこそか」

「はい、その時はお願いします」

そう言つて俺らは皆の元に戻つた

「で？全部切つたのはいいが、どうするんだ？修」

秀治が言った

「ああ、せつかくだ。ここにある爆弾を使って花火でも撃とうかと思つてね。小ノ牧さん、手伝つて頂けますか？」

「ああ、もちろんだとも、花火は大好きだぞ」

にっこりと笑う小ノ牧さん

皆、少しずつ狂い始めているのが見て分かった。正常な人から見たら俺達は異常集団にしか見えないだろうが、そんなのは関係ない。こんな壊れた世界なんだ。楽しまないと損だろ？

「じゃあ、秀治 73からC4爆弾を持って来てくれ」

「おk、把握」

そう言っつて秀治は綾瀬さんと一緒に73の方に向かった。暫くすると木箱に入ったC4を持ってきた。

「ふいー重たい重たい」

秀治が言っつた

「秀治、爺臭いぞ。」

「OH! dead!」

「まあ、いいや。小ノ牧さん、周辺の車の方に取り付けお願いします。俺は道を塞いでいる大型車両の方に行つてきます」

「了解だ。綾瀬、篠田、お前らも手伝え」

「了解」

そう言っつて俺らは道にC4爆弾を取り付けていく

（数十分後）

「準備はいいか？」

俺が皆に無線で言う。

あれから、それぞれの車両に乗って待機状態にした。ただ単に吹っ飛ばすのでは勿体ないので塞いでいる車両に防犯用のブザー（小学校などで使ってる奴）を取り付けた。このブザーは美麻さんが持っていた物だが必要ないと言うので餌として置いてみた。あいつらは音に引かれるからな。あれだけの大音量ならどんぐらいのゾンビ共が来るか楽しみだ

「行くぜ」

そう言つてブザーの元栓を抜いた。案の定、ものすごい大音量だ。すぐさまブザーを廃車の方に投げた。

ブザーは依然として大音量を流し続けている。その時だった

『アアアアアア~~~~』

脇道や裏路地からゾンビ共が現れ始める。その数はどんどん肥大化していった

「おいおい、どんだけいるんだ？まあいい、満ち潮か……皆、準備しろ！」

そう言つて手元のスイッチを押す

すると、数秒後にゾンビ共が集まっている場所で巨大な爆発を起こした。爆発と同時にガソリンに引火したのである。ゾンビ共は言うまでもなく木端微塵になつてしまった

「あゝあ、汚ねえ花火だ」

俺が言った

「修様、そんな事を言ってる場合じゃないですよ。後ろから団体様がお見えになっています」

無線で琥珀が言う

ミラーを見るとさらにゾンビ共が音に引き寄せられたようだ

「よし、長居は無用だ！一気に行くぞ！」

そうやって俺のハンヴィーを先頭に次々と塞がれていた道を走破していく。後ろではゾンビ共が声を上げながらその辺をうろついていた

床主警察署とアメリカ軍

俺らは順調に床主警察署を目指していた。途中、ゾンビ共の襲撃もあつたが、こつちの強力な重機関銃の前には歯が立たなかつた

そして、床主警察署付近にまで到着する事が出来た

「あゝあ、やっぱ、弾の消費量が激しいな。ガトリングの弾が結構少なくなつてるな」

俺が言った。

俺の車には主にガトリングの弾が保管されていたが、その弾薬箱も簡単に確認できるような数にまで減ってしまった

「そうね〜ここら辺はやたらと多い気がするわね〜おっと、危ない」

メアリーが運転しながら言った

「ですね。angelの方には有ったけな？無線で確認しておこう」

そう言つて無線に手を掛けようとした瞬間

「こちら……中隊……現在……警察署に……
待っている。生存者が……つけたら……至急……ま
で、来て下さい……繰り返します」

俺達の使っている周波数とは別の回線から連絡が入る。しかし、電波状況が悪いのか、途切れ途切れになつてしまつている

「修さん、これって……」

美麻さんが言った

「ああ、どつかの中隊だな。避難民を救出に来たって事か。とりあえずは行って見るか」

そう言っつて俺らの車列は警察署を目指す

く床主警察署付近く

無事に、警察署付近にまで辿りついた。すると驚くべき物が停まっていた

「おい、修、屋上に止まってるのってブラックホークだろう？」

俺らは一旦車から降りて警察署を見ていた。幸い周りにゾンビ共はいなかった

「ああ、しかも、自衛隊のじゃない。ありゃあ海兵隊の所有物だ。しかし、何でこんな所に？」

屋上にはUH-60ブラックホークが停まっていた。横文字には自衛隊ではなくUSMCと書かれている。USMCとは、アメリカ海兵隊の略称の事

「分からんね。自衛隊にもそついう情報は入って来ていない。だつたら確かめるしかあるまい」

小ノ牧さんが言う

「ですね……こちらから連絡を取ってみますか？」

「そうだな。私が説明しよう」

そう言つて米軍仕様のハンヴィーに乗り込む小ノ牧さん、きつと無線連絡するのであろう

俺達はその場で待機となつた

〈数分後〉

「修君、中から連絡があつたぞ」

「どうでした？」

「ああ、確かに海兵隊だつた。向こうは私同様少佐のようだ」

小ノ牧さんが言う

「そうですか。で、向こうはどうしろと？」

「そのまま、中に入って来て欲しいだそうだ。玄関で迎えると」

「そうですか。じゃあ、移動だ」

そう言つてそれぞれの車両に乗り込み、警察署内に入った

〈床主警察署 駐車場〉

駐車場に入ると中も酷かった。ほとんどの車は炎上、動けるとしてもバリケード代わりに使用されている物ばかりだ

俺らはそのまま止めて車を降りる。玄関には三人ほど兵士達が立っていた。恐らく真ん中に立っているのが小ノ牧さんの言っていた人だろう。

「ご苦労様でした。ここまで来れば安心ですよ。私はアメリカ第10師団、海兵隊のアリス・マーガロン少佐です」

そう言って敬礼する

「私がさっき、無線連絡した者だ。陸上自衛隊第5師団の小ノ牧少佐である。」

「なるほど、先程のはあなたでしたか。よく無事でしたね、自衛隊はほとんど壊滅したって聞いてましたから、心配してたんですよ」

アリス少佐が言う

「本当ですか？その話」

俺が言った

「ええ、司令部の話じゃあ主な自衛隊の駐屯地は襲撃を受けて、全滅又は再集結して反撃に移ってるみたい。と言うよりあなたは？」

「あつと、すいません。俺は古知屋 修って言います。」

「古知屋？・・・ああ！あの貿易会社の事ね。てことは、息子さん？」

「ええ、まあ、そうなんですけどね。と言うより何で知ってんすか？」

「まあ、殆どの軍があつた貿易会社から頼んでるからね。有名なのは当然の事よ」

「まあ、それはともかくとして、どうして海兵隊がこんな所に居るんです？アメリカも酷い事になって居るのでは？」

小ノ牧さんが言う

「ええ、確かにそうなんだけどね。当初はアメリカに戻ろうとしてたんだけど、空母「ケストレル」が謎の襲撃を喰らつてね。仕方なく、ヘリでこの付近まで移動したの、で、警察署で避難民の確保をしながら待つてたつて訳、無線も故障気味だから司令部とも連絡が取れないで居るわ」

そう言つてため息を出すアリスさん

「そうなんですか。他の地域に居る隊員はどうしたんです？沖縄とか」

「ああ、沖縄とかは米軍の指揮下に入ったみたい。でも、外部とかの受け付けは行ってないわ。本国の方も *chordred* に入つちやつたみたいで、大統領もホワイトハウスから退避したつていうし、どうなるのかしらね？」

「chordredか・・・」

chordredとは、アメリカの危機レベルの度合いを示すもので、いろんな呼び方があるが、今回の場合、完全封鎖と言う意味に繋がる。国外はもちろん国内でもゾンビ共を出さないために鎖国状態にしてしまう事だ。この場合、船や飛行機で辿りついたとしても戦闘機や護衛艦、SAMなどで撃墜されてしまう

「まあ、同じ人間なんだし、仲良くやるってのは大事なことよね。てことでこれからもよろしくね。」

そう言って握手を差し出すアリス

「ええ、こちらこそ」

そう言って握手をする俺

その後も皆の自己紹介をしていった

〈警察署内〉

「では、こちらで休んでいて下さい」

俺らはそのまま、他の避難民がいる部屋に通された。小ノ牧さんや勲さんとは別行動となった。

「ふいふやつと休める」

秀治が言った

「そうじゃな。僕も安心できるわい」

そう言っつて近くの椅子に腰かける亀爺

俺らの他にも自力で辿りついたであろう避難民がいた

「ブツブツ……」

「全く、会社と連絡が取れん！どうなっているんだ！？」

「はあ……」

周りは情緒不安定ばかりになっていた。きっと精神的に来てるんだろ。自然災害とかならまだ、説明は着くがこんなゾンビ騒ぎでは心がおかしくなったってしょうがないといえはそれで終わる。まあ、俺らに関係なければ、いい話だ

「さて、警察署に来たのは良いが、これからどうするべきかね。」

俺が言った

「でも、アメリカ軍もいるんだし、多少は大丈夫じゃないか？」

秀治が言った

「俺が言っつてるのはそこじゃないんだよ。いくら、米軍がいるからって食糧や飲料水が手に入る訳じゃないだろ？」

「うむ、確かに……」

「でも、食糧は私達の間でもどうにかありませんか？」

美麻さんが言った。きっと車に積んである食糧の事だろう

「美麻さん、俺の車に積んであるのは俺や琥珀、そして秀治や美麻さんの人数を入れて丁度、二、三カ月分になるんだ。この警察署にいる全員を合わせたら一週間持つかどうか分らん。それぐらいの量しかない」

「あつそうなんですか・・・そういえば、こちら辺にアウトレットがあつたはずですけど、そこはどうなんですか？」

「加工食品なら大丈夫かもしれないが、魚や肉と言った物はダメになつてくるだろうな・・・いくら冷凍が効いてるからって、それに、もしかしたら、すでに無くなつてる可能性だつて高いし、第一誰が取りに行くんだ？」

「えっと、それは皆で力を合わせれば・・・」

「答えはNOだ。ここにいる連中をしてみる。アリス少佐とかなら協力すると思うが避難民は全くつて言つていいほど無能集団に近い、こんな連中に着いて行つたらそれこそ明日の日は拝めないぜ」

そう言つて周りを見渡す

一人は部屋の隅っこでブツブツと独り言を言いながら言う高校生らしき少年、もう一人はこの状況下だと言うのに仕事一筋的なサラリーマンがいたりと精神的に危ない連中ばかりだ。もしかしたら、途中でとんでもない足手まといになりかねない。この騒動を戦争と置き換えれば、避難民は銃も握つた事が無い新兵だ。そんな奴は戦場

ではいい的になるだけだ。

「確かに、修の言う通りかもしれないな。もしかしたら軍隊って言う権威に縋っているだけかもしれない。」

秀治が言った

「でも、こんな状況だからこそ、皆で力を合わせなきゃいけないんじゃないですか？」

美麻さんが言う

「美麻さんが言ってる事は最もな事だ。だがな、人間はそんなに甘くはできちゃいない。一人で生きようとする者、他の奴を落としいれてでも生きようとする者、仲間と一緒に生き抜く者、様々な奴らがいる。」

俺が言った

「昔の日本ならば、そう言う輩も多くはなかったがの〜ここ最近の日本は弛み切っておるからの〜」

亀爺が言った

「まあ、つまりはここにいる避難民は当てにならないと言っ事だ。さて、俺は一服でもして来ようかね」

そう言っ部屋を出る。そのまま屋上へ向かった

〜屋上〜

屋上にはブラックホーク以外何もなかった。俺はフェンス越しに腰かけタバコに火を付けた

「ふう〜落ち着くね〜」

そう言いながら街の風景を見ていた。辺りは叫び声なども聞こえなくなっていた。代わりにゾンビ共が徘徊していた

「おや、修君も一服かね？」

屋上に来たのはアリス少佐だった

「ええ、こうしてるのが一番、落ち着くんで」

俺が言った

少佐はそのまま俺の隣に座り、胸ポケットから葉巻を取り出した

「どござ」

そう言ってジッポのライターを取り出し火を付けた。

「すまない」

そう言って葉巻に火を付ける少佐

「さて、これからどうしたものかね」

少佐は葉巻を吸いながら言った

「分かりませんね。全世界でこうなった以上、生き残るしか手はないと思いますよ？あんな奴らと一緒に街を徘徊って楽しくもないjokeですから」

「ハハッ確かにな。帰るべき家を失った我々は某国の軍隊と言った所か。」

少佐が言う

「本国に帰れないってのは辛い事でしょうね。でも、希望を捨てたらそこで終わりだと思いますし、何より、仲間に失礼だと俺は思います」

「そうだな。ワザワザすまない。初日早々こんな話をしてしまった」「良いんですよ。人間だれしも、一人でいるってのは寂しい事です。少佐みたいな美人な人が泣いたって嬉しい事なんか一つもないですしね」

俺が言った

「び、美人だと！？／／／」

少佐が驚いたように言った

「あつすいません。もし、気に障ったのでしたら謝ります」

「い、いや、いいんだ・・・／／／そ、それじゃあ、私はこれにて失礼する。」

そう言って屋上から去っていく少佐

「……………俺、やっちゃったかな？」

と一人言う俺だった

床主警察署とアメリカ軍（後書き）

人物紹介

アリス・マーガロン

軍人

階級 少佐

床主警察署にいた海兵隊の隊長、空母で謎の襲撃を受けてしまい本国に帰れなくなってしまっていた。そこで、避難民の救助に当たっていた所、警察署を拠点として置く事になっていた軍人
スタイルはアイドル並みのスタイルで胸はDカップ髪は金髪で腰まで届くロングヘアー

使用武器は現代では珍しいブローニングBAR軽機関銃を使う

爆発

俺達は警察署で海兵隊のアリス少佐とその分隊のチームと合流する形となった。ついでに避難民とかもいたがどれも戦力外的な奴らばかりだった

「うーん、と二階部分に確か、重機関銃を設置するんですけどよね？
小ノ牧さん」

俺はa n g e lの後方ハッチからM2キャリバーを取り出しながら言う

「ああ、二丁出せれば丁度いいかと思うが、」

小ノ牧さんが言う

暫くの間、警察署に留まる事になった俺達は補強を行う事にした。そのため、重機関銃を取り出し、二階部分に装着する事になったのだ。他の皆も手伝ってくれている。美麻さんとかはパソコンがハッカー並みに侵入できる子だったので、アリス少佐がお願いして米国軍隊の司令部とテレビ電話できるようにしている。俺とか秀治、小ノ牧さん、勲さんとかで重機関銃を運び出している

他の避難民達は手伝おうともしない。全く嫌になるぜ

（二階窓際）

「よし、秀治、ここを溶接してくれ。くれぐれも回転部分まで溶接

するなよ?」

俺がキャリバーを置いていった

「んな、へマやる訳ないじゃん?まっかせろよ。」

そう言っつて溶接道具を持って機関銃に近づく

溶接道具などは警察署の押収品室に置いてあったので遠慮なく使う事にしたのだ。それに避難民が勝手に武器を使わないように、武器保管庫には常に米兵が監視している。俺とかは特別に許可してもらってるけどね

「小ノ牧さん、M2の弾をこっちに運んで来てくれますか?俺は反対側の部屋にキャリバーを持って行くんで」

「分かった。勲さん、あなたも付いて来てくれますか?」

「よし、分かった。」

そう言っつて小ノ牧さんと勲さんは武器保管庫に向かう。俺はangelに戻り、もう一つのキャリバーを運ぶ作業をしている

angel

『アアアアア』

バリケードで封鎖された門にゾンビ共が群がっていた

「へっ、この門がある限り大丈夫だろう。内側からやられなきゃな。」

それにしても、なんか増えて来てるな。気のせいかな？」

昨日まではそこまで多くなかったはずなのに、ゾンビ共の数が時間が経過する度に増えて来ているのだ。こいつらは音に反応するからな。でも、そんな大きな音は出してはいないはずなんだがな……

「考えてもしょうがないか。さて、さっさと運んじまおう。」

「修さん」

「ん？」

振り返ると美麻さんがいた

「どうしたの？美麻さん、確か、テレビ電話できるようにしてたんじゃないっけ？」

「ええ、それは終わったんで、手伝おうかと思いましたが、今、アリス少佐が米軍本部とテレビ電話してます。」

「は、繋がったんだ。で、暇だから手伝いに来た、と」

「はい、そう言うことです」

そう言って笑顔になる。ヤベツいい笑顔

「そうか。じゃあ、一緒に機関銃を運ぶ手伝いをしてもらおうかな？重いと思うけど、大丈夫？」

「はい、やりましようー！」

そう言って駆けていく、が

「んぎゃ!？」

思いつきりこけました。乙です

「だ、大丈夫かい？美麻さん」

俺が声を掛ける

「あいたたた・・・大丈夫です」

鼻を押さえながら言う美麻さん

「ま、まあ、さっさと運んじまおう。」

そう言って一緒に運ぶ俺達であった、が

運ぶ途中、二人で運んでいたんですが、如何せん力が抜けそうになりました。何故かって？

そりゃあ、目の前でかい双子山が大きく揺れてたら釘付けになるっしょ？男なら誰もが見ちゃうような光景だ。

俺だって健全な二十歳の大学生なんだぞ？前かがみになっちゃいました

そんなこんなで無事にキャリバーを運び終わりました。本当にありがとうございました。御馳走様です

「ふう〜なんとか、運べましたね〜」

美麻さんが言う

「あ、ああ、そうだね……………」

俺は若干前かがみになりながら言った

「?どうかしたんですか?」

「い、いや、気にしないでくれ。」

「は、はあ」

「お〜い、修〜こっちは終わったぞ〜」

秀治が部屋に入ってきた

「あつ、秀治さん、お疲れ様です」

「おう、って美麻さん何故ここに?」

「はい、アリス少佐の仕事も終わったんで、修さんと一緒に機関銃を運んでいました」

「ほ〜、そうかそうか。じゃあ、俺もチャツチャかと終わらすとしますかね〜」

そう言って窓際に近づいた

「じゃあ、私は一旦、アリス少佐の所に戻りますね。」

そう言つて美麻さんは部屋を出る

「修、どうしたんだ？股間なんか抑えちゃつて」

「いや、健全な男子なら分かるっしょ？」

「あ、そう言う事、修も男だな、嬉しいね」

「お前は俺の親父か・・・まあいい、じゃあ、秀治、ここも任せ
たわ。俺は様子を見てくる」

そう言つて部屋を出る。

俺はそのまま、屋上に繋がる階段に差し掛かった時、違つ部屋から
アリス少佐が出てきた

「あつ修君」

「どうしたんすか？少佐、そんな暗い顔をして」

妙に暗かつた少佐に聞いた

「ああ、実はな、無事に本国と連絡が付いたんだ。で、至急、救援
部隊を送つて欲しいと要請したんだが、ダメだった。本国でもす
でにアメリカ軍はほとんどが壊滅に追い込まれたらしい。西海岸は全
滅だと言つていた」

「それは……大変ですね。で、司令部はなんと？」

「生き残って欲しいだそうだ。現在、連絡が取れているのは沖縄、横須賀、米国大統領を乗せた空母艦隊、そして、我々だけだそうだ。その他とは連絡が取れていないらしい。これからどうしたものかね……」

そう言っつて少佐は街の外を見る。外では未だにゾンビ共が徘徊している。まさに終末と言う奴だ。イカれた宗教者とかは天罰だとか言いそうだな

「なら、生き残るべきですよ。少なくとも俺はそう思いますね。」

「そうだな……君の言う通りだな。ここで死んでしまっつては何の意味もない。そしたら、部下に示しがつかないしな」

「その通りですよ。俺に出来る事があれば何でも言っつて下さい。力を貸しますよ」

「ありがとう。少し、気力がわいて来たよ。」

そう言っつた瞬間だった。

「隊長！」

一人の米兵が駆けしてきた

「どうした、そんな慌てて？」

少佐が言っつた

「避難民の一人が急に暴れ出したんです！刃物を所持していて錯乱状態に陥っています！」

「何！？分かった。すぐ行こう！」

そう言つて俺達はその部屋に急行した

（避難部屋）

「ひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ！！！！！！！！！！どうせ、助けな
んか来ないんだ！ここで、皆死ぬんだ！ひゃっひゃっひゃっひゃっ
ひゃ！！！！！！！！！！」

俺達が部屋に入ると一人の青年が包丁を振り回しながら笑っていた。
思考回路がイカれたんだろう。この騒ぎなら出て来てもおかしくは
ない

「逝かれたか」

俺が言つた

「修、字が違う」

秀治が言つた

「そつだな……でも、間違いではないだろ？」

「そつだね……」

そう言った瞬間

「今すぐ、刃物を手放しなさい。さもないと、それ相応の手段を持ちいらせてもらおうわ」

アリス少佐は銃を構えながら言った

「なんだ？俺を銃で黙らせようって言うのか？どうせ、皆死ぬんだ！今さら、変わらねえだろ！」

青年は言い放つ

「あいつは……ダメだな。この先、生きていけないな」

俺が言った

「確かにね……でも……」

と言った瞬間だった

急に外が光り出した！

「な、なんだ！？」

秀治が言った。周りの皆も外の方を見ていた

「こいつは……まさか……」

アリス少佐が言った

果たして、外からの閃光は一体何なのか？

「りゃあ、ないぜ……」

俺達は錯乱した少年を止めようとしたのだが、その途中で急に外が光り出した。

（警察署の一室）

「な、なんだ！？ありゃあ！？」

秀治が言う

「これは……まさか……」

アリス少佐が独り言を言う

他の皆も外の気が引いているようだ

（今だ！）

俺はそう思っただけに包丁を持っている少年に近づき、手刀で包丁を落とし、腕を後ろで拘束しそのまま押し倒した。

それと同時に光が収まった

「は、離せ！」

少年が叫んでいるが俺は無視してM9で頭を叩いた

「ウグ！？」

少年はそのまま気絶した

「うるさいんだよ。少し黙っとけ」

俺はそう言っただけで立ち上がる

「少佐、こっちは抑えましたよ」

俺が言った

「あ、ああ、おい、あいつを拘束して他の部屋に入れとけ」

少佐が部下に指示を出す

「にしても、あの光は……」

俺がそう言った瞬間、美麻さんが部屋に入ってきた

「修さん！あの光と同時にPCが死にました！あの光は何なんですか!?!」

美麻さんが言う

他の避難民も動揺を隠さないでいた

「高高度核爆発………通称EMP攻撃だ」

少佐が言った

「やっぱりそうですか」

俺が言った

「お、修、何がどうなってんだよ！」

秀治が言う

「さっきの光は核爆発の光だ。EMP攻撃と言って、大気圏外で核を爆発させ、その地域のPC、自動車、携帯などの電子機器はその機能を失われてしまう。厄介な攻撃だ。どっかの国が混乱して打ち上げたんだらうよ。全く、いらねえ世話をかせやがる。」

今、核兵器を所有してる国なんて限られてはいるが、最近ではテロリストでも核を持てるようになってきている。

「今、修君の言った通りだ。この地域にある電子機器はすべて機能を失われたであらう。ブラックホークもダメだな」

少佐が言った

「おい！どうなってるんだ！さっきの光は何なんだ！？いきなり、私のPCがイカれたぞ！」

サラリーマンの男性が言った

「申し訳ありません。少し静かにしてもらえますか？私達も調べているので」

「ふざけるな！軍人は市民のために動いているのだらう！だったら、

その「ダンッ！」！！」

一発の銃声と共にサラリーマンは静かになる

発砲したのは少佐だった

「いい加減にしるよ？私達だってまだ、把握しきれていないんだ。そのうるさい口をしまっておかないと次は一生しゃべれなくするぞ？」

少佐は今までにない気迫でサラリーマンに言った。サラリーマンは黙って縦に頷いた

「では、市民の皆さんはそのまま待機して下さい。結果が分かり次第、すぐに報告させて頂きますから」

そう言って部屋を出ていく少佐

「は〜怖かった〜」

秀治が言った

「ああ、目がマジだったからな。一瞬、ヒヤヒヤしたぜ」

俺が言った

「ですが、これからどうしましょう？EMP攻撃なら、私達の車もダメになってるのでは？」

美麻さんが言う

「うーん、一応調べておくか。秀治、琥珀、一緒に付いて来てくれ。美麻さんも一緒に」

そう言っつて俺達も部屋を出る

（駐車場）

「俺は自分のハンヴィーを琥珀はangel、秀治は米軍ハンヴィーを美麻さんは73式の方を見て行っつてくれ」

そう言っつてそれぞれに分かれる

「うーんと確か、こいつは対EMP対策してあつたんだっけな、エンジン掛けてみようつと」

そう言っつて自分のハンヴィーのエンジンを掛けてみる。ハンヴィーは問題なく動いた

「おっ動くな、やっぱ対策しておいて正解だぜ。」

そう言っつてエンジンを切る

「修様、angelの方も大丈夫でした。」

琥珀が報告しに来た

「そうか。二台は確保つと」

「修、米軍の方も大丈夫だつたぞ。」

秀治が言った

「修さん、トラックの方も大丈夫でしたよ」

美麻さんが言った

「あれま、全部大丈夫だったんじゃない。にしても、米軍の方は分かるけど、なんで、73の方にも対策が施されてんだ？」

秀治が言った

「まあ、自衛隊の中にも対策を施されている車両はあるけどな。と言っても限定されるが、しかし、EMPとなると発電所もダメになるな。今後の電力は無いに等しいか……」

「うえ〜ん、秀治君〜」

俺が言った瞬間、綾瀬さんがやってきた

「ど、どうしたんすか？綾瀬さん」

秀治が言った

「さっきのEMP攻撃のせいで、タマ〇っちが動かなくなっちゃった〜！」

俺達はズコー！お笑い芸人の如くこけた。

「なんで、世界の終末の時にそんなもん育ててんすか！？しかも、

時代古いし!」

秀治が最もな事を言った

「だって〜マイブームだったんだもん!せっかく大事に育ててきたのに〜」

「……なんだ?この茶番」

俺が言った。だって、さっきまで真面目シーンが出てきたのに一気に崩された感じだよ

「この先、どうなるのかね〜」

そう言いつつ俺達は再び、警察署に戻って行く

く???く???

警察署の中では別の動きがあった。

「クツフツフツフ、ゾンビがなんだ。僕だってやる時はやるんだ。」

そう言いつつ少年は裏の門のバリケードを壊していく、外にはもちろん、ゾンビ共が徘徊している

「僕は……世界の救世主になるんだ!」

少年は笑いながら裏門を開けて行くのだった

く警察署内部く

「ダメです！全PCがやられました！監視カメラも作動しません！」

一人の兵士が言う

「くそ！どうすればいい!？」

アリス少佐が言う

「ヘリの方も確認しましたが、ダメでした。エンジンがイカレています。」

屋上から戻った兵士が言った

「まさに、終末と言う奴か」

そう言ってパイプ椅子に腰かける

「少佐……」

「いや、まだ、手はあるはずだ。諦めてはいけない。」

「少佐」

その時、修が部屋に入ってきた

「ああ、すまない、修君、しばらく、時間をくれないか？もう、手も足も出ない状態だ」

「その事なんすけど、こっから、移動とかします？」

「ああ、そのつもりだが……」

「だったら、家のコンボイ部隊に乗って行きますか？全部、動きま
すよ？」

そう言つて修は笑つた

「ほ、本当か!？」

少佐は立ちあがつた

「ええ、すでに調べましたから」

「そうか……それなら」

と言おうとした時だった。一人の一般市民が慌てた状態が入ってきた

「おい！軍人さん！警察署にゾンビ共が入って来てるぜ！」

「何!？」

「それはどこだ！」

「裏の門からだ！バリケードが壊されていて、もう、すでに入つて
来ている！」

俺達はすぐさま、廊下の窓際に行った。

確かにそこには門が大きく開いていてゾンビ共がゆっくりと中に侵

入してきたのだった

「クソ！誰がやったんだ！？仕方ない、防衛態勢に入れ！」

そう言っつて部下の米軍兵士たちを指示していく、兵士達はM4やM870などを持ちだして、それぞれ動いていく

「少佐、俺達も手伝いますよ」

俺が言った

「すまない、手を貸してくれるか？」

「ええ、もちろんですとも、秀治、行くぜ」

「おっよ」

そう言っつて俺達は自分たちの車の所に行った

〈駐車場〉

途中で騒動を聞きつけた勲さんとメアリーに合流した。小ノ牧さんらはアリス少佐と共に動いている

「さて、どれを所望する？」

俺が言った

「なんでも、いいぜ？とにかく、室内で大丈夫な物だ」

秀治が言った

「そうか。なら、好きなものを取って行ってくれ。時間が無いからな」
そう言って皆がそれぞれの武器を持って行く。

俺はM14ライフルにサイレンサーを付けた物とベネリM4を持って行く事にした

「さあ、戦争をおっはじめようぜ？」

そう言って再び警察署に入って行く

史上最大の防衛線

俺達は警察署に留まっていたが、最悪の事態が起きた。どっかの馬鹿な国が核を打ち出しやがった。おかげで、核は日本上空で爆発しEMPを拡散させた。

さらに、まずい事が起きた。警察署に留まっていた避難民の誰かが裏門を開けて出て行ったみたいだ。出て行くのは構わないが、お返しと言わんばかりにゾンビ共が集中してこの警察署に侵入してきた俺達は防衛線を始める事となった

（廊下）

俺達はそれぞれのチームに分かれて二階、三階の重要な所に防衛線を構築し、ゾンビ共を待っていた。一階はすでに奴らに支配されてしまったため、諦めた。一階にも避難民は居たのだが、時すでに遅かった。

「さて、どうなることやら」

秀治が言った

「さあな。最悪の場合、ここから出る羽目になるだろうな。表は無事なんだ。車で脱出するしか手はない」

俺が言った

「そうだな。あやや？来ちゃいましたか」

秀治がそう言ったので階段の方を見ると服がボロボロで肉が引きちぎれた人間だった物がゆっくりと歩いている。一体ではない、数十体の群れをなして

「近くで見ると気持ち悪い物だな」

アリス少佐が言った

「まあ、慣れちまえばどうってことないっすよ。それじゃあ、諸君、私は戦争が大好きだ」

某吸血鬼アニメ少佐の台詞を言いながらM14で撃つ、サイレンサー付きなのでゾンビ共が俺達の存在に気付く事は確率的に低い

弾は静かに一体のゾンビの眉間に命中し、ドサツという音を立てて崩れた。他のゾンビは一瞬、止めるがすぐにその辺をうろついている

「確かに修君の言う通りだったな。まさか、音に反応するなんて・・・」

少佐は驚いたように言った

「俺も気づいた時は驚きましたよ。でも、音を立てれば、一瞬にして囲まれてしまいますから気お付けて下さい」

「了解した」

そう言って少佐は部下にアイコンタクトで指示を出す

部下は静かに回って行き、背後を取るような形になっていた

さらなるアイコンタクトで攻撃命令を出す、それと同時に部下は軍用銃でゾンビを掻っ捌いた。非常に気持ち悪い光景だ

「よし、こつからは俺がやる」

そう言っただけはM14でゾンビ共を狙撃していく、弾の無駄遣いにならないようにone shot one killで決めていく

数分後……

「制圧完了」

そう言っただけマガジンを交換する

「ヒュウ〜さっすが〜」

秀治が言った

「よせやい、褒めても何も出ないぞ」

「よし、移動する。おい、三階の部下に……（ガチャン！）」

少佐が指示を出そうとした瞬間、どっかの部屋からこれまた、大きな音でコップが割れるような音が響いてしまう。EMP攻撃によって全電子機器が停止し、音が無くなった世界ではよく響く音だった

『アアアアアア〜』

外でうるついていた奴らも音に気付き、次々と中へ侵入していく

「OH、shit!ここからは派手に行くぞ!少佐!」

俺が呼んだ

「なんだ!」

「すぐ、三階の連中に二階の避難民の部屋に向かって下さいと伝えて来て下さい!俺は、ここで防衛します!」

「分かった!移動が完了次第、君達の所へ向かう!待っていてくれ!」

そう言って少佐は階段を掛けていく

「お前は行かなかったのか?秀治」

俺が言った

「ああ、この世に英雄なんかいない。いるのは仲間の存在だけだ。修一人だけにかっこいい所は持って行かせないぜ?」

秀治は笑いながらM4に弾を装填していく

『アアアアアア〜』

ゾンビ共が来たようだ

「おや、来たようだな。戦争と行くこうか。」

そう言っただけは予備で持って来ていたバレットライフルを構える

「発射あああ！！！！」

そう言っただけで俺と秀治の銃から12・7mm弾と5・56mm弾がゾンビ共に向かって飛んで行く、5・56mm弾では、そのまま倒れるだけだが、機関銃の弾である12・7mm弾を食らっちゃったら普通の人間と言えど上半身と下半身が一生お別れする羽目になる

「うらあああああ！！！！！！死ねやーーーー！！！！！！」

秀治が叫びながらM4をぶっ放す

「食らうならこれでも食らってな！！」

俺もバレットをぶっ放しながら言った

しかし、数は減るところか増えていくばかりだった。次第にこっちの持って来ていた弾薬も減って来ている

「クソ！M4の弾薬が無くなっちゃったぜ！」

そう言っただけで秀治はサブであるウインチェスターM1887を取り出す、こいつは年代物のショットガンではあるがレバーアクションのため、非常に使いやすい物がある。有名な物だと映画ターミネーター2でシュワちゃんが使っていたショットガンの長くしたのがM1887である

「また、年代の古い物を・・・とこつちも弾切れか・・・しよがねえ」

そう言つて俺もベネリM4を取り出す

そして、二人でショットガンをぶつ放すが、如何せん、近距離武器なので飛距離は長くない

「まだ、援軍は来ないのか!？」

秀治が言う

「あきらめんな!どんどん撃ち続ける!」

が、ゾンビ共はそれでも止めずに俺達に近づく、

「くそ!ここまで(ドドドド)援軍が来たようだ」

撃ちながら後ろを振り向くと、アリス少佐が立っていた。手元にはブローニングBAR機関銃を持って・・・

「秀治さ〜ん!手伝いに来ましたよ〜!」

さらに後ろにはMINIMIを持った綾瀬さんがやってきた

「綾瀬さん!援護をお願いします!」

秀治が言った

「まっかせて〜!」

そうやって彼女は俺達の所に来てMINIMIをゾンビ共に食らわして行く

「よくも、やってくれたわね〜くらえ〜!」

ゾンビ共は軽機関銃の餌食となり次々と倒れていった。そして、ゾンビ共がいなくなると

「ふう、か・い・か・ん？」

この現場なのに、妙に合っていた。まるで〇〇〇〇と機関銃のようだ。それにしても彼女はいつもあの音程だからな〜癒し要素でも入ってるのか？

「ムッフ〜」

秀治が言いながら笑顔になる

「お前はどっかの親父か？」

俺が言った

「んな!？心外だぞ!修」

「はいはい、オワタオワタ」

「おい!」

「ふっ相変わらず元気だな。さあ、次が来ないうちに移動してしま

おじ

そう言って俺達は避難民の部屋にまで移動する事になった

史上最大の防衛線？

俺達は防衛線にて多数のゾンビ共を殺してきたが、如何せん数の暴力という言葉があるように、全部を塞ぐ事は出来ていない。

そして、俺達は避難民がいる部屋の直前にまで来ていた。部屋の手前には俺達が持ってきたM2キヤリバーが設置されており、その周りを俺達が固める形になっている

「撃て！撃ちまくるんだ！敵は待つちゃいけないぞ！」

アリス少佐が大きな声で言う

ドドドドという重機関銃独自の音を出しながら弾を発射していく、弾はゾンビ共に当たり真っ二つに切れていた

「チツ　修、12ゲージはもう無いか！？」

秀治が言う

「ねえよ！とつくのとうに切れちまったよ！おら、MP5を使え！」

そう言って近くに置いてあったMP5を投げ渡す

「サンキュー！マガジン装填！」

そう言って奴らに向けて連射していく、サブマシンガンは威力は弱い物の圧倒的な連射力にて補っている

「くそ！こつちも弾切れか！」

そう言つてM16をしまい、シカゴタイプライターを取り出す、こいつはニューヨークのマフィアが良く使用している物だ。弾の少なさをドラムマガジンによつて補っている

「おらおら！！消えちまいな！！」

そう言つてぶつ放す、こつちもサブマシンガンの類なので連射力は圧倒的だ

が、ゾンビ共は逆に増えて来ている

「隊長！このままではギリ貧です！」

篠田さんが言う

「分かつてるよ！クソ、何か良い手はないか！？」

小ノ牧少佐が言う

確かに、このままではいずれ、餌食になつてしまふ。しかし、避難民共がいるので後ろに退く事が出来ない。どうするべきか

そう思つて後ろに下がった時、足に何かが当たる

「ん？こいつは……」

そこにあつたのは梱包爆薬だった。梱包爆薬は鉄橋などを崩すほどの威力を持った爆薬である。

「よし、行ける！アリス少佐！」

「なんだ！」

「自分の合図と同時に全員を部屋に押し込んで下さい！爆薬を投げます！」

意図を察したのか、アリス少佐は他の部下と一緒に下がっている。小ノ牧さんや秀治も合わせたようだ

「まだまだ・・・・・・・・今だ！行け！」

そう言うと全員が部屋の中に入る。俺はそれを横目で確認すると梱包爆薬に火をつけて近くにあった階段めがけて投げる

「おら！食いたいならこいつを食い！」

そう言って投げ飛ばす、梱包爆薬に防犯でお馴染みのアラームも一緒に取り付けてある。落ちた衝撃でピンが外れるように設計してある

そして、向こうに落ちた瞬間にアラームが勢いよく鳴っている。ゾンビ共はそれに釣られて階段の方に向かって前進していく

俺は即座に部屋に入った。それと同時に長机などで扉にバリケードを作る

「皆！念のため伏せろ！」

そう言った瞬間、全員が伏せた。次の瞬間・・・・・・・・

大きな揺れと共に崩れる音がした。きつと、階段が爆発の影響で崩れたのだろう

「くくさすがに効くな」

俺は耳を押さえながら言った。まだ、耳鳴りがするからである

「全く、無茶をしてくれるな。修君」

小ノ牧さんが言う

「だが、ある程度片づいたのも事実だ。」

アリス少佐が言う

「さて、これからどうするかね。外はゾンビ共でいっぱい、おまけにそこからの脱出は不可能に近い。」

俺が言った

「まっ気楽に行こうぜ。焦ってもしょうがないし」

秀治が言う

「そうだな……」

そう言って暫く休憩にした

皆、精神的に來ているようだ。特に避難民はほとんどがここに留ま
つて救助を待った方が良いとかほざいてやがる。無理だよ、そんな
楽観的な考えじゃあ

外はゾンビでいっぱい、おまけにEMP攻撃のせいで電子機器がや
られちまっているんだ。当然ながら携帯やパソコン、無線での通信
機能は奪われたに近い

今もアリス少佐や小ノ牧さんが説得しているが、一向に考えを傾け
ようとはしなかった

「だから、さつきから言ってるだろう！私達は動きたくないんだ！
救助が来るまで絶対に行かんぞ！」

サラリーマンの男が言う

「そうよ！待っていれば、自衛隊か米軍が来てくれるはずよ！それ
までは絶対に動かないわ！」

主婦が言う

（このままじゃあ、いずれ、こいつらと一緒に運命を辿っちまうな。
しかし、窓から出ようにも何か、良い方法は無い物か……）

そう思って周りを見渡す、部屋の中はガラクタなどが置かれていた
ので倉庫として使っていた物だろう

「ん？こいつは……業務用のロープか……長さに
は3m半つてとこだな……」

俺は独り言のように言った

「修さん？何をしてるんですか？」

美麻さんが可愛らしく聞いてくる

「いや、早々にここを出ようと思ってな。表の門だっていつまで持つか分からんし、だったら、あの窓から出た方が良さそうな気がしてな」

そう言つて窓を指さす、窓の外側には駐車場に面しているのでそこから降りられればすぐさま車を動かす事が出来る

避難民の方を見たが未だに動く気配はないようだ

俺は窓際に立ち窓を開けた

「修？」

秀治が答える

「よし、皆聞け、俺はこっから脱出しようと考えている。ここからロープを垂らして下に降り、車を使って警察署が出る。一緒に来るってやつは一緒に来い。残りたい奴はここに残ってる。武器も一応渡しておくが、ここに残るのは賢明じゃない。少なくとも俺はそう思ってるぞ。」

皆は黙つて俺の話の話を聞いている

「それじゃあ、決断した奴はロープを降りて来てくれ。それじゃあ

な。武器はその長机に置いてあるから好きなのを使ってくれ」

そう言っつて俺は誰の返事も聞かずにロープを降りて行く

（side 秀治）

「それじゃあな」

そう言っつて修はロープを降りて行く

避難民は全員、秀治の事を批判しているようだ

「秀治さん、どうするんですか？」

綾瀬さんが言っつた

「もちろん、俺は修の方に行きますよ。状況から見てもここの方が絶望的ですし、助けに来るかどうかわからない物より修に付いて行った方が確率は高くなります。綾瀬さんや美麻さんはどうするの？」

「私も修さんの意見に賛成ですね。軍隊も動かないんじゃないか？自分で生きていくしかない。そう教えてくれたのは修さんですし、何より……その……」

そう言っつて赤くなる美麻さん

「ああああ、青春ね！因みに私も修君の考えに賛成かな？食料も少ないし、それだったら、近くにあるモールとかに避難すれば良いんじゃない？あそこなら確率は高くなると思っつし」

綾瀬さんが言う

「小ノ牧さんらはどうなんです？」

「私も綾瀬と同じ意見だ。異論はない」

「同じく」

小ノ牧さんや篠田さんも賛成のようだ

「勲さんらは？」

「ここを去るのは名残惜しいが、脱出した方が賢明だな」

「そうね。生き残るためならそつちを選択するわ」

「儂も老後の隠居生活を楽しみたいしの」

三人も賛成のようだ

「じゃあ、決まりだな」

そう言っつて俺達は行動する。避難民はそれに啞然としているようだ

〈side 秀治 out〉

「さて、どれぐらい来るのかね」

俺はハンヴィーを整備しながら言う。実際、残るのも残らないのも自由だし、それを強制する義務は俺には無い。俺は生き延びようと

しているだけだしな。親父にもお袋にも無事なのを報告したいし

「修」

「おつ秀治か。やっぱり……」

そこで止まった

秀治の他には美麻さん、小ノ牧さん勲さんが付いて来ており、何より、アリス少佐が付いて来ていたのだ

「アリス少佐も来てくれたんですね」

俺が言った

「ああ、すでに任務自体も変わってるしな。だったら、違反には無らんだろう？それに個人の自由を強制するほど、権限は持っていないしな」

そう言って笑う

避難民達は全員が警察署に残るようだ。武器も渡してあるから大丈夫だろう。多分

何故かって？簡単だ、集団を維持できない者から破滅するんだ。これはどんな事でも言えると思う。

「さあ、もう一仕事行きますか！」

そう言って脱出の準備を進めるのであった

大脱走（前書き）

むかし、こんな映画あったよね？

大脱走

俺らは警察署から脱出するべく今まで使って来ていた。車両を点検、整備を即座に行った。表側の門には今だ、ゾンビ達が山のように動いていた

「修、こっちの整備は大体終わったぞ。いつでも出発できる」

秀治が言った

「OK、こっちももう、終わるから好きにしていどうぞ」

俺はハンヴィーを整備しながら言う

他の車両も各自、点検・整備は終了したようだ。

「よし、こっちも終わりつと」

そう言ってボンネットを閉じる

「さて、ここからが本題だ。まずはこれを見てくれ」

そう言ってアリス少佐が設計図みたいな紙をボンネットに広げる

「アリス少佐、これは？」

小ノ牧さんが言う

「これは、この警察署のみ取り図のようだ。脱出する途中で見つけ

た。現在、我々はここにいる。表にはゾンビ共がゴキブリのようにいる」

そう言っただけで赤いペンで見取り図をなぞって行く

「出られるとしたら、裏門に限定されますね」

美麻さんが地図を見ながら言う

「その通りだ。これ以外はすべて塀で囲まれているため、出る事は不可能だ。」

「だとすると、裏門に限る訳だな。しかし、この警察署は少しばかり特殊だな。俺達の位置から直接裏門に行く事は出来ない」

勲さんが言う

「どっぴいことですか？」

俺が言った

「建物自体が塞ぐように建っているからだ。もちろん、通る事も可能だが、それは人が通る場合のみだ。ハンヴィーやトラックでは通る事は出来ん」

「じゃあ、どうすれば……」

秀治が不安そうに言う

「大丈夫だ。裏門に行くには警察署の地下駐車場を使えば良い。そ

「ここらなら直接裏門に行ける」

勲さんが説明する

「よし、地下駐車場を通って脱出だ。他に意見はあるか？」

アリス少佐が言う

皆は黙って頷く

「よし、すぐに……（ガシャ　ン！）！！」

門の方を見るとバリケードが耐えきれなかったのか、崩されていた。隙間からゾンビ共が堂々と入ってくる

「くそ！どれでもいい！すぐに乗車しろ！さつさと出るんだ！先頭は俺が行く、勲さんナビゲートお願いします！」

俺が言った

「分かった！」

皆は適当に乗り込んで行く、俺も自分のハンヴィーに乗り込んだ。俺の他には勲さん、美麻さん、アリス少佐の四人だ

「もたもたしてる暇はない！行くぞ！」

そう言ってすぐに発進させる。後から他の車両も付いて行く

（地下駐車場）

俺らはゾンビ共の追跡を振り切って地下駐車場に來た。中は真っ暗だったのでライトと軍用のペン型ライトを使用して前進しているが暗さゆえにゆっくり進まなければならなかった

「くっそ、こんなに暗いと前が見えなくて困るぜ」

俺が言った

「すべてはEMP攻撃のせいだな。まさか、屋内の車両までやられているとは……」

勲さんが言う

駐車場にはいくつかのパトカーが残っていたが、EMP攻撃のせいで動かなくなってしまうている。ライトが壊れていたり、エンジンから煙を吹いたりしているからだ

「しかし、静かだな……不気味すぎる」

アリス少佐が言う

「や、やめて下さいよ、怖いじゃないですか」

美麻さんが泣きそうな声で言う

その時だった

『アアアア~~~~』

「……………おいおい、こんな所にまでいやがるのか……………勘弁してくれよ。勲さん、少佐、戦闘準備をお願いします」

「了解」

そう言つて二人は銃を取り出す、勲さんは問題ないが、少佐は軽機関銃なので、M3A1のグリースガンを渡してある

少佐は懐かしいと言つていた

「敵はどっから来るか分からん、注意しろ」

俺が言つた

次の瞬間、

『アアアア~~~~』

一匹のゾンビが俺らの車に張り付く、ビククリするな

「ヒッ!?!」

美麻さんが怯える

「大丈夫だ。砲撃でも食らわれない限り、破られる事は無い。安心しろ」

俺が言つた。

しかし、張り付いたゾンビ以外にものろのろと集まって来ている。

「くそ、強行突破しかないか？」

勲さんが言う

「ですね……後ろも付いて来てくれるだろう。1、2、3！」

そう言ってアクセルを思いっきり踏む、それと同時に前にいたゾンビはボンネットに乗り上げた。目の前で気持ち悪い動きをしている

「うへっ気持ち悪い」

俺が言う

「修君、そこを右だ」

勲さんがナビゲートする

「了解です」

そう言っつて右に曲がる

ギュギュギュというタイヤが擦れる音が鳴り響く、ボンネットに乗っていたゾンビは耐えきれなくなって落ちて行った。その後も勲さんのナビゲートのおかげで出口付近まで来ていた。

「あちゃ〜、こんな事になってるとはな〜」

俺が言った

目の前には裏門に続く出口があった。しかし、その手前には事故を起こしたであろう警察輸送車両が停まっていた

「どうする？前は事故車、後ろはゾンビ軍、絶体絶命だなあ……」

アリス少佐が言う

「待って下さい……確か……あつた」

俺は運転席から後ろの所、トランク付近に置いてあつた武器をまさぐってニヤリと笑う。なんでかかって？そりゃあ、”いいもん”が見つかったからな

「修さん？何してるんですか？」

美麻さんが言う

「もちろん、突破用の武器さ」

そう言つて取り出したのはRPG-7、ソ連が作りだした対戦車口ケット砲だ。今では紛争でもよく見かけるお馴染みの武器だ

「修君、そんな物まで有つたのか……」

少佐が言う

「ええ、格安の武器ですからね”裏”でならよく運んでいましたし」

そう言つて上部のハッチを開ける

「少佐、運転お願いします」

「了解した」

「アツラーに栄光あれ！」

そう言っつて引き金を引く、勢いよく飛び出たロケット弾はまっすぐ飛んで行き、輸送車両にぶつかって爆発を起こす

「命中！ヒヤッハー！」

俺はガッツポーズした。

「修！後ろから奴らが来てんぞ！」

angelに乗った秀治が言う

「OK！少佐！出して下さい！」

「了解！」

少佐はアクセルを踏んだ

「よし、これで、脱出するだけだな」

そう言っつて蓋を閉めようとしてぶっ飛ばした輸送車両が視界に入る

「！おいおい、マジかよ！？少佐！今すぐここを出ないとまずいです！スピードを思いっきり出して下さい！」

「な、何！？わ、分かった！！」

そう言っつてハンヴィーのスピードが上がる。後ろの車両もスピードを上げる

「修君、何があつたのだ？」

勲さんが言っつ

「さつき、車両をぶつ飛ばしたでしょう。あれ、燃料が漏れてたみたいで、今にも爆発が起きそうなんです」

そう言つた瞬間、俺達がいた場所から爆発が起きる。さつきの輸送車両が爆発したんだらう。そして、爆発の衝撃で他の停まっていた車両にも爆発が連鎖する

「ヤバい！少佐！もっとスピード上げて！」

「了解だ！！」

更にスピードが上がる

「もうすぐ出口だ！」

勲さんが言つた

そして、すべての車両が地下駐車場から出た瞬間、火が噴き出した。

「ふう〜何とかなつたな〜」

俺が言う

「そうは言ってもらえないかもな。ゾンビ共が集まって来ている。」

そう言っって周りを見る

確かに今の爆発音でゾンビ達が集まって来ている

「そうですね。さっさと出ましよう。」

そう言っって俺らは裏門から出て行く、こうして、無事に警察署から脱出できたのだった

「」

静かってたまには良いね。そして、新たな生存者（前書き）

久々に帰ってきました！

静かってたまには良いね。そして、新たな生存者

俺らは警察署を脱出した後、港に向け進路を取っていたが、途中、食糧が少ない事に気付いたため、美麻さんの情報で近くにあるショッピングモールを目指していた。

く大通りく

俺達を乗せた車両は現在、大通りを通っていた。ここにも廃車やら事故車がたくさんあったが、生存者は見つかっていない。

「いやく、やっぱり、渋滞が無いってのは良いねく」

俺はハンヴィーを操作しながら言った

「そうだな。順調に進むってのは同意だな」

少佐が言う

「二人とも、少しは他の人の事を心配してはどうですか？」

美麻さんが言う

「しゅもつとも」

俺言う

「さて、これからどうするのだ？修君」

勲さんが言う

「そうですね、やっぱり、食糧が少なくなってきたので、美麻さんの情報を元に近くにあるショッピングモールに向かう事にします」

「向かうとして、食糧はあるのか？」

少佐が言う

「まあ、あまり、期待はできないでしょうね。食糧は粗方、無くなっているでしょうし、それにEMP攻撃のせいで電子機器が停まっている今、店にある冷凍食品はダメになってる可能性が高いですし・・・」

「そうだな・・・まあ、行ってみるだけ価値はあるか・・・」

少佐がため息を吐きながら言う

車両は順調に進んでおり、途中、ゾンビ共に遭遇したが、多くはなかったので避けて行った。EMP攻撃のせいで無線もやられてしまったため、世界がどうなっているのか分からない状態だ。他の国がどうなっているのか、見当もつかない

「それにしても、静かな事は良い事だな」

俺が言う

「修さん、どうしてなの？」

美麻さんが言う

「なんと言つか、今までの暮らしじゃあ騒音とかがいっぱいあったけど、EMPのおかげで本来の状態に戻ったと言つかそんな感じだな」

「ふーん、修さんってやつぱり、静かな所が好きなの？」

「そうだな。と言つか昔、ばあちゃんの家に行った事があるんだけどあそこは本当に田舎だね。自然な状態がそのまま続いているような場所なんだ。それ以来、静かなところが好きになっちゃってね」

「へー行ってみたいな」

「いつかは行けるさ……いつかはな……」

そう言いつつ車を走らせていく

く?????side

僕たちはショッピングモールから脱出しようとそれぞれの武器を持って試みていた。新たな仲間、警官のあさみさんと一般人の島田さんを連れて出たのだが、途中、奴らを入れた中学生らしき少年がワゴンの上で立ち往生していた。

それを見たあさみさんは助けに行こうとした。そして、島田さんも助けに行つたのだが、島田さんは奴らの餌食になってしまい、あさみさんも今まさに奴らの餌食となろうとしていた

「小室！早く助けないと！」

平野が言う

「無理だ……あの数じゃあ、こっちまでやられてしまう……」

「……そんな……」

銃を握り締めて悔しそうに地面を叩く平野

「くそ……」

僕も助けてあげられない事に悔しがっていた

「コータさーん!!!!」

奴らに囲まれているあさみさんが大声で叫ぶ

「私を……私を撃つて下さい!!!!お願いします!!!!」

あさみさんが言う

「そんな……そんな事……できるわけ無いじゃないか……」

平野が言う

「コータ、あの婦警の願いが聞けないの？彼女は信頼できるからこそ、あんたに言ったんじゃないの？」

沙耶が言う

「・・・・・・・・・・分かりました・・・・・・・・」

そう言って平野は銃の三脚を立てて射撃体勢に入った

「さようなら・・・・・・・・あさみさん・・・・・・・・」

平野はそう言って引き金に指を掛ける

その時だった

「ヒヤッフウウウウ!!!狩りの時間だ!!!!!!」

大声と共に複数の車両が駐車場に入ってきた

〈小室 side out〉

「よし、後ちよいだな」

俺が言った

現在、俺達はショッピングモールが見える所までやって来ていた。
ここら辺もゾンビ共がウジャウジャといた

「やはり、生存者はいないのか？」

少佐が言う

「ですかね・・・・・・・・でも、モールなら少しは居るんじゃないですか？」

美麻さんが言う

「まあ、行って見て確かめよう。」

勲さんが言う

「ですね……………そうしましょう」

そう言っつてモールの駐車場に入っつて行く

（駐車場内）

「やっぱり、生存者はいない……………か」

俺は周りを見渡しながら言う

近くにゾンビ共は居なかつたので車両を止めて、angelの上から望遠鏡を使っつてモール付近や駐車場を見ていく

「ん？修、ありゃあなんだ？」

一緒に監視をしていた秀治が言う

「どんなのだ？」

「なんか、一か所にゾンビ共が集まっつてるんだけど、ほら、あそこにあるワゴン車付近」

「ん？？本当だ。生存者かな？」

俺が言った

「多分ね、ここから出ようとして逆に嵌められた感じになってるのかな？」

秀治が言う

「だな……よし、琥珀」

「何でしょう？修様」

外で待機していた琥珀が来る

「angelを動かしてくれ。そっちには秀治を乗らせる。少佐、運転願えますか？俺が銃座に付くんで」

「了解した」

「修さん、私達はどうすれば？」

「美麻さん達はここで待機していてくれ。完了したら信号弾を撃つから、小ノ牧さんらも付いて来てくれますか？周辺の掃討が必要なんで」

「了解した。行くぞ、篠田、綾瀬」

「了解」

そう言つて三人はangelに乗り込む、俺はハンヴィーの銃座に

乗り込み、ガトリングガンの弾を装填していく

「じゃあ、少佐、お願いします」

そう言ってハンヴィーとa n g e e I が動き出す

「ヒヤッフウウウウ!!! 狩りの時間だ!!!」

そう言って引き金を引く、ガトリングガンはゆっくりと回転し始めてやがて、無数の弾の嵐をゾンビ共に襲う

ワゴン車の前あたりに溜まっていたゾンビ共は木端微塵に散って行った。残りもいたのだが、それは轢いて行った

そして、ワゴン車付近に来た所で車を止めて、俺は真っ先に降りた。それと同時に物干し竿を抜いて近くにいたゾンビを真っ二つにした。

「そろそろそろ!!!! もっと食らいたいか!? 掛かってこいや!!!」

そう言ってゾンビ共を切って行く

a n g e e I から小ノ牧さんらが降りて援護射撃を行う。琥珀はそのままa n g e e I を動かし、集まって来そうなゾンビ共に25mm機関砲をぶっ放していた

数分後.....

「はっはっはっは!!!! 私は帰ってきたー!!!!!!」

某メタルなゲームのボスの人が言っていた言葉を言いながら物干し竿を収める

「……………」

ワゴン車付近にいたのは婦警さんだった。しかも茫然としていた

「あらら……大丈夫ですか？婦警さん」

秀治が言った

「ハッ！？あ、危ない所を助けて頂き、ありがとうございます！」

慌てて言う婦警さん

「おーい、あさみさーん！！！」

遠くから声が聞こえた。そっちに振り向くと高校生らしき集団と少女と犬がいた

「あ、コータさん！」

婦警さんが駆けて行く

「良かった……本当に良かったよ」

ミリタリー的な服装をした少年が言った

「良かったな。青年」

俺が言った

「ありがとうございます。僕、小室孝って言います。藤美学園の生徒です」

リーダー的な少年が言った

「ああ、たすけられて良かったぜ。俺は古知屋修って言うんだ。日本技術大学の生徒だ」

俺が言った

「古知屋!？」

高校生側の少女が叫んだ

「知っているの?高城さん」

金髪の爆乳お姉さんが言った

「ええ、古知屋家と言えば、世界でも代表する貿易会社よ。パパもよく利用してた」

「と言う事は君は、右翼団体の高城荘一郎氏の御令嬢かな？」

俺が言った

「ええ、高城沙耶よ」

「ここで、会えたのも何かの縁だな。壮一郎氏はどうしたんだ？」

「パパは・・・その・・・」

何か言いづらそうに顔を伏せる

「沙耶の両親は家に残りました。俺達が先に出たので後の事は分かりません」

答えたのは小室だった

「なるほどな・・・」

俺はそう言っただけ空を見る

「そういえば、どうしてここに来たんですか？」

M1A1に銃剣を付けた少女が言った

「ああ、俺らは警察署を出た後、ここに「警察署ですって!?!」のおう!?!?」

M1A1を持った少女が言った

「警察署から来たんですか!?!」

「ああ、そうだが?」

「そこに、私のお父さんを見かけませんでしたか!?!」

「ええっと、名前は?」

「あつすみません。私は宮本麗と言います。父の名前は宮本正と言います」

「うーん、そんな人いたかな？秀治、お前はみたか？」

俺が言った

「いんや、俺も見かけてないね。それだったら、勲さんとかに聞けば良いんじゃない？その方が話が早いと思うよ？」

秀治が言った

「それもそうだな。よっと」

そう言って俺は上空に向かって信号弾を発射する

「これで、よしっと小室君、ちょっと待っていてくれよ」

「分かりました」

そう言ってその場で待機する事になった

こうして、新たな生存者に遭遇する事が出来た俺達であった

床主アウトレット

俺らはアウトレットにて新たな生存者と遭遇する。それは藤美学園から逃げ出してきた高校生のグループだった。彼らはこのアウトレットから脱出して警察署に向かおうとしていた所、予想外の自体が起きてあそこにいたみたいだ

（駐車場）

まだ、勲さん達が来ていないので俺はリーダーである小室君に話を聞いてみる事にした

「小室君、ここを出てどこに向かうつもりだったんだい？」

俺が聞いた

「はい、警察署に向かおうかと思ってました。そこで、情報を集められたらいいかなって」

小室君が言った

「なるほどな。けど、もう無理だよ」

「えっ？」

「俺らはそこから出て来たんだ。警察署は化物でいっぱい、正直、生き残れる確率は0だ」

「そうですか……けど、僕たちは自分の親の安否をどうしても

確認しておきたいんです。」

「生き残ってればいいが逆にダメだったら？」

俺が聞いた

「その時は……自分達の手で……」

小室君の目は決意を表していた

「そうか……無事だと良いな」

「ええ」

そんな時、丁度勲さん達の車両が到着した

「修君、どうやら、成功したようだね」

勲さんが言った

「ええ、それと紹介しておきます。彼らは藤美学園の生徒たちです。勲さん、あなたに質問がある子がいますよ」

そう言っつて宮本さんを前に出す

「ほう？」

「は、初めまして、宮本麗と言います」

彼女が自己紹介する

「宮本？……もしかして、正の娘さんかい？」

勲さんが言う

「知っているんですか!？」

「ああ、と言うよりも相棒だったからな。」

「それで、父は!?!父はどこにいますか!?!」

宮本が詰め寄る

「すまない、私はすでにあいつとは分かれたんだ。警察署を出た事は確かだ。私は床主大橋の方に正は小学校の方に向かった。だが、生きているかは私も分からない」

「そう……ですか……」

宮本はそう言っ表情を暗くする

「だが、あいつはそう簡単には死なんからな。まだ、しぶとく生きてるんじゃないか？娘なら信頼するのも役割だぞ？」

勲さんはそう言っ笑う

「……はい!」

宮本はそう言っ顔を上げる

「さて、君たちはこれからどうするんだい？」

俺が聞いた

「そうですね。もしよろしければ、途中まで良いですか？僕たちは小学校の方に行こうかと思ってます」

小室君が言った

「そうだな・・・少しばかり付き合ってもらえるかい？俺達がこのに来た理由は食糧の確保なんだ」

俺が言った

「でも、中にも奴らがいますよ？」

ミリオタな青年が言った

「そうなのか？」

秀治が言った

「はい、僕達がここを出る羽目になったのも奴らがアウトレットの中にまで侵入してきたからなんです」

「そうか・・・小ノ牧少佐、アリス少佐、何か良い手はありますか？」

そう言って少佐達の方を見る。小ノ牧さんは銃の整備をアリス少佐は葉巻を吸っていた

「そうだな・・・これだけの大きな建物だ。この人数でやるとなると、一番はヘリボーンで屋上から侵入する事が良いのだが・・・」

小ノ牧さんが言う

「しかし、Mr小ノ牧、非戦闘員にも戦わせるわけにはいかないでしょう？それに、この車両部隊の監視も必要よ」

アリス少佐が言った

「確かにな・・・だが、少人数でやるとしても早急なチームでは連携が難しいと思うが・・・できるとしても特殊部隊位だ」

「だったら、一つ提案があります。もし、無理そうな場合は反対して下さい」

俺が言った。二人は黙って頷く

「あのゾンビ共は音に反応します。この無音の世界じゃあ俺達はあつという間に標的になってしまいます。だったら、こっちに引き寄せいて始末すれば良い」

「どつという事なのだ？」

黒髪の刀を持った美少女が言った

「君達もここまで生き残れたのなら分かるだろう？あのゾンビ共は音に敏感になって逆になっている。他の機能は使用不可になっている。」

そして、俺らが持っている武器は派手に音を出す物ばかりだ」

俺が説明する

「ハッ！もしかして、陽動？」

ミリタリー少年が言った

「察しが早いな。用はこちらに引き寄せれば良い。そこで、アリ地獄のようにゾンビ共を嵌めて行くんだ。もちろん、陽動にはこいつを使うがな」

そう言って *annger1* を叩く

「小室君」

「は、はい」

「あそこのアウトレットは入り口がどういつ風に繋がっている？」

「えっと、直線的な物だった感じがします。他の通路は全部シャッターが降りてましたし……」

「なるほど、美麻さん、俺のハンヴィーにもう一台のノートパソコンが無かったかい？」

「ちょっと待って下さい。今、調べます」

そう言って美麻さんはハンヴィーに入り込む、そして、ノートパソコンを取り出す

「これですか？」

「ああ、それはEMP攻撃を喰らって無いはずだから、動くと思うよ？すぐさま、このアウトレットの地図を出してもらえるかい？それと可能なら中の様子が見たいがね」

「今、起動するんで待ってて下さい。後、できる限りはしますけど、中の方は難しいと思いますよ？」

そう言ってカタカタと打ち込んで行く

数分後……

「……よし！修さん、監視衛星からリアルタイムで映るようにはなりました。けど、中は見れませんでしたね。カメラの方がやられてます」

そう言って画面を見せる

「そうか……仕方ないな……琥珀、angelを使って偵察をしろ。必要であれば攻撃していい秀治、お前もangelに入って中の様子をできる限り映して来てくれ、」

そう言ってカメラを渡す

「分かった（分かりました）」

そう言って二人はangelに搭乗する。そして、そのまま、発進していく

「気を付けてね」

綾瀬さんが手を振りながら見送る

「さて、今の内に銃を取り出ししておくか。」

そう言っつてハンヴェーイからモシンナガンとミシガンを取り出す

「おっほー！！ソウドオフショットガンとモシンナガン！！」

ミリタリー青年こと平野君が目を輝かせながら言った

「ああ、俺の相棒だ」

そう言っつて弾を装填していく

それと同時にアウトレットの方からガラスが割れる音と機関砲の音が聞こえた。

「お〜お〜ぶっ放してるな」

勲さんが言っつ

「そっね・・・」

メアリーが言っつ

「じゃあ、ここに残る班と突入班を決めるか。まずは・・・ここに残る班から美麻さん、亀爺、メアリー、後、そっちのグループ

から鞠川さん、ありすちゃん、わんこ、高城さん、あさみさんって所だな。残りは突入班って所かな？」

「そうですね。戦略的に考えてもそれが妥当でしょうね」

平野君が言った

「だとしても残りの方が心配じゃないか？銃を扱えそうなのはメアリ―君とあさみ君位だし」

小ノ牧さんが言う

「うーん、そうですねーじゃあ、補助として綾瀬さんと琥珀を残していきますか。これ以上減らしたら突入の方が難しくなると思いますよ？」

俺が言った

「そうだな。それで行こう」

そうこうしている内にangelが戻ってきた

「ふう〜ただいま、戻りました」

琥珀が上部のハッチを開けて言った

「ご苦労さん、中の様子はどうだった？」

俺が言った

「はい、情報の通りゾンビ共がウジャウジャと居ましたよ。撃てるところは撃ってきましたが、2階にも進行しているようで」

琥珀が説明する

「そうか。分かった。休んでていいぞ」

「分かりました」

そう言っつて琥珀は angle の方に戻って行く、それと同時に秀治がやってくる

「修、ビデオだぞ」

そう言っつてカメラを渡してくる

「サンキューどれどれ・・・」

そう言っつて中身を見る

中の映像はゾンビ共が我が物顔で歩いていた。正直、イラッと来たのは俺だけだろうか？

「うへっいっぱいいるな、正直、勝てる自信が無いな」

小ノ牧さんが言う

「これだけの量なら爆薬を使った方が早くないか？」

アリス少佐が言う

「確かに・・・よし、手榴弾とクレイモア、それに小型爆弾を持って行こう。準備だ」

そう言っただけ俺達は準備にかかる

床主アウトレット〜制圧編〜

前回のあらすじ：他の生存者と合流そして、制圧へ……

〜駐車場〜

「よし、まずは、二班の別れよう」

俺が言った

「とというと？」

秀治が言う

「あんなでつかいアウトレットなんだ、一緒に行動してるより効率的に撃破していった方がいい、幸い、二階までしかないからな、その分時間は捗れると思うぜ？」

「なるほど、それぞれのエリアで制圧していくのだな？考えた物だ」

小ノ牧さんが言う

「じゃあ、俺と秀治とアリス少佐、勲さん、メアリーだな。二階は小室君、平野君、毒島さん、宮本さんに小ノ牧さんと篠田さんを加えよう」

「そうだな。その方がいい」

アリス少佐が言う

「でも、そっちの方が人数が少なくないですか？」

宮本さんが言った

「大丈夫だ。少ない分、こいつを連れていくからな」

そう言って a n g e l を叩く

「なるほど、それが補助代わりになるつて事ですね」

平野君が言う

「そういうこと、それと見る限りそっちはM1A1とイサカM37とAR-10ぐらいしか銃は持っていないのか？」

俺が言った

「はい、毒島先輩は刀を使いますし、麗も銃より銃剣を使って攻撃してます」

「なるほど、なら、平野君」

「はい？」

「ちょっとこっちに来てもらえるかな？見せたい物があるんだ」

そう言って a n g e l の近くに寄らす

「何があるんですか？」

平野君が言った

「なあに、軍オタなら昇天しそうな光景さ」

そう言っつて後方ハッチを開ける

「うっひょー！ー！！！！！！」

予想通り平野君は舞い踊った

「これは、M870ショットガン！ー！！こっちにあるのは、M4！！
すごいすごい！！」

「気にいったかな？」

俺が言った

「はい！」

平野君は目を輝かせながら言う

「そこで、だ。小室君達が扱えそうな武器を持って行ってくれ」

「えっ、でも、それだと修さんが不利になるのでは？」

「大丈夫だ。それぞれの武器はあるし、それにずっと放置じゃあこ
いつらが浮かばれないからな。使ってくれた方が本望だ」

そう言っつて笑う

「分かりました。じゃあ、これとこれと……」

そう言っつて平野君は小室君達が扱えそうな武器を選定していく

↳平野君が持つて行つた武器↳

M16アサルトライフル

M92F×4

M870ショットガン

M700スナイパーライフル

MINIMI軽機関銃

と持つて行つた。その他にもグレネードとクレイモアを持つて行つた

「そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題無い」

そう言っつて平野君は戻つて行く

「さてと、近距離は変えておくか」

そう言っつて取り出したのはデザートイーグルだ。この銃はハンドガンの中では大型の部類に入る物で、正しく持たなければ手首がイカしてしまう代物である。尚、修にはそんな物は問題ではない。それ

を二丁装備する

また、銃自体も改造されているので総弾数は通常の1・5倍は収まる

「は、また、えらいモン出したな」

秀治が言う

「そうか？こいつなら、二体か三体はぶち抜けるぜ？」

「まっ修なら問題ないと思うけどな」

「おいおい、人外呼ばわりしてくれるね、俺は人間をやめるつもりはないぜ」

「ははっそうか」

そう言っつて秀治は弾を装填して行く、俺は運転席に周って上部ハッチを開ける

「じゃあ、小室君、無事を祈ってるよ」

「ええ、そちらも気を付けて下さい」

「ああ、制圧が完了したら一旦、ここに戻るっ」

「分かりました。」

そう言っつて小室君のグループは二階へ続く外部階段に向かっていく

「さて、こちらも向かうとしようか？修君」

アリス少佐が言う

「ええ、それじゃあ、乗って下さい」

そう言うのと俺らのグループが乗る

「行くぜ！狩りの時間だ！」

そう言うってアクセルを踏む　a n g e l はエンジンを上げながら進んで行く、途中、ゾンビ共が音に気付いてこちらに向かってくるが、その度に撥ねられたり踏みつぶされたりしていった

「さあ、突っ込むぞ！皆、捕まれ！」

それと同時に正面の入口を突き破るガラスが壊されて行き、その先にあつたバリケードも一緒に破壊してしまう

くアウトレットロビーく

突き破つた先にはロビーがあつた。案の定ゾンビ共が徘徊している

「うへっ気持ち悪、さっそく掃除開始と行きますか」

そう言うって25mm機関砲をぶつ放す、ん？弾は大丈夫なのかつて？大丈夫大丈夫、この前、アウトレットに行く途中で何故か落ちてたからな。世の中不思議な事もあるもんだ

だから、弾は補給で来てるからな。でも、正直言つとガトリングガ

ンの弾とかも欲しかったりするんだよね。少ないから

「よし、皆、出て応戦しろ！」

そう言つて後方ハッチを開ける。それと同時に秀治達が降りて攻撃を開始する

「ヒヤッフウウウ!!!ゲームの時間だ!!!」

秀治が言つてM A C 10をぶつ放す、それが二丁もある。本人に聞くところ「なんかかつこよくない？」との事だそうだ

「海兵隊の力をなめるな！」

そう言つてB A R 軽機関銃をぶつ放していく、この銃は本来、弾数が少ないのであらゆる機関で使われる事が無かった。が、少佐は改造してボックスマガジンに変換しており、これにより弾数は数倍にまで膨れ上がったのだとまた、銃自体も改造を施してあるので戦場では頼りになる”暴れ馬”とのことだそうだ

「刑事^{テカ}の底時^{テカ}からを見せてくれる！」

そう言つて勲さんはG 3 6アサルトライフルである。この銃はドイツのヘッケラー&コック社が作りだした銃で命中精度が高い、また、2・5倍の光学スコープとダットサイトが標準装備されている

「米国警官だつて負けてないわよ！」

そういつてメアリーはF N P 90を使っている。この銃はファブリックナショナル社が作った銃で左右対称に作られている。つまり、

左利きでも楽に使用する事が出来る

「さて、俺も負けては居られないね!」

そう言つて上部ハッチを開けてそこから、モシナガンを使って遠方にあるゾンビに照準を合わせる

「goodknighth」

そう言つて一発撃つ、弾は直線状に突き進んで行き、狙っていたゾンビの頭に直撃する。ゾンビはそのまま倒れて機能停止する

「よし、次は……」

そう言つて次のを狙う

〈数分後〉

「修君、周辺の確保が出来たぞ。」

少佐が言う

「分かりました。ちょっと待って下さい。後もう一体居るんで、少し休憩してていいですよ。」

「了解した」

「修、あとどれぐらいいるんだ?」

秀治が言う

「うーん、後、十体は居るな」

「よし、俺も手伝っぜー！」

「そうか、じゃあ、俺のモシンナガンを使ってくれ」

そう言っつて渡す

「修はどうするんだ？」

秀治が聞く

「俺は……こいつだ」

そう言っつてangelの中から取り出したのはSteyr IWS 2000 というアンチマテリアルライフルだ。オーストリアのステアー社が作った対物ライフル。口径はあのバレットライフルよりでかい15.2mmという怒涛のでかさ、弾は15.2mmAPFSDS弾(Armor Piercing Fin Stabilized Discarding Sabot・装弾筒付翼安定徹甲弾)と言う物を使っている。個人用の火器としては前代未聞ともされている

「うはーステアーの対物ライフルじゃんキチガイだねー」

秀治が言う

「一度使っつて見たかったんだ」

そう言ってバイボットを立てて射撃体勢に入る

「おっ重なってるのがいるじゃん、もらいっつと！」

そう言って撃った。反動はでかく、一瞬、体が後ろに下がったような気がする。弾は一直線に駆けて行き、一体目の頭が消えた。そして、二体目の胴体に当たった。二体目はそのまま吹っ飛んで後方にあつた噴水に突っ込んだ

「うは、テラキモス」

秀治が言う

「ん〜快感だね〜」

そう言いつつどんどん撃ちこんで行った

床主アウトレット〜制圧編2〜

前回のあらすじ：アウトレット制圧開始

〜ロビー〜

現在、俺達はアウトレットに突撃し、ロビー周辺を確保した。だが、まだまだ、ゾンビ共は徘徊しており、早急に片づけなければならなかった

「おらおらおら！！！！！死ねや！！！」

そう言つて俺は、angelに積んであつたM60E4をぶつ放していた。こいつは元祖のM60より軽く設計されているため、陸軍以外にも海軍などでも使われている軽機関銃だ。

もつとも、精密射撃などできないからゾンビが大量に出てきたのみ使用している。ゾンビ共はまともに食らってしまったてドミノ倒しのように倒れていく

「やるね〜俺も負けてられないな！」

そう言つて秀治もSIG550を使用する。こいつは国防大国スイスで使用されているアサルトライフルだ。世界のARの中でも最高の能力を持っている。弾薬は5.56x45を使用する。秀治が使っているのはスコープを取り付けたVarである。

弾はそのほとんどが頭部に命中し、次々と倒れていく、本当に実戦経験は無かつたのだらうか？と疑つてしまうほどだ

「ヒュウ〜、やるね〜秀治、本当に射撃体験しただけなのか？」

俺が言った

「もちろんさ」

そう言っつて撃ち続ける

あつ因みに今、angleを運転してるのはアリス少佐だ。

勲さんとメアリーはその横に付いて援護する形になっている。俺と秀治がポイントマン役になっている

「メアリー、11時方向にターゲットがいるぞ。排除しろ」

勲さんが言う

「OK」

そう言っつてメアリーはM14で店内にいるゾンビ共を狙撃していく

「少佐、俺達のいる位置から12時方向に対処しきれない目標がいるんで、排除してくれませんか？」

無線機で言う

無線機は行く途中で、近くの店を漁った時に金庫から出てきた物だ。EMPの影響も受けていなかったみたいなので、使う事にした

「了解した。影に居てくれ、影響を受けるかもしれないから」

そう言つてangelの25mm砲をゾンビ共に向けて撃つた。機関砲の弾は着弾と同時に爆発するシステムなので一体だけでなくその周りにいるゾンビ共も吹っ飛んだりしていた

「おおー、いい眺めだ」

俺が言つた

「ああ、まさに戦争つて言つた所かね」

秀治が言う

「まあ、その戦争にも負けたら死が待ってるだけだろうからな」

「確かに」

そう言つて俺らは先行していった

（食料品店）

「修、ここ、スーパーじゃね？」

秀治が言つた

「おお、でかそうだな。これなら多少は期待できるか」

そう言つてドアに貼りつく、ノコノコ入って奴らの餌食なんて笑えない冗談だからな

「3カウントで行くぞ。3・・・2・・・1・・・GO!!」

そう言っただけ俺らは中に入って行く

「ふう〜いきなりの御対面は無いな」

俺が言った

「そうだな。とりあえず、探索するか？」

「ああ」

そう言っただけ奥に入って行く、スーパーは予想通りでかく、思ったよりも食糧が棚に有った

「意外とあるな〜これなら持つんじゃないかね？」

秀治が言う

「ああ、そう・・・」

俺が最後まで言おうとしたが、途中でやめた。なぜなら、俺たち以外にも誰か、このスーパーに入っているってことだ。現にショッピング用のカートの音が聞こえている

「修・・・この音って・・・」

「ああ、他にも生存者がいるみたいだな。」

その間にもカートの音が大きくなってくる。こっちに近づいている証拠だ。俺達は銃を構えて警戒を取っておく

「……ふう、生存者か」

秀治が言った

俺達の前に現れたのはこのスーパーの店員だろう人物、その証拠に前掛けのエプロンを付けていた。カートも身を守るためか、包丁や電ノコなどが取り付けられていた

「お前たちは……何をしに来た……」

店員が言う

「あーこの街から脱出する為に来たんだ。だけど、食糧が尽きて来てな。ここで、補給しようと思っていたんだ。」

俺が説明した

「そうかそうか 貴様らも他の奴らと一緒にこの店の商品をつぱらおつって言うんだな。困るんだよね。そう言うのは」

「は？何言ってるんだよ。おっさん、こんな世の中だ。生き残るに必要だつて言ってるんだよ。」

秀治が言う

「いいか。よく聞け餓鬼共、この店はな、私の物なんだよ。つまり、私の許可なしに持ち去る事は許されんのだよ！」

声を荒げて言うおっさん

「おいおい、勘弁してくれよ……どうしてもダメなのか？」

俺が言った

「もう一度言うぞ！この店は……私の店なのだあああああ
あ……………」

そう言っておっさんは電ノコの電源を入れた。電ノコは勢いよく音をならせた。そして、おっさんはそのまま突っ込んできた

「マジかよ!？」

「秀治！棚に昇れ！」

そう言っておっさんは両側の棚に昇る、間一髪でおっさんの餌食にならなかった。

「私の……私の店だあああああ……!!……!!……!!……!!
……………」

そう言っておっさんは店内を走って行く

「修、どうするよ？」

「そうだな……弾薬はangelの方に置いてきちまったから
な……秀治、お前の方はどうなんだ？」

「俺の方もキツイ、正直、白兵戦にはなりたくないと思ってるけどね……」

そうやってため息をつく

「まあ、どっちにしろ、あのおっさんを止めない限り、ここから持ち出せそうにないしな。」

そうやって立ち上がる

「どっするんだ？」

「俺が囷になる。秀治、俺のモシンはあるだろ？それで、狙撃してくれ。撃つとしたらあそこの棚だな。あそこから正面に出るから」

そうやって指さす、その一角は広くなっており、狙撃には最適のポイントだ

「とは言っても人殺しなんてやった事無いよ。」

「現にやってるじゃないか。ゾンビと言う人間達に向かって……
・・じゃあ、頑張ってくれよ。じゃないと俺がこの世からいなくなる事になるからな」

そうやって棚を降りる。万が一のために物干し竿を抜いておく、え？そんなに持てるのかって？気にしない気にしない

「さして、どっからやってくるのかね？」

なるべく音を出さないように慎重に歩く……が

「見つけたぞ！……！！……！！この店はやらないぞ！……！！……！！」

そう言っつて猛スピードでこっちに向かっつてきた

「見つかるの速すぎるだろ……！！この野郎……！！」

そう言っつて走る。あのカートに追いつかれたら最後、上半身と下半身が一生、お別れする羽目になる。そんなのはごめんだね

俺が抜けた後、おっさんがものすごい勢いで追いかけてくる。おっさんが通った後は商品の一部が真つ二つに切れていった

「自分で店破壊してるじゃねえか！」

そう言っつて秀治がいる所とは反対側の通路を走っつて行く多少なりとも時間を稼ぐためだ

「この野郎……！！」

そう言っつてサブに持っつて来ていたM92Fを乱射する。確実に当たりはしないが、牽制になるだろう。

「グオ！このクソ餓鬼が……！！」

腹に一発銃弾を喰らったがオッサンは勢いを弱めるどころかさらに増してきた

「そろそろかな？秀治、頼むぜ」

そう言つて秀治が待機している棚の方に向かった。予想通り、真正面から秀治と対峙する形になった。

「まだだ……まだだぞ……まだだぞ……今だ！！」

そう言つて俺は横にジャンプする。おっさんは勢いを止められず、走っている。それと同時に一発の銃声が店内に響く

「ゲウウウ！！！！????」

おっさんはその場で転げていた。秀治が撃った弾はおっさんの心臓付近に命中していた。カートは棚に突っ込んで停止した

「おわり……だな」

そう言つて俺はおっさんに近づく

「この店は……私の……他に……誰が……管理……できる……いらっしゃいませ……レジへ……どうぞ……六番レジ！！！！掃除しろ！！！！！！！！！！」

そう言つておっさんは息絶える

同時に秀治がやってきた

「終わったな」

「ああ、お前のおかげで助かった……ありがとうな秀治」

「ああ……………」

「なんか、悩みが出来たら相談しろ……………できる限り、協力はする」

「ありがとう……………修」

そう言っておっさんに対して黙祷した

こうして、スーパーを奪取する事に成功した修達だった

床主アウトレット〈制圧編3〉

〈小室視点〉

僕たちは修さんの協力の元、奴らに奪われたアウトレットを取り返すため、脱出経路として使っていた外部階段から中に侵入しようとしていた

「では、準備はいいかね？ポイントマンは我々で行う、君たちは後方の援護を頼む」

自衛隊の小ノ牧さんが言った

「了解です。」

平野が答える

「よし……フラグ・クリア」

そう言っつて篠田さんがドアを開けて綾瀬さんが手榴弾を中に放り込む、数秒後、中で爆発があった。小ノ牧さんらが最初に入って中の確認をする

「クリア！いいぞ」

「行こうか？小室」

平野が言う

「ああ」

そう言って僕達も中に入る

（二階非常階段前）

中に入ると奴らの死体があった。手榴弾は奴らの真ん中に落ちたよ
うだ

「うへへ本場は違うな」

僕が言った

「だが、今の音で奴らに嗅ぎつけられたな」

冴子さんが言う

冴子さんの言う通り、僕達のいる所とは反対側の廊下から奴らが歩いて来ていた

「むう、少しばかり派手に行きすぎたか？」

小ノ牧さんが言う

「いいえ、これくらいならどうにかなると思いますよ」

平野が言う

「では、ここから近い方には私と毒島さんと宮本さんで頼むよ。遠くにいるのは狙撃してくれて構わない」

「分かりました。皆もそれで良いな？」

僕が言うと皆は黙って頷いた

「よし、行くぞ！」

そう言って分かれる

「小室、こいつを使いなよ」

そう言って渡してきたのは静香先生の友達の家においてあった。銃だった

「でも、これって狙撃銃だろ？難しくないか？」

僕が言う

「大丈夫大丈夫、その木箱の上に銃を置いて狙撃すればいいさ。使い方は簡単に言うかね。マガジンをここにさして、後は上のレバーを引けばいいさ。ショットガンと違って引き金を引く度に次の弾が装てんされるようになってるから」

と平野が実演しながら説明する

「なんとなく分かったよ。やってみる」

そう言って平野からスナイパーライフルを受け取る。ショットガンとはまた違った重みを感じた

そして、木箱の上に三脚を立ててスコープを覗く、すると遠くにいた奴らの姿が目の前で見てる様なほど近くに写った

「ほへへすごいな」

「じゃあ、試しに一体撃つてみなよ。狙うのは頭だよ」

そう言つて平野は修さんから借りた狙撃銃で撃ち始める。僕も真似して奴らの頭に照準を合わせる

「それ！」

そう言つて引き金を引いた。弾が一発出て、真正面にいた奴らの頭に吸い込まれるように直進して行った。そして、奴らの頭、眉間の真ん中に命中し、奴らはその場で倒れた

「すごいな、狙撃銃って」

そう言いつつ僕は狙撃していくのだった

〈小室視点out〉

「さうて、少佐らを呼んでしまつか」

スーパーで狂った奴に遭遇した。やっぱり、こんな人間も出てくるんだな。俺はそんな事を思いつつも無線で少佐に連絡を取った

「少佐、食糧を見つけましたよ。すぐ近くにあるスーパーに来て下さい」

俺が言った。無線の向こうから「了解」という言葉が来た

「さて、秀治、スーパーの前で待ってるか」

「そうだな」

そう言って一旦、スーパーを出る

人間を一人殺してしまった事に対して、秀治は引き摺るかと思いきや、すぐさま、いつも通りの元気を俺に見せてくれた。正直、ホッとしてる

「ふう〜」

俺らはスーパーの前でタバコを吸いながら待っていた

「で？この後はどうするんだ？」

秀治が言った

「う〜ん、まずは、小室君達を小学校の方に向かわせなきゃな。それから、秀治の親御さんの所に向かっていく、だが、その後が問題だな」

「なんでだ？」

「だって、EMPのおかげですべての電子機器はダメになったんだ。当然、船にも影響を与えてるはずだぜ？脱出経路を見なおさなくっちゃあいけないな」

「海がダメならこのまま車で脱出つてのは？高速なら半分の時間で出られるし家の近くに高速の入口はあるぜ？」

「そうだな・・・それが一番いいかな」

と話しているとどっからやってきたのかゾンビ共がやってきた

「おいおい、弾が無い状態でこいつはきついな・・・秀治、どのくらい弾薬はある？」

俺が聞いた

「えーと、ハンドガンの弾が40、ライフル弾が200ってところだね」

「多くは期待できないか・・・なんかあったけな」

そうやってバツクの中身を漁る

「ん？こいつは・・・」

そうやって出したのはスタングレネードだった。グレネードと言ってもこいつは強力な光と音を出して相手の視覚と聴覚を奪う非殺傷兵器だ。人質なんかがいる状況では効果が高い

「スタンじゃん、そんなのいつ入れてたんだ？」

秀治が言う

「分からんね・・・でも、こいつは使えるかもな。秀治、合図

と共に物陰に隠れる。奴らが耳の発達が著しい、それを利用しよう」

「なるほど、どうなるか楽しみだな」

「3カウントで行くぞ。3・・・2・・・1・・・GO！」

そう言ってピンを抜き、ゾンビ共に向かってスタンを投げる。その間に物陰へと隠れる俺達、スタンはそのまま奴らの上空で一気に光り出し、強烈な音を響かせる

「ひゅいゝ耳塞いでも、きついなゝ」

俺が言った

「でも、あいつらの方が効果抜群みたいだね」

そう言ってゾンビ共を見る。ゾンビ共はその場でのたうち回りながら床に伏せていた。中には頭が破裂している物までいた

「あれまゝ結構なお手前で・・・これで、しばらくは動けないだろうなゝ今の内に処理しておくか」

俺が言った

「そつだね。」

そう言って俺達は刀を持って彼らに対して敬意を払いつつ、処理活動を行った

うっほ！いい食材！

俺らはアウトレット内でスーパーを発見し制圧した。少佐らを待つ途中、ゾンビ共が嗅ぎつけてきたが、撃退した

スーパー前

「ここか」

少佐が言う

「ええ、結構な数ですよ。生ものはダメになってましてけど、インスタント食品はまだ、あったので大丈夫だと思いますよ」

俺が言った

「よし、後は二階のチームか。大丈夫かね？」

勲さんが言う

「大丈夫でしょう。小ノ牧さんら自衛隊もいますし」

秀治が言う

「でしょうね。で、どうする？先に集めちゃう？」

メアリーが言う

「それが先決だな。いつまでもここにいるわけにはいかん。さっさ

と集めてしまおう」

少佐が言った

「よし、少佐とメアリーは食糧を集めてきちやっして下さい。ここは俺と勲さんと秀治で守ってますので」

俺が言った

「了解した。量はどうする？」

「集められるだけ集めちゃって下さい。」

「分かった。では行くか。メアリー」

「ええ、行きましょう」

そう言って少佐とメアリーは中に入って行く

「よし、防衛線を張っておこう。秀治と勲さんはこちら辺に重機関銃を設置して下さい。俺はトラップを仕掛けて置くんで」

「了解した。秀治君、準備してしまおう」

「分かりました。修も気お付けてな」

「応、それじゃあ」

そう言って俺も二人と分かれる

「さ〜て、どこに仕掛けようかね〜」

俺はスーパーの近くから離れてゾンビ共がやって来そうな場所にクレイモアを仕掛けて行っている。クレイモアは対人用の地雷で爆発すれば、人間はミンチになってしまう恐ろしい物だ

「おっこの通路にも仕掛けて置くかな・・・」

そう言って業務用の通路にクレイモアを仕掛けて行く

『アアアア〜』

「おっと、さっそくお出ましたな。それじゃあ、実験台になってもらおうか」

クレイモアを仕掛けた直後にゾンビ共が業務用通路から出てきた。一目で3〜4つて所だ。

「ほ〜ら、こっちだぞ〜ここまでおいで〜」

手を鳴らしながらこちらに誘導する。奴らは音に敏感なんだ、これで十分だろう

「よし、逃げるか」

そう言って通路とは反対側に走って行く、通路側からはゾンビ共がやってきた

「よし、こっじゃな〜」

そうやって手元のリモコンを押す、クレイモアはワイヤートラップの他にリモコンを操作して爆発させる事が出来る。

スイッチを押した瞬間、クレイモアは爆発した。クレイモアは爆発すると扇状に700個もの鉄球をばら撒く、16mは立ち入り禁止エリア、100mでは危険エリアとなっている。上記の説明通り、一番近くにいたゾンビは爆風と鉄球の餌食となり、外見は判断不能までになっている。逆に遠くにいた奴でも鉄球を喰らっていた。足が？げていたり、手が吹き飛んでいたりと凄惨な光景である。

常人が見たら真っ先に吐く事間違いない光景である

「うへっテラキモス、だけど、成功だな。もう一個仕掛けておこう」

そう言って再び仕掛けて置く

「ただいま」

俺はスーパーの前に帰ってきた

「お帰り、どうだ？」

秀治が言った

「出てきそうな所に仕掛けたさ。それに、実験もしてきたから大丈夫だ」

「実験？」

「ああ、ゾンビ君相手にクレイモアを仕掛けた」

「うはっ鬼畜だな」

「あいつらは人間じゃないんだ。願っても無いのに死体にされ、そのまま当ても無く動き回るんだからな。いつそ倒した方が倒された方も成仏してくれると思うぜ？」

「確かにな」

「おや、修君、帰って来てたのか」

angelから出てきた勲さんが言った

「ええ、こつちのトラップも仕掛けましたから、とりあえずは大丈夫ですよ。少佐達は？」

「今さっき、出てきた所なんだが、まだ、積み込めそうなので、再び入って行ったよ。時間的にもう少し掛かりそうだ」

勲さんが説明する

「そうですね。じゃあ、もうちょい待ちましようかね」

そう言っつて俺はangelの上に昇り、タバコに火を付けた。いや、タバコも切れそうになってたからな、スーパの中にあっつてほんと、良かったよ

「修、俺にもくれ！」

秀治が言った

「あいよ。よりどりみどりだ」

そう言っつてタバコが入ったバツクを投げる

「サンキュー」

そう言っつてバツクをまさぐる

「あれ？ 勲さんは吸わないんですか？」

俺が言っつた

「ああ、私は昔、吸っていたが、今はやめたよ。ドクターストップを掛けられたからな。今では健康体そのものさ」

そう言っつて笑う勲さん

「へへ意外ですねへ吸っつてそんなイメージがありましたけど」

そう言っつてふうーと息を吐く、同時に白い煙が上空に立ち昇っつてやがて消えて行く

そうしている内に………

『アアアアアア』

どこからともなくゾンビ共がやっつてきた

「お出まししたな。サクサクと片づけて………」

そこで言葉を止めてしまった俺

「修？どうしたんだ？」

秀治が言った

「いや、見間違いないら良かったんだが……なんか、でかいのがゾンビ共の中に紛れ込んでるぞ」

「何？どんなのだ？」

勲さんが言う

「なんて言うか……ゴリマッチョ的な？そんな感じですよ」

「ゴリマッチョ？て言うとな筋肉ムチムチなあれの事？」

「そんな感じ」

数メートル先にゾンビ共が徘徊しているのだが、その中に数倍の体格を持ったゾンビが徘徊していた。スピードは遅そうに見えるのだが、パワーが極限までアップされた感じのタイプだ

「……おいおい、あれ、銃弾……効くのか？」

それを見た秀治が言った

「分からんね……」

俺が言った

「試しに撃ってみてはどうだ？それで、分かるかもしれないぞ」

勲さんが言った

「ですね……秀治、俺のモシンを返してくれ」

「OK」

そう言ってモシンを渡す秀治

「サンキュー」

そう言って射撃体勢に入る俺

「心臓付近を狙って見るか？」

そう言ってトリガーを引いた。弾は勢いよく出て、ゴリマッチョゾンビに当たるが……

「なん……だと？弾かれた？」

確かに弾は心臓付近に当たったのだが、まるで、装甲板に当たったかのような金属音がした

「マジかよ……」

秀治が言った

音に気付いたゾンビ共は一斉にこちらに進行してきた

「ヤバイ！勲さん！重機関銃を使って下さい！秀治！お前は援護射撃を頼む！」

「分かった！」

「把握！」

そう言っ二人が動く、勲さんは設置したM134をぶつ放す、秀治はM I N I M I でゾンビ共を刈っていく、俺はangleの中にめぐりこみ、対物ライフルを漁る

「クッソ、とりあえず、バレットでやってみるか？」

そう言っバレットを取り出して、ゴリマッチョに照準を合わせる

「死ねや！！」

そう言っトリガーを引いた。12.7mm弾が勢いよく飛び出た。そして、ゴリマッチョゾンビに命中するが……

「効かない！？」

ゴリマッチョゾンビは悠々とこちらに向かって来ていた

「修！どうすんだよ！？」

秀治が言う

「クッソ……どうすりゃあいい？考える修……」

そう言って自問自答した

「こうなったら、あいつを出すか……二人とも少し時間をくれ！」

「「分かった！」」

そう言って俺は再び `anager` に潜り込むのだった

デカブツの倒し方

俺はモール内で新たな敵に遭遇した。しかも、並みの攻撃では効かないような頑丈な体格になっていた。俺はa n g e e l内で新しい武器を持ち出そうとしていた

〈スーパー前〉

スーパー前では銃声が轟き、また、止む事が無かった

「修！ゾンビ共は粗方、片づけたぞ！後はあのデカブツだけだ！」

秀治が言った

「オーケー」

俺はa n g e e l内から返事をした

「秀治君、我々であいつを引き付けよう。多少なりとも時間を稼ぐんだ」

勲さんが言う

「了解です！」

そう言って二人はデカブツの方に向かった

〈a n g e e l内〉

「クツソーバレットでも効かないんじゃないか、規格外の武器って有ったけな……」

そう言っただけ俺は辺りを漁る

出てくるのはハンドガンだったり、ショットガンだったり、いかにも効かないような武器ばかりだった

「あれは、マジでLunaだな……これ以上に難しい事なんざ、他にないぞ」

そう言っただけ、奥の側の荷物が拍子に崩れる

「ん？なんだこれ……」

荷物の中から？マークが出てきたのだ

「angleに元々積んである物か？だとしたら、琥珀だが……」

そう言いながらも荷物を掻き分け、全体を取り出す

「おいおい、無反動砲じゃないか。琥珀の奴、何に使ったんだ？怖いけど、こいつは使えるかもな……」

そう言っただけ近くに張り付けてある説明書を取る

（説明書）

アメリカ陸軍からMS・琥珀へ

注文されていた装甲車用の無反動砲が完成したので送ります。これは、M20・75mm無反動砲を元に造りました。名前はM30・85？砲です。使い方は従来の無反動砲と一緒になので難なく扱えるかと思います。

威力は戦車砲とまではいきませんが、少なくとも同じ装甲車両なら一発で片が付きますよ。これは保証します。

弾は、通常弾と特別な手甲爆裂弾を用意しました。爆裂弾の方は注意して扱って下さい。間違つて手元に落とすような物なら自分の体が無くなると思つて下さい。まあ、あなたの場合、そう言うのは慣れるかもしれないませんが……とにかく、慎重に扱って下さいね。

「琥珀つて……アメリカ陸軍とお友達なの？そりゃあ、武器商人とはいえ裏の顔は広いかもしれないが……うん、気にしたら負けだ。えーと、使い方は、まず砲身を外に出す」

そう言つて砲身を押しした。すると、簡単に砲身が外に飛び出た。

「ほうほう……で、肝心の弾は……あれかな？」

そう言つて固定座席の下に木箱が置いてあつたのでそれを開けた。中身は無反動砲の弾だった

「おおう、こいつか……装填方法は、横から入れるのか」

説明書通りに弾を装填した

「えーと、撃ち方は……運転席でやるんだな。」

そう言つて運転席に移動する。席に付いてまだ、触つて無いボタンが有つたのでそれを押した。すると、目の前に画面が表示され、あのデカブツが映つた

「よし、うまく、誘導してくれてるようだな。一気に決着を付けるか」

そう言つて運転席の蓋を開けた

「秀治！勲さん！準備ができました！離れて下さい！」

そう言つと、二人は一気に離れ、姿が見えなくなった。俺はバレットでこつちに引かせるように撃つた。予想通り、デカブツはゆつくりとこつちに歩いて来た

「スタンバイ・・・・・・・・スタンバイ・・・・・・・・
・fire!!」

そう言つて発射ボタンを押す、車体に大きな揺れが走り、弾は勢いよく射出された。そして・・・・・・・・デカブツと衝突し、爆発した

「さすがに効くだろう・・・・・・・・これで、効かなかつたら撤退有るのみだな」

爆発のせいで周りに置いてあつたベンチなどが近くの店に突っ込んでいた。それが爆発の威力を物語る。ゆつくりと煙が晴れてきた。

「よっしゃ！！こいつは効いたも同然だな」

デカブツは爆発の衝撃で後ろの方に吹っ飛んで大きな遊具を背もた

れにするかのように座っていた。それから、観察していたが奴はピクリともしなかった

「うへへ、何使ったんだ？修」

秀治が言った

「無反動砲さ」

「無反動砲？つまり、対戦車ランチャーとか？」

「いやいや、それより威力がある奴さ」

そう言っただけで笑った

「しかし、あいつはどこから出て来たんだ？今まで見たことも無いぞ」

勲さんが言う

「さあ、分かりませんね。これは仮説ですけど、あのゾンビも元々は普通だった。しかし、何かの拍子に細胞が急激に変化して、あんな姿になったんでしょうかね」

俺が仮説を言う

「なるほどそれが一番しっくり来るけどな、これから先、あんな奴までいるかと思うと寒気がするな」

秀治が言った

秀治の言う通りだった。今までのゾンビならハンドガン一丁でも倒せるが、あんなデカブツが出てくるとなると対戦車ランチャーなどの重火器が必要になってくるのかもしれない。現にバレットライフルがダメだったんだ。

「秀治の言う通りかもな……まあ、今回は倒せたから良いとして、次から気を付けないといけないな……」

俺が言った

同時に少佐達がスーパーから出てきた

「皆！これで、全部だぞ……って何があったんだ？」

少佐が言う

「実は……」

そうやって俺がこれまでの経緯を話す、説明が適当だとか言つなよ。めんどくさいとかそう言うのじゃないんだからな

「なるほど、それじゃあ、ここを出るとするか？」

少佐が言った

「そうですね。帰りは俺が運転していきますよ。後の皆は周りを警戒しておいて下さい」

そう言って angee に乗り込む

「了解した。勲さん、一緒にポイントマンをしてくれませんか？」

「分かりました。」

そう言っつて少佐と勲さんが先導する

俺もangelのエンジンを動かして、反転した

「修、この砲はどうするんだ？」

そう言っつて無反動砲を指さす

「うーん、片づけるのも面倒だしな、いや、そのままです」

「OK、じゃあ、行こう」

そう言っつて俺達も動いた

途中、小ノ牧さんらのチームすれ違った。小ノ牧さんらはもう少し、調べたら出てくるそうさだ。

俺達はそのまま、外に出て待機班と合流した

（駐車場）

「お帰りなさい。修さん」

美麻さんが迎えてくれた

「ただいま、美麻さん、食糧も手に入ったぜ。これなら、当分は持つな」

「そりゃあ、すごいですね！後、こっちで調べたんですが、どうやら、EMP攻撃を受けたのは日本だけみたいです。軍事情報だと、最初は六発も上がってたらしいですけど、米海軍と海上自衛隊が防衛したらしく、5発までは落とせたみたいです。ですけど、最後の一発だけ漏らしたみたいで、後は日本上空で爆発したらしいです」

美麻さんが情報提供をしてくれた

「なるほど！そう言う事だったのか……」

「そう言えば、小室達は？」

高城が言った

「ああ、小室君たちならもう少し、調べるそうだ。後、数分で来るらしい」

「そう。まあ、自衛隊もいる事だし、大丈夫ね」

そう言って戻った

「さて、彼らが戻ってきたらどうする？」

少佐が言う

「戻ってきたら、ここを出発、小学校の方に彼らに乗せて行って、それで、秀治の家に行って船を頂戴しようかと思ってます」

「なるほど、では、今は待機だな」

そう言って葉巻を取り出す少佐

「さて、今の内に銃の点検でもしますかね」

そう言って俺は銃を取り出して点検を始めるのであった

こうして、無事に食糧を手に入れる事が出来た俺達だった

やっぱり、改造は楽しいよね？

俺らはアウトレットで食糧を調達し、駐車で小室君達のチームを待っている所だった。

～駐車場～

「ふわ～、遅いな～」

俺は欠伸をしながら言った

「しょうがないんじゃない？アウトレットは広いんだし、何よりゾンビ共がウジャウジャ居るからね～」

秀治が言った

「分かってるんだけどな～でも、暇なのは確かな事じゃないか？」

「それはな……」

そう言っつて秀治はタバコを啜える

「暇だし、車両をちょっと改造しようか。秀治、工具一式」

「ほいよ。大事に扱ってくれよ」

「わーってるよ。さてと、手ごろな車から材料を拝借すると思いますか」

そう言っただ俺は近くの廃車から材料を集める事にした

「この際、防御を高めるとしますかね。だとしたら、あのトラックからか」

そう言っただ73式の方を見る

「うーん、やるとしたら同系のトラックが良いんだけど……
・あつた。」

そう言っただ近くに放置されていた大型トラックが目に入った。さっそく、分解を行い、使えそうな部品を集めて行く

「何をしてるんだね？修君」

勲さんが言っただ

「ああ、待ってるのも暇なんで車両をちょこつと改造しようかと思いましてね。今、手ごろな部品を集めてる所です」

「なるほど……面白そうだな。私も手伝おう」

そう言っただ笑う勲さん

その後は二人で手ごろな材料を集めて、73の方に持って行っただ。さらに運の良い事に分解したトラックは工事用の道具を運搬する会社だっただらしく荷台にはたくさん工具が揃っただ。

「いや、これでいい作品ができそうですね。勲さん」

「ああ、実に楽しみだ。で、今回のジャンルはなんだ？」

「一応、防御型と言う事をお願いします。この車両の中じゃあこのトラックが貧弱なんで」

「了解した」

そう言うて俺らは作業を開始する。

まずは、荷台の帆を取り外して、さつき外したトラックの荷台の鉄を囲むように取り付けた。さらに、タイヤにはスカートを取り付けてタイヤへの被害を少なくする作業を施した。これにより、パンクする確率が低くなるのだ。

運転席にはさらに鉄板を取り付けて中の運転手及び同乗者に被害が行かないようにした。バンパーも通常の物から雪かきなどで使われるバンパーを取り付けた。助手席の屋根を切り取って、代わりにM2キャリバーを乗つけた。さらに荷台の屋根部分にも機関銃を取り付けられるように造った。これで、外見はガントラックのように見える

さらに、このトラックにはロケランと言った爆発の可能性がある物ばかり積んであるので、荷台の下の部分の鉄を厚くして火による誘爆と言った事態を避けられるようにしてある

「うーん、いい出来だな」

勲さんが言った

「そうですね。これなら、そこらのトラックより強いはずですね。

まあ、元が軍用車両ですし、大丈夫でしょう」

俺が言った

「おい、修く終わったか？ってガントラックじゃん、良くできたな」

秀治が言った

「ああ、実にいい出来だ。俺も満足してるよ」

笑顔で言った

「そうか。そりゃあ、良かったな」

「所で、秀治君は何か用があつたのではないか？」

勲さんが言った

「おおっとそうだった。小室君達が戻ってきたようだよ。今さっき、二階の非常階段の所にいた。だけどな……」

「？なんか、有つたのか？」

「ああ、階段の下にゾンビ共がいつの間にか集まっていたな。降りられないみたいだ。」

「そんなに多いのか？」

「いいや、多いとは言っても15〜20って所だな。でも、まだそ

の近くの入り口から出て来やがる。増える方に継続中だ」

秀治が言う

「他の道は？」

「アウトレットの中って事か？エスカレーターは何があったか知らないけど、爆破されて落ちてるよ。それに階段もシャッターが降りてて通れない。さっき、中にいた時に確認した」

秀治が言った

「そうか・・・だとすると、こっちからの支援が無いとダメって事か。angelは琥珀が点検中だから使えないしな・・・」

俺が言った

「なら、修君」

「はい？」

「こいつを使って見てはどうだ？」

そう言って73式改を指さす

「なるほど、実地試験も兼ねてって事ですな。」

「ああ、こいつがどこまで役立てるのか試してみようじゃないか。」

そう言って荷台の屋根に昇る

「おもしれえ、どこまでやれるか楽しみだな。」

そうやって俺は運転席に入る

「修、面白い事は俺も混ぜるよ。」

そうやって秀治も荷台の屋根に昇った

「よし、出発するぞ！」

そうやってアクセルを踏んだ。因みに、防御力を高めたわけだが、肝心のエンジンは修の独自改造によって出力が上がっており、本来の73より上に仕上がっている

「よっしゃああ！！！！悪魔が通るぜ！！！！」

そう言いながら駐車場に停まってある車をどかしながら突き進んでいく

そして、小室君達がいる非常階段付近にまでやってきた。秀治の情報通り、関係者用通路からゾンビ共が歩いて来ていた

「行くぜ！大型トラックのドリフトじゃあ！！！！」

そうやってハンドブレーキを思いっきり引いた。後方タイヤにロックがかかりアスファルトとタイヤの擦れる音が響く、もちろん音の無い世界になっっているのでゾンビ共はこちらに向いた。それと同時に巨大な車体がゾンビ共の目の前に現れ、無残にも轢かれていった

「よし！勲さん！秀治！派手にやっちゃってくれ！」

俺がそう言った瞬間、荷台取り付けてあったM2キャリバーやM60軽機関銃が火を吹く、それを喰らったゾンビは風穴が開いていった俺も頃合いで運転席から飛び出て右手に物干し竿、左手にはミシガンを持った状態で奴らを切ったり撃ったりした

「ヒヤッフウウ！！！！最高！！！！」

「修さん！」

上から小室君の声が聞こえた

「小室君！さっさと降りてこい！防衛はこっちで持つ！」

「わ、分かりました！」

そう言って小室君達は階段を降りて行く

「さあ、俺を楽しませてくれよ！」

そう言って近くにいた奴を切った。後ろから一体、俺に噛みつきつとしていたが、できなくなる

「修、あまりはしゃぎ過ぎるなよ。背中がガラ空きだぞ」

秀治がM4で撃ちながら言った

「はは！！無理だね！！お前を信頼してるからこそ、こっやって暴

れられるんだ！背中任せたぜ！相棒！！」

「嬉しいね！だったら、期待に応えないと！！！」

そう言って固定機関銃であるM60に再び持ち替えて連射しまくる

「そら！どどん掛かってこいや！」

そう言いながら俺は撃ちまくっていた。

え？二発しか撃てないのになんで撃ちまくれるかって？簡単さ。俺のリロードはレヴオリューションだからさ！

「修さん！」

小室君達が着いたようだ

「さあ！早く乗りたまえ！最終便は待たないぞ！」

「はい！」

そう言って小室君達は乗り込む

「修君！早く来い！」

運転席から小ノ牧隊長が声を掛ける

「ええ、今行きますよ！」

そう言って俺は梯子部分に手を掛けた。もちろん、撃てるように片

方にはミシガンを持っている

「よし、出発する！」

そう言って小ノ牧さんはアクセルを踏んだ。トラックはゆっくりとスピードを上げて行く

「修、こいつであの入り口吹っ飛ばしていいか？」

そう言って秀治が見せてきたのはカールグスタフだった。

グスタフは自衛隊でも使われている対戦車ロケットランチャーだ。ジャンルのには無反動砲に入る代物だ

「ああ、いいぜ。思いっきり吹っ飛ばしてやりな」

「おk、把握！」

そう言って秀治は射撃体勢に入る。数秒後、一発のロケット弾が入り口に向かって飛んで行き、入口の上の部分に当たって爆発を起こした。

爆発の衝撃で入口は崩れ落ち、近くにいたゾンビはその下敷きになった

「琥珀、聞こえるか？」

俺は無線機で呼びかけた

「はい、なんでしょうか？修様」

「すぐに出発準備をしる。ここはもう捨てる」

「了解です。ここにいる皆さまに伝えます。では」

そう言って無線を切る琥珀

「さてさて、食糧も手に入った事だし、後は小学校に向かうとしますか」

そう言って俺は梯子を昇った

墜落機と商品（前書き）

商品が気になりますね〜by修

墜落機と商品

俺達は床主アウトレットから脱出して、小室君達が目指している床主小学校に向かっていた。因みに俺は73式改を運転している。俺専用のハンヴィーはメアリーが操作している。

ガントラックの方に乗っているのは俺、秀治、勲さん、小室君、毒島さん、宮本さん、コータ君、小ノ牧さんらである。少々、定員オーバーギリギリだが、まあ何とかなるだろう

く大通りく

「さて、どう行こうかね」小室君、こっから小学校までの道のりは分かるかい？」

俺が聞いた

「あつはい、この辺りは僕が暮らしていた地域なので大体、分かります」

「そうか。じゃあ、ナビゲートよろしく」

「分かりました」

そう言っただ案内してくれる小室君

「メアリー、先頭は俺が立つ、angelは最後尾にいてくれ」

無線機で伝えると両方が「了解」と言った

その時だった

「ん？なんだ？この音」

俺が言った

上空を切り裂くように重低音が響く

「修！上だ！」

荷台にいた秀治が言った

「上？」

そう言って窓から顔を出した。そこには……

「ありや、C-130じゃん。しかも自衛隊のじゃないな……
アメリカ空軍の輸送機か？」

上空にはC-130と呼ばれるプロペラ式の輸送機があった。アメリカの航空会社ロッキード社が作った輸送機で、最新版のはハーキユリーズ？と表記されているアメリカは元より世界の69カ国で使用されているベストセラーの輸送機だ

「てことは、アメリカ軍が助けに来たのか？」

勲さんが言った

「いんや、こんな早く事態が解決するとは思えませんね。」

俺が言った

そこで、輸送機がどの方向に向かうのか調べるため、一旦、車列を止めた。幸い、ゾンビ共は周りにいなかったので見張りを立てて俺は双眼鏡で輸送機を見ていた

「うーん、どう見ても米空軍だなくでも、こんな所で何をやってるんだ？」

俺が言った

（C-130機内）

「機長！アンデット共がそこまで来てます！」

一人の兵士が言った

「奴らはもう仲間ではない！撃て！とにかく撃ちまくるんだ！」

操縦桿を握る機長が言った

操縦室には機長と副長、それに数名の兵士達がいた。しかし、扉の向こうではドンドンと扉を叩く者がいた。人間ではない者達が……

「くそ、まさか、兵士の中に紛れ込んでいたとはな……このままでは、母国に帰る事も許されなくなっただか」

機長が言った

「しかし、機長、燃料も予備と合わせて少ないです。落ちるのも時間の問題かと……」

副長が言った

「生存者はこの室内にいる者だけか……後は全員……」

「ええ、奴らの餌食になりました。このままでは沖縄に届けるはずの救援物資も無理そうですね。」

「確かにな……このまま降りれば、沖縄にいる仲間達に危害を与えてしまう事になる。これ以上人が死ぬのはごめんだ……」

「機長！もう、扉が持ちそうにないです！」

兵士が言った

「ああ、神よ……慈悲があれば……どうか我々を天に召したまえ……」

機長がそう言った瞬間、扉が破壊され、アンデット共がなだれ込んできた

「う、うわああああ……！！！！！！！！！！」

近くにいた兵士はすぐに餌食となった。そして、ゾンビ共は機長や副長にも手を伸ばした

副長は多少の抵抗はしたものの、喉を食いちぎられ死亡した。機長

は何も抵抗しないまま、餌食となった

操縦者のいないC-130はバランスを崩しながら落ちて行く

くガントラックく

「おいおいおい………墜落すんぞ」

俺が言った

「何かあったのかな？」

秀治が言った

「分からんね。もしかしたら兵士の誰かがゾンビにでもなったんじゃないか？」

そう言った瞬間、オフィス街の向こうから爆発音が聞こえた。墜落したのだろう

「行ってみるか？もしかしたら生存者がいるかもしれない」

勲さんが言った

「どうしましょうかね。ここは多数決で決めるとしますか？」

「それが良いと思うな」

秀治が賛成した

俺は皆に墜落現場に行ってみる事を聞いてみた。もしかしたら、生存者がいるかもしれないと言って・・・

小室君達は先を急いでいたが、生存者がいるならと言って賛成してくれた。琥珀や少佐はすぐに賛成してくれた。なので、墜落現場に向かう事にした

↓オフィス街↓

俺らはオフィス街を通っていた。ここも今までと同じく人の姿は無く、あちこちで火事の跡が見えた。道路では車が横転していたり電柱に突っ込んでいたりは無残な物だった

「ここも酷いな・・・」

小室君が言った

「皆、同じだよ・・・少なくとも今、俺達は生きてるんだ。大切な人を失くしたって生きる義務が俺達にはあるんだ。どんな汚い事をやってもな・・・」

そう言いながら俺らはオフィス街を抜けて行く

↓墜落現場↓

「・・・ここか」

そう言って車両を止める俺

C-130は見るも無残な形になっていた。機体は半分に折れ、プ

ロペラエンジンは近くのビルに突っ込んでいた。さらに物資らしきものが散乱していた

「こいつは……絶望的だな」

少佐が言う。

俺は黙祷した。皆も合わせるように黙祷などをした

「……使える物が無いか探そう。今後のためにも……」

俺が言った

「そうだね。物資があっても運べないんじゃない。使わないよりマシだろ」

秀治が言った

その後、皆で手分けして使える物が無いか探した。ほとんど落ちた衝撃でか中身が散乱していた。ほとんどは食糧などであったが、火が燃え移って焼けてしまっていた。見つけられたのはangle用のブッシュマスターの弾薬、それにそれぞれの銃の弾薬などが多く拾えた。これなら、大量のゾンビ共が現れない限り、消費する事は無い

「ん？なんだ、ありゃあ」

俺が言った

機体の後方部分（ハッチがある所）であろう所に何かが収まっていた。俺は瓦礫を崩しながらそれに辿りついた

「おいおい、こんな物まで運ぼうとしたのか？あきらか、重量オーバーじゃないか？」

俺が言った

そこに有ったのはM1A2エイブラムズ戦車であった。これはアメリカ軍が使用する第三世代のMBT（主力戦車）で世界の国々で使用されている戦車である。砲台の120mm滑腔砲が特徴的である。ゆる障害を破壊する為に作られた兵器である。

「どっした？修」

秀治がやってきた

「こいつを見てみるよ」

「なんで、エイブラムズがあるんだ？しかも、開発中のタイプじゃないか？」

「なんで、分かる」

秀治……恐ろしい子……！！

「だって、今までのタイプと違うからほら、エンジン部分なんて燃費考慮のためか新しい奴だぜ。これそれに一回りちっちゃくなるし、後は……」

そう言っているんな所の違いを言っ。俺より詳しいじゃないか。ちくせう

「そんなことまで、分かるのか」

「まあ、伊達に軍オタはやってないからね。これでもいるんなとこにコネがあつたのさ」

「そのコネとやらが気になるが……まあいい、こいつ……
・動くのか？」

「どうだろう……落ちた衝撃で動かなくなってるかもな。よいしょつと」

秀治はそう言ってエイプラムズに乗る

「どうだ？」

「ちよつち待ってて」

そう言っつて中に入る秀治

数分後……

鋼鉄の騎馬がうねりを上げた。

「おー動くじゃんか」

俺が言っつた

その後、少佐に伝えると「動かせるなら持って行こう」と言った。

そんなわけで、新たな主戦力が俺達のチームに加わった

やっぱり戦車は良いよね！え？良くない……そうですか……

俺らは墜落現場からアメリカ軍の試作機エイプラムズXM102を手に入れた。もちろん、戦車砲の弾薬も墜落現場から発見した。これで、大抵のゾンビ共は吹き飛ばせるし、アウトレットに出てきたあのデカブツも仕留める事が出来るだろう。

そして、本来の目的地である床主第3小学校に向かっている。ここには小室君の母親や宮本さんの父親がいるのではないかとの未確認情報もあるので、向かっているのだ

試作戦車にはもちろん、俺が乗っている。

「うわ、戦車ってこんなに揺れるんですねー！」

同乗している美麻さんが言った。

「この戦車で約80kは出るように設計されてるんだ。スピードもここ最近になって重視されてきたからな。後、赤外線モニターも付いているスクーラーだって付いてるんだ」

俺が説明する

「へーすごいですね。でも、修さん」

「なんだ？」

「なんで、戦車の動かし方とか知ってるんですか？どう見ても一度、動かした事があるみたいな感じですけど」

「ああ、俺の海外の友人に同じ軍オタの奴がいてな。そいつは戦車とか所有してたから長期休みの時に遊びに行つて動かしたりしてるんだよ。もちろん、免許は無いけどね」

「さらつと怖い事言いますね」

「そうか？これ以上に怖い経験なんてしてきたろ？今まで」

「………確かに」

美麻さんは納得したように言った

「おっと、噂をすれば………」

そう言つて目の前に現れたゾンビどもに照準を合わせる。と言つてもそこまで多くないので同軸機銃で十分なほどだ

「ほいっ」と

手元のスイッチを押す、すると7・62mm弾が勢いよく発射されゾンビ共の体を穴だらけにする。

「これだと、もうチートですよね。」

「そうだな……まあ、やられるよりはマシだろ？」

「そうですね」

「おっと、今度は大量発生したな……あの車を狙うか」

そうやって今度は主砲に切り替え、照準を乗り捨ててあつた車に合
わせた

「そこだ！」

そうやってスイッチを押す、120mmから砲弾が発射される。弾
は従来の砲弾も使用する事が出来る成形炸裂弾や多目的対戦車榴弾
などが使用できるが、この戦車は120mm KE DM53とい
うラインメタル社が開発した新型弾薬も使用する事が可能なのだ
砲弾はまっすぐ進み、車にぶつかって爆発を起こした。その爆風で
ゾンビ共は吹っ飛ばされて行った

「ふう〜気持ちいい！」

俺が言った。その時だった

「ガツ 修さん、聞こえますか？」

無線機から小室君の声が聞こえた

「こちら、修だ。どうした？小室君」

俺が答えた

「もうすぐ、小学校が見えてくるはずなんですけど……」

「そうか。美麻さん、小学校は見えるかい？」

「ちょっと待って下さい」

そう言っつて上部ハッチを開ける美麻さん

「えーと……あつ有りました。約、二キロ半つて所ですかね。小学校が見えます」

「だそうだ。聞こえたかい？」

「はい、」

そう言っつて無線を切る小室君

「ちょっと待って下さい。修さん、前方が妙な事になってますよ？」

美麻さんが言っつた

「妙な事つてなんだい？」

「EMP攻撃のせいかわかりませんが、道を分断するようにジャンボジェット機が横たわつてます。」

「マジでか……ちょっと止めるよ」

そう言っつて戦車を止めた。後ろも同じように停まつた

そして、俺もハッチを開けて前方を見た

「おおおう、こんな綺麗に横たわつてるなんてな……」

美麻さんの言った通り前方にはEMP攻撃のせいだ。旅客機が道を塞ぐように横たわっていた。翼は近くの民家に突き刺さっていた

「うへ〜こいつは酷いな〜」

ハンヴィーに乗った秀治が言った

「どうする？他の道から回ってみるか？」

少佐が言った

「う〜ん、どうするべきか……小室君、他に道はあるかい？」

俺が聞いた

「いいえ、他の道は前に大規模な工事があつて塞がれています。今はこの道ぐらいしか通る道がありません」

小室君が言った

「う〜ん、戦車砲で撃つてもいいが、それだと時間がかかりそうな気がするな……かと言って戻ったとしてもゾンビ共がいるからな……」

「いつそのこと民家を突き進んで行くつてのはどうでしょう？」

平野君が言った

「あんだ、バカア？そんな事しても大きな音を立てるだけだし、奴

らが来た時、瓦礫に挟まって動けませんでしたってオチになるって分かるでしょ？このデブちゃん」

高城嬢が言った

「それも一つの手だがな……美麻さん、ここら辺の情報はどんな感じ？」

「そうですね……小室さんの言った通りこの道以外には通る事はできなさそうです。例え、民家を突き進んだとしても、戦車ぐらいしか通れなさそうですね。他は瓦礫が邪魔して最悪の場合、横転しかねません」

美麻さんが言った

「だよな……だとしたらあの旅客機をどうするかだな……内側から爆破するか？」

「それが一番の得策なのではないか？幸い、爆薬は有るのだから」

小ノ牧隊長が言った

「ですね……また、二手に分かりますか？」

「そつだな。」

「それじゃあ、分けられるとしますか。今回は爆弾設置班と援護班に分かれよう。それに待機班もな」

俺がそう言つと皆が頷く

「じゃあ、爆破班から・・・俺、秀治、アリス少佐、小ノ牧隊長ですね。援護班は琥珀、篠田さん、綾瀬さん、メアリーですね。待機班は小室君のチームと勲さん、美麻さん、亀爺だな」

そう言うと皆が動く、爆破班はガントラックからC4などの爆薬を取り出し、援護班はそれぞれの武器を取り出していく

俺も自分の武器を取り出す、今回は室内なのでベネリM3とサブとしてMP5（サイレンサー付き）を取り出す、さらにサブとしてM92Fを取り出す

「おっ修、今回はベネリとMP5か」

秀治が言った

「ああ、室内戦ならこれで良いだろう。即座に反応が出来るからな」

「そうか。じゃあ、行くか？」

「ああ」

そう言って俺らは旅客機へと向かった

（旅客機ドア）

「うーん、ここは歪んで開きそうにないな・・・セムテックスは有るか？」

「ああ、持って来てるぞ」

そう言って秀治が渡す

「よいしょっと、これで良いだろう。爆破するぞ」

そう言って少し離れた所に有ったワゴン車の後ろに隠れた。そして、スイッチを押した。量は少ないため大きな音は出ないでボン！と言った一瞬の音で収まった。そして、ドアの方を見るとドアは木端微塵になっていた

「さっすが、セムテックスだな。よし、安全を確認した後、設置するぞ」

そう言って中に入って行く俺達だった

旅客機 爆破

俺らは床主第三小学校を目指していた。だが、その行く道でジャンボジェット機が行く手を阻むように横たわっていた。他の道を探したが無かったので仕方なく、爆破をして通れるようにして置く事にした

「ジャンボ搭乗口」

俺と秀治は壁に張り付いて皆の準備を待った

「いつでもいいぞ」

少佐が言った

「よし、フラッシュ・クリア」

そう言って持っていたスタングレネードを投げ入れる。こいつは非殺傷兵器だが、音がハンパない物なので聴覚が敏感になってるゾンビ共には有効な武器と言える

数秒後、中で一瞬光った。光が収まった後、俺と秀治は突入して中の安全を確認する。

「クリア」

俺が言った

「こっちもクリア」

秀治が言った。幸い、入口付近にはゾンビはいなかったようだ

その後、全員が中に入る

「よし、さつき言った通りに動くぞ。作戦開始」

少佐が言った

少佐らは二階の部分に設置に向かった

俺と秀治はまず、二手に分かれ入り口側と反対側にセムテックスやC4と言った爆薬を設置していく

「秀治、そっちは大丈夫か？」

「ああ、幅は戦車が通れるぐらいで良いよな？」

「ああ、そうだ。一気に爆発を起こしゃあ、壁ぐらいいけんだろ。」

俺が言った。

ついでに爆発が大きくなるようロケット弾も束ねて真ん中に置いてある。もちろん、C4を設置済みだ。

「よし、こっちはOKだな。少佐らの所に向かうか」

「お、把握」

そうやって銃を構えながら進んで行く、乗客が座るシートには客であるう死体が座っている。落ちた衝撃で死んでいるのだろう。

「まだ、この死に方の方が良かったかもしれないな……………」

秀治が言う

「確かにな…………得体の知れない化物に食われるよりはな…………
・だが、死ぬのはごめんだね」

俺が言った。その時

『ガタツ！』

奥から物音がした

「お客さんか……………」

俺が言った

物音がした先はカーテンが閉まっており中の様子を窺える事が出来ない。だが、確実に何かがかこつちに近づいている。現に音が大きくなってるからだ

「秀治、背後は任せたぞ」

「当たり前だよ。ここで、友達を失う訳にはいかないからね」

そうやって俺の背後に立つ秀治

「嬉しいね。俺も同じ事を思ってた所だ」

そう言っつてベネリの薬室にショットシエルを入れる

その瞬間、カーテンの向こうからゾンビ化したCAの姿が出てきた

「あれま、生前はきつと美人だったんだろつな……おやすみ」

そう言っつてショットガンをぶつ放す、それを喰らったゾンビは後ろに吹っ飛び動かなくなった。

「ウヘッえげつないね」

「しょうがないだろ？やらなきゃあやられるんだ。」

「ご尤も」

そう言っつた瞬間、さつきまで死体だったはずの客が突然、動き出した

「やっべ、秀治、後ろに下がんぞ。少佐達が昇った階段付近までな」

「把握」

そう言っつて銃口をゾンビ共に向けながら後退していく。一応、物音は立てないようにしたのだが……

「……」
「(よゝし、このまま下がって)『カラン……』しまった……」

落ちていた空き缶にぶつかったのだろう。近くでカランカランと音を出しながら回る空き缶が目に入る

その瞬間、ゾンビ共はこっちに視線を向けた

「秀治！撃て！」

そう言っただけの弾薬を奴らにお見舞いしていく。ショットガンは射程距離は短いが近くにいた奴なら最悪、腕とか吹っ飛んだりするほどの威力がある。現に一番近くにいた奴の頭が木端微塵になった

秀治の方にもゾンビ共は向かっているが、それに負けじと持っているレミントンM1100をぶっ放している。それから後方に下がりながらショットガンを撃っているが、数は奴らの方が上だ。

「くそ！」

そう言っただけ俺はMP5に持ち替える。こっちはショットガンほど威力は高くないので正確に奴らの頭に銃弾を叩きこんで行く。秀治もMP40に持ち替えている

しばらく、奴らと交戦していると

「修君！」

上の階に行っていた少佐達が戻ってきた

「少佐、設置は完了しましたか！？」

俺が言った

「ああ！上の方は設置が完了してるし奴らの掃討も完了してる！さっさとここを出るぞ！」

「了解です！秀治、お前から先に行け！」

「把握！」

そう言って秀治が離脱する。

「少佐、先に行って下さい！すぐに追いつきますから！」

「分かった！」

そう言って出口の方に向かう少佐達

「よし、俺も行くか！」

そう言ってダッシュで出口に向かう。後ろではゾンビ共が呻きながらこっちに向かって来ていた

く搭乗口く

「よし、出たぞ！皆、走れ！」

俺が言った瞬間、皆はダッシュで飛行機を離れて行く。それを見張らかつて、ポケットから起爆装置を取り出す

「よし、システム良好、ここで切れるなよ……そんなオチは見

たくないが……」

そう言つて俺も走りだす、その後ろではゾンビ共が外に出ようと揉みくちやになりながらも手を伸ばしていた

「あばよ。さまよえる子羊達」

そう言つてスイッチを押す

その瞬間、巨大な爆発が機内で起こり、その場にいたゾンビ共は跡かたも無く吹き飛んで行く、同時に旅客機の壁が崩れ、それと同時に火災が発生する。爆発を逃れたゾンビがいるが火だるまになってその辺をうろついていた。てか、熱くないのかね？

「ふいゝまいったまいった。」

俺は歩きながらタバコに火を付ける。その先では皆が待つていた

「お帰りなさいませ、修様」

琥珀がお辞儀をする

「おう、ただいま」

「お帰りなさい。修さん」

今度は美麻さんだ

「ああ」

「作戦成功だな。修」

秀治が飛行機を見ながら言う

「そうだな。これで、小学校に行ける」

タバコを吸いながら言った

「よし！全員乗車だ！修君、エイプラムズを頼む」

少佐が言った

「了解つす」

そう言ってエイプラムズに乗り込む

「エンジン始動」

そう言ってエンジンを掛ける。鋼鉄の馬車がうねりを上げる

「じゃあ、まずは自分が行くんで少々、お待ちを、通過できたら連絡を入れますんで」

そう言って無線を切る。同時にエイプラムズを動かす

「修さん、火の中に入ったんでも大丈夫なんですか？」

同乗者の美麻さんが言った

「ああ、元々火の中でも大丈夫なように設計されてるんだ。中に入

る事はまず無いよ。それにクーラーのおかげで熱さも免れるように設計されてる」

俺が説明した。それと同時に飛行機の中に突っ込む、壁は完全に破壊で来たが、骨組みがまだ残っていた。しかし、熱によって歪んでいるようだ

「こいつは一回ばらした方がいいな……」

俺は運転中に言った。そして、無事に向こう側に着く事が出来た

「よし、美麻さん、砲撃を行うから弾を装填してくれるかい？」

「はい、分かりました」

そう言って砲弾を重たそうに持ちながら装填してくれた。元々、女子が扱うような代物ではないと言うに

「そ、装填できましたよ」

疲れたように言う美麻さん

「サンキュー」

そう言って砲台を操作する。目標は飛行機の骨組みだ

「ほらよつと！」

そう言ってスイッチを押す、車体が大きく揺れた。数秒後、飛行機から爆発が起き、音を立てながら崩れて行った。

「よし、これで、安全に行けるだろう。少佐、もう大丈夫ですよ。」

無線で連絡を入れる

向こうから了解と言つ声が聞こえた

こうして、無事に学校に向かう事が出来た俺達であった

床主第三小学校

俺達は旅客機を爆破し、そのまま小学校の方に向かった。先頭はX M102を順に走っている。もちろん、途中、ゾンビ共がいたが、踏みつぶしたりして行った。

「いや、戦車が手に入って本当に良かったぜ。」

俺が言った

「そうですね。無駄に弾を使わなくて済みますしね。」

同乗者の美麻さんが言った

「ああ、それにしても小学校の方は大丈夫かね？着いた時全員がゾンビでした。ってオチは見たくないが……」

「そうですね。子供もいますしやっぱり、難しいですよね。」

美麻さんの言う通りだ。奴らの特性は音に反応するそれを分かっている限り、全滅は必至だ。特に感情に任せて行動してしまう小学生ならなおさらだ……

「とにかく、行ってみるしかないな……」

そう言ってどんどん進んで行く俺達だった

く小学校付近く

俺達はついに小学校付近にまでやってきた。ここも他と同じく事故車が電柱にぶつかつたり、大型車両が家に突っ込んでいたり悲惨だった

「やっぱり、ひでえな……」

秀治が言う

「今の所、どこも安全って訳じゃあ無いしな。ここら辺も相当な状況だったんだろうよ」

俺が言う

「さて、小室君、小学校はあれかな？」

そう言つて指さす、先には小学校らしき大型建造物が建っており、大きな時計が今も時を刻んでいる。

「はい、あれが床主第三小学校です。僕と麗と沙耶が通っていた母校です。」

小室君が答える

「ほう、三人もこの学校の出なのか」

「ええ、と言う事は……」

「ああ、俺もこの学校の出身だ。いや、こんな形で後輩と会えるとはな。偶然も不思議なもんだ」

俺が言った

「さて、思い出話も良いが……そろそろ中に入るとするか？」

小ノ牧隊長が言った

「そうですね。皆、覚悟は良いな？」

「元より承知だぜ！」

秀治が言う

「私ものです！」

美麻さんが言う

「僕はどんな形でもお袋に会う」

小室君が言う

「お父さん、待っててね」

宮本さんが言う

「正、無事でな」

勲さんが言う

「さあ、行くとしますか……！」

そう言っつて全員、車両に乗り込む、同時に動かしてしまう

「む、門が開いてるな……まあいい、奴らが攻めた時用の防壁として役立ってもらおう」

そう言っつて小学校内に入っつて行く、校庭にはいくつかの死体があったが、どれも頭部が無くなっていた。

「修君、こいつはスナイパーライフルでやられてるな……」
口径は50口径だ。」

少佐が調べながら言う

「て言う事はバレットとかの対物ライフルですかね？となると軍関係者が……」

平野君が顎に手を乗せながら言う

「そつとも限らないぞ」

小ノ牧隊長が言う

「どつういふことですか？」

宮本さんが言っつた

「いや、これは私の憶測だが、もしかしたら正気を失つた者がバレットを手に入れてぶつ放しているかもしれんしな。実際、我々自衛隊に出された任務は主要施設の確保だつたからな。銃を手に入れることなど容易い事だ。」

隊長が説明する

「しかし、隊長、ここら辺に重要な施設なんて有りましたっけ？」

篠田さんが言う

「有るじゃないか。政府専用の秘密倉庫が……港に」

「でも、倉庫だけなら別に襲われても制圧できるんじゃないですか？　なんで、わざわざ……」

秀治が言う

「秀治君の言う事は最もだ。だがな、この床主市に有る政府専用の秘密倉庫は我々、自衛隊にとっても非常に重要な物なんだ。それこそ、最高機密で守られてる奴がな。これは、一部の上級士官、防衛大臣しか知らない事だ。」

「なんですか？　その最高機密って……」

高城さんが言う

「まあ、話した所で問題はあるまい。その倉庫には戦争で役に立つ兵器が満載してある。当然、倉庫付近には兵士が巡回しており、中に入ったとしても一見では分からん。だが、地下に続くエレベーターを降りると、そこにはこれでもかって位の銃器や兵器が置かれている。戦争でもしたら5年はできるほどだ。」

「でも……そんなに置いておいて気づかれないんですか？　他の

国とか……」

平野君が言う

「もちろん、それに備えてコンクリートに特殊な鉄板を仕掛けてある。衛星から赤外線で探索されたとしてもその下は映らないようになってる。因みにこの秘密倉庫は全国の主要な港に存在している。」

「でも、そんなに揃えてどうするんですか？日本は戦争放棄しているのに……」

美麻さんが言う

「まあ、仮説的な状況だがもし、日本が占領された際、その秘密倉庫から通じて敵軍を包囲できるって寸法だ。また、いくつかは地下通路が通っていて奇襲戦法も用いているそうだ」

隊長が説明する

「まあ、倉庫自体のある場所が自衛隊の管轄だからな。早々に入る事は出来んだろうよ。」

「まあ、それはさておき、小室君、このまま中に入るか？」

「はい、一刻も早くお袋の安否を確認したいです」

「分かった。それじゃあ、中に入ろう」

そう言って俺達は中に入って行く

〈小学校の中〉

学校の中も悲惨だった。教室は血の海とかし、壁には血の飛沫が飛んでその時の現状を表している。

「ウヘツ……中も最悪だな……」

秀治が言う

「確かにな。ここも避難場所として使われていたようだが……
・時すでに遅しのようだな……」

俺が言った

壁にはいろんな写真と共に手紙が備えられていた。

「でも、他の市民はどこに行ったんでしょうね？」

綾瀬さんが言う

「大方、ゾンビにでもなったんでしょう？表の奴らがそうだったんじゃない？」

篠田さんが言う

「まあ、搜索して見る事には変わりないけど……よし、ここからは分かれて動こう。」

俺が言うと皆が黙って頷く

その後、どこを搜索するか決めて分かれた。集合場所は校庭に止め
てある車両だ。俺はアリス少佐、美麻さん、琥珀と共に体育館に向
かっていた

「しかし、妙ですね………」

美麻さんが言う

「何がだい？」

アリス少佐が言う

「いえ、ここが襲われたとしても、全滅は無いんじゃないですか？
少なくとも少数の人間は生きてるはずだと思うんですけど………」

「美麻さんの言う通りだ。もし、奴らにここを襲われたとしても冷
静な状況判断ができる奴はいたはずだ。だからこそ、探してみない
と分かんないな。まあ、俺としては小室君の母親と宮本さんの両親
が見つけれればいいが………」

「その他は気にしないんですね。修様は」

琥珀が言う

「当たり前だろ？知っている奴の関係者なら助けるが、赤の他人に
まで助けるような肝は持つじゃない。助けを求められれば手を差
し伸べるが、その後の事まで面倒は見切れん。」

「案外、えげつないですね。修さんは」

美麻さんが言う

「そうじゃないと自分が生き残れないしな。中には騙す奴もいるからな・・・早々に人を信じる事なぞ出来ん。ましてやこんな世の中なんだ、人間の本性が現れる。俺はゾンビ共より人間の方が怖いと思ってるしな」

「修君の言う通りだな。ゾンビなら理性などない。逆に人間だと信用していた人間が突然裏切ると言った行動に走らない事は絶対になり」

アリス少佐が言う

「・・・お客様の様ですよ。修様」

そう言って琥珀はジャッカルを出す、いつも思うけど、どこに隠し持ってるんだ？

「おやおや、ずいぶん年配のゾンビだな・・・この学校の教頭か？」

そこには一体のゾンビがいた。服装からこの学校の職員なのだろう

『アアアアア・・・』

ゾンビは俺達には気づいていないみたいだ。その辺をうろついている

「俺がやる・・・安らかに成仏してくれ」

そう言ってモシナガンで頭部を狙撃する。教頭ゾンビはそのまま頭部を貫かれその場に倒れた

「相変わらず、いい腕だな」

少佐が言う

「ありがとうございます。さて、先に進むとしますか……」

そう言って俺達は体育館に向かった

人がいないと学校って静かになるよね

俺らは無事に小学校に辿り着いた。しかし、中に生存者の気配はな
くいるのは数体のゾンビだけだった。そんなこんなで手分けして学
校を搜索することになった

（廊下）

「さてさて、生存者はどこにいるのかね」

俺が言った

「一か所に集まってるのではないでしょう。例の攻撃でゾンビ共
に気づかれやすい環境になってしまいましたし、」

琥珀が言う

「だが、一般人などすぐに業を煮やして動いてしまふ。特に自分勝
手な人間ほどな……」

少佐が言った

「でも、やっぱり気配が全くないってのはおかしくないですか？見
つけるのは時間の問題としても……」

美麻さんが言う

「そうなんだよね。問題はそこだ。生存者は外から来たやつように
知らせるもんだ。自分たちがここにいていう証拠をな。だが、

探してもそれらしき物が全くない」

そう言つてあたりの壁を見まわす、壁には血飛沫の跡があり、ここ
で起きたことが鮮明に映っている。もちろん、ゾンビ共の死体もあ
つた

「その暇がなかったのではないか？あの光が何なのかも分からず、
音を出してしまった。そして、その周辺からゾンビ共が集まつてき
て大惨事に発展した」

「それが妥当かもしれないね……生きてりゃあいいけど
な……」

そう言いつつ俺らは先へと進んで行つた

（体育館前）

俺らは校舎を抜けてそのまま渡り廊下を進んで体育館前にやってき
た。体育館も扉が閉まつており中の様子は分らなかった

「これでは、中の様子が分かりませんね……」

琥珀が言う

「確かにな……窓が無いってのも不思議だけだな」

そう、体育館の壁には窓が一切無いのだ。普通なら換気などのため
に付いているはずなのに……

「不思議だな……これは完璧な避難所……というよりは、

牢獄に近いな……逃げ出さないように設計してあるみたいだ」

少佐が言う

「ですね……こりゃあ、何か裏があるかもな」

そう言っつて扉を見る

「しかし、開かないとなるとここは、後回しにするか？」

少佐が言う

「そうですね……いや、琥珀、爆薬あるか？」

「はい、どうぞ」

そう言っつて琥珀はどこから出したのか分からないが、C4爆弾を出してきた

「琥珀さん、どこにしまってたんですか……それと、修正案、何を？」

美麻さんが言う

「簡単な事……爆破してしまえばいいのさ」

そう言っつて爆弾を扉の間に押し込むように設置した

「じゃあ、爆破しますよー3、2、1」

そうやって手元のリモコンを操作する。数秒後爆発が起きた

「よし、どうなった？」

そうやって扉の方を見る。扉は形が変形して使い物にならなくなっ
てしまった

「よし、これで……ウツ!？」

少佐が鼻を押さえる

「どうしました？アリスさん」

美麻さんが言う

「これは……酷い悪臭だ。」

そうやって俺は中の方を覗いてみる

「いつは……ひでえな……」

「ええ、ここにも修様が言った精神異常者がいるかもしれませ
んね」

琥珀が反対側から言う

体育館に有ったのはたくさんのゾンビが逆さまに吊るされていた。
まるで、処刑後の見世物のような……

「ウツウエツ!!……」

美麻さんは吐いてしまった

「大丈夫かい？美麻さん」

俺が言った

「はい・・・大丈夫です・・・でも、これは何なんですか？」

「分からんよ。もしかしたら、ヤバい事が起きたのかもしれない・・・」

俺は中の様子を探りながら言う

中にいるゾンビ達は死んだ後、吊るされたようだ。しかも、生存者がいる気配がない

「どうする？調べるか？」

少佐が言う

「ええ、俺と琥珀で調べるんで二人は待っていてもらえませんか？」

「分かった・・・何かあればすぐに逃げて来い。出口は確保しておく」

「了解です。琥珀、行くぞ」

「はい」

そうやって俺と琥珀は中に入って行く

（体育館内）

「中もつとひでえな……………」

俺はM4を構えながら進んで行く、琥珀はジャツカルを構えながら進む

「このやり方は……………ベトナム戦争で用いられた処刑方ですね……………」

「分かるのか？」

「はい、本を読んだだけですけど、アメリカ軍の図書館にそういう本があったんです」

「キチガイな本もあるんだな……………」

「まあ、そこまで読んだ訳じゃないんですけどね。しかし、この方法を知っているとなると相当なSですかね？」

「どうだろう……………分からんな」

半分は居住スペースになっていたのだろう避難用のテントや大きな家具が置かれていた。もう半分にはさっきの死体が吊るされている

「こここの避難民はどこに行ったんだ？そう簡単に逃げられそうにないと思うが……………」

「分かりません。もしかしたら別の場所で隠れているのかもしれないよ?」

「だいたいが………ん?」

「どうしました?」

「いや………あそこに人が立ってるからさ………」

そう言っ指さす

その先には一人の軍服姿の人間が立っていた

「おや?……一般市民の方ですか?」

軍服姿の男性が言った

「ええ、ここに避難している人はどこにいったのかなー?って、後、自衛隊の方………ですよね」

「ええ………第五連隊所属の者です………」

男はそう言っ振り返る

「……!」

俺らは驚いた。

男の迷彩服は血で染められ、手には89式の銃剣付きが握りしめられている。反対の手には先程殺したであろうゾンビが捕まっていた

「琥珀……臨戦態勢だ……あの人間崩れを排除するぞ……」

そう言つてM4を構える

「元より承知です」

そう言つた瞬間、奴の89が火を吹く、もちろん、俺と琥珀は二手に分かれた

「おら!!こつちだ!」

そう言つて俺が撃つた……が

「何!？」

男は弾丸を喰らわずに避けたのだ

「ククク……軍人である私にそんな弾が当たると思ひですか？」

男はニヤリと笑う

「琥珀!」

「はい!!てりゃああああ!!!!!!」

そう言つてジャッカルをぶつ放す、対物ライフルであるが機関銃としての役割もある為、連射が可能なのだ

「甘い!……!」

そう言って背中に背負っていた大刀で銃弾を弾く

「おいおい、防御も強いって訳か……なら……」

そう言って上に向けて発砲する。すると、吊るしていたゾンビの紐に当たり、切れて落下していく、男は大刀で切って行く

「クソ！小賢しい！！」

「そらよ！！」

そう言って今度は奴の方に向けて撃った。だが、移動しながらなので当たったのは足だった

「グッ……何のこれしき……日本男児の底力を見せてやる！！」

そう言って今度は後ろの方に置いてあったミニガンを取り出す

「おいおい……危険極まりないな……」

「オラアア！！！！」

そう言ってミニガンをぶっ放す、毎分二千発以上もの弾が俺達に襲う

「あぶね！！」

「ハハハハ！！！！どうだ！！！！大人しくミンチにされる！！！！」

「やなこつた!!」

そう言いつつ避けて行く

数分、避けていたがついに奴の弾が無くなった

「今だ!!!!」

そう言つて俺と琥珀が同時に突っ込む

「うおおおお!!!!!!!!!!」

「てりゃああああ!!!!!!!!!!」

二人の銃弾が一気に男の体に刻まれていく

「ぐあ!つぐつぎゃ!!!!」

男はしばらくの間、立っていたがついに倒れる

「ハアハア……今度ばかりはヤバかったぜ……」

「はい……私でもこんな相手をした事ありません」

琥珀も肩で息をしながら言った

「うつく……私は……負けたのか?」

男が言った

「ああ、あなたの負けだぜ」

「そうか……これで、家族の元に行けるな……すまない……胸ポケットに……写真がある……取ってくれないか？」

俺は少し考えたが、無言で男の胸ポケットから写真を取り出す、写真は血でべつとりと付いていた

「……家族のか？」

「ああ……死ぬ間に電話をしたんだ……向こうからは……断末魔……正直、切りたかった……だが、切れなかった……」

男は苦しそうに言う

「こんな俺でも……家族に会えるかな？」

「会えるさ……きつとな」

「そう……か……ありがとう」

そう言って男は息を引き取った

「琥珀……こいつは、埋葬するぞ」

「……はい」

そう言って俺らは手ごろなシートで男を包み、一緒に外に運び出す、

美麻さんと少佐は驚いたようだが、事情を話すと納得したようだ

その後、近くの広場に男を埋葬し黙祷した

探索（前書き）

更新が遅れて申し訳ない！！

探索

俺らは体育館で異常者だった自衛官を近くの大きな木の下に埋葬した。その後は再び、校舎に入り生存者を捜す事にしたのだ

（校舎内）

「あーあーこちらは修、小ノ牧隊長聞こえますか？」

俺は無線機で声を掛けた

「ああ、感度良好だ。どうした？」

小ノ牧隊長が答える

「実は、体育館に行ったんですが、避難民はいなかったです。一応痕跡らしきものは有りましたけど……」

「なるほど、と言う事は校舎の方に逃げて行ったという事かね？」

「ええ、可能性としては……俺らは下の階を探索します」

「分かった。では、私らは上を探索する。合流はどうする？」

「玄関前をお願いします」

「了解した」

そう言って俺は無線を切る

「さて、俺らも行動するのでしょうか」

「じゃあ、修君私と琥珀さんとで、二階を搜索しよう。」

少佐が言った

「分かりました。集合場所は玄関前で」

「了解」

そう言つて二人は二階へと昇つて行く

「じゃあ、俺らもいくとしますか。美麻さん」

「はい」

そう言つて俺達は先へと進んで行つた

く一階 廊下

「それにしても、どこにいるんだらうな」

俺が言った

「そうですね……私の推測ですけど、保健室とか理科室の可能性は？」

美麻さんが言った

「保健室は分かるけど、なんで理科室？」

「理科室なら薬品がありますし、薬品に詳しい人がいれば武器なんかは作れると思うんですけど……」

「なるほどな……」

そう言いつつ手短な教室を一つ一つ探索していく、空になった教室もあれば血まみれの酷い惨状となった教室もあった

「おっここは保健室か……」

そう言っつてドアに手を掛ける

「ガチャガチャ」

「あら？開かないな……」

「と言っ事は……」

「中に誰かいるって事か……」

俺はドアに耳を当てて中の様子を探る事にした

「……」

「どうですか？」

「いんや、なんも聞こえない。しゃあない、強制的に開けるとしますか」

そう言ってショットガンを取り出しドアの金具部分を銃撃する

「せいやー！」

前蹴りでドアを蹴った。ドアはそのまま重力に任せ倒れる

『アアアアアア……』

中にいたのはゾンビだった

「ワオ……これでも食らいな」

そう言って頭に向かってショットガンを撃つ

ショットガンは近距離武器なので近くで食らったら悲惨な事になる。
現にゾンビの脳みそが保健室にぶちまけられた

「あゝあ、汚ねえ花火だぜ……」

俺が言った

「他にいませんよね？」

美麻さんが言う

「ああ、死体が二個転がってるだけだな」

一つはゾンビの物、もう一つは犠牲になった避難民であろう死体だった。喉を食い千切られていたのですでに事切れていた

「遅かったてことですね……」

「ああ……次に行こう……」

そう言って保健室を後にする

「さてさて……ん？」

「どうしました？修さん」

「いや、あそこの階段、地下に続いてないか？」

そう言って指さす、さした先には階段と踊り場があったが、地下へと続く階段があったのだ

「あっ本当ですね。行ってみますか？」

「ああ、何も無かったら上がればいい」

そう言って俺らは地下に入った

く地下く

「思ったよりもきれいですね……」

美麻さんが言う

「ああ、最近まで使われていたって感じだな……」

電気は一応、点いていたのだが薄暗い感じだったのでフラッシュユニットを点けて慎重に進んで行った。

「おおう、こんなに部屋があるとはな」

曲がり角を曲がるとまっすぐな廊下が続いていた。そして、両方に扉が配置されていた

「こりゃあ、骨が折れますね……」

「ああ、美麻さんは左側を頼む、俺は右側に行く」

「分かりました。気をつけて下さいね」

「ああ、そつちもな」

そう言つて美麻さんは部屋に入つて行く、それを見届けて俺も最初の部屋に入った

「おおう、展覧会かなんかですか？ここは……」

最初に入った部屋は所狭しに武器が置かれていた

「おお……アメリカに有った武器博物館とはまた違った感じだな……」

そう言いつつ奥へと歩いていく

「ん？こいつは……」

俺は一つの作品に目が止まった。そこには豪華な額縁に二丁のルガーP-08が展示されていた。色は黄金色だ

ルガーP-08は主に旧ドイツ軍の将校や砲兵などが携帯していた。構造が複雑で高価だったが、第一次世界大戦、第二次世界大戦に旧ドイツ軍によって使用され、戦後も70年代まではワルサーP38やコルトガバメントと並んで多く使用された事から、古い映画などでは良く見つけることが出来る。

俺は試しに手に取ってみる

「おお、こいつはしっくりくるな……………」

そう言っているんな形に構える

「撃てんのかな？」

そう言って試しにマガジンを突っ込む、そして引き金を引く……………
・が

「やっぱ駄目だな」

銃自体はロックが掛かっており銃弾は発射できないのだった

「ロックを外すしかないか……………ん？あそこに有るのは……………
・作業台か……………」

奥の方に作業台がぼつんと置かれていた。その周りには廃棄された部品が山ほど置かれていた

「……………良い事思いついた」

そう言つて作業台の方に歩いていく

（数分後）

「よし！完成！」

そう言つてルガーを掲げる

構造自体が複雑であつたがなんとか、撃てる状態にした。これも修
のスキルの一つである。

『アアアアア』

その時、一体のゾンビがどこからともなく現れる

「丁度いい、実験体になつてもらおう」

そう言つてルガーを構える。そして、二丁のルガーから弾が発射さ
れる。弾はまっすぐ進み一発は心臓にもう一発は額に命中した

ゾンビはそのまま事切れる

「うっし、完璧だな。」

そう言つてクルクルと回しながらホルスターに仕舞う

因みに修独自の改造で強化弾も撃てるようにしてある為、耐久度は
ハンパなく強くなっている

「さて、他にも何かあるかね……」

そう言って部屋の中を物色していく俺だった

生存者 発見

俺らは小学校で生存者の搜索をしていた。そんな中、俺と美麻さんは地下室を発見し中を探索している途中だった

「地下」

「それにしても、いないな」

「そうですね」

俺と美麻さんが言う

あれから各部屋を搜索したのだが、どこにも生存者はいなかった。途中で美麻さんと合流し廊下を進んで行く

「残るはあの部屋だけか……」

そう言っただけに見た先には頑丈そうな核シェルターがあった

「これって核シェルターですよね？」

美麻さんが言う

「ああ、しっかしなんでこんながあるんだ？作るにしても相当な額が掛かると思うが……」

「とりあえず、開けてみますか？」

「ああ、と言いたい所だが、こいつはコンピュータ制御されてるな。パソコン自体も対EMP仕様だ」

シエルトアの横に壁かけのパソコンが付いていた。しかもしっかりと動作している。

「美麻さん、開けられそう?」

「分からないですね。とにかくやってみます。」

そう言ってキーボードを出したかと思つと目にも止まらぬ速さで打ち込んで行く

「速え〜家の専門スタッフより速いぜ」

俺はしばらく見ていた

〜数分後〜

「ピピッ」

「ふう、修さん開きましたよ」

笑顔で言う美麻さん

「さっすが、さっそく開けてくれ」

「分かりました。」

そう言ってさらにキーボードに打ち込んで行く

すると、シエルターの扉が大きな音を立てて開いていく

「よし、先行するから後から来てくれ」

そう言っつて前回入手したゴールドルガーを取り出し、胸ポケットに小型のLEDライトを付けた

「分かりました。気を付けて下さい」

そう言っつて美麻さんも護身用ではあるが機関拳銃を持つ

「シエルター内」

シエルターの中も電気が生きていた。

俺は慎重に中へと進んで行く

「よし、クリア「手を上げる」・・・ワオ」

俺が言いきる前に後ろを取られたようだ

「修さん！」

美麻さんが叫ぶ

「大丈夫だよ。で？あんたは何者だい？」

「それはこっちの台詞だ。私は警察官だ。」

「と言うと小学校に来ていた警察官かい？娘さんが来てるのは知ってるのかい？」

「何！？それは本当か！？」

警察官と名乗る男が言った

「ええ、その反応から察するに宮本正さんですか？」

「ああ、そつだ」

「小室君のチームが現在、小学校内であなた達を探していますよ。会いに行つてあげてはどうですか？」

「うむ……しかし……」

「ああ、体育館にいた自衛隊なら排除しましたよ。それに学校内はゾンビ共はいません」

「すべて君達がやったのか？」

「ええ、ですから会いに行つてあげてはどうかと申し出たのですよ」

「すまない……」

「いって事です。それより連絡を入れたいんで無線機を出してもいいですか？」

「あ……ああ」

了承を得たのでバックから無線機を取りだす

「そついえば、他の生存者は？」

俺が言った

「ああ、奥の部屋に隠してあるよ。入口付近じゃあ不安だったからな」

「なるほど……あーあーこちら修、小ノ牧さん聞こえますかー？」

「ああ、感度良好だ。どうした？」

無線機から小ノ牧さんの声が聞こえる。他にも銃声が聞こえた

「あら？お取り込み中でした？」

「いいや、今、終わった所さ。それで？」

「ああ、生存者を発見しましたよ。地下の部屋で集まっています」

「ほう。それは朗報だな。さっそく向かうとするよ」

「ああ、それと、アリス少佐らも一緒に連れて来てくれませんか？途中で別行動したので」

「了解、では、後でな」

そう言って無線を切る

「どうだ？」

正さんが言う

「大丈夫ですよ。すぐにこちらに来ますから」

「そうか……安心した」

そう言って近くの椅子に座りこむ正さん

数分後、小ノ牧さんらのチームと小室君のチームがやってきたようだ

「お父さん！お母さん！」

宮本が入って来る

「麗！！」「麗ちゃん！！」

正さんと香苗さんが迎える

香苗さんは正さんの妻だ

「良かった……生きてて良かった……」

宮本は涙を流しながら言う

「お袋！」

小室君も無事、母親に会えたようだ

「さて、目的は達したな……」

俺は部屋の隅でタバコをふかす

「ああ、こつからは俺達の番だな」

「ああ、遠回りしちまったが、大丈夫かね？秀治の親」

「まあ、あの二人はしつこく生きるタイプだからな。大丈夫だと思うぜ。それに危険だって分かったら船で逃げて沖合で停泊してるかもな」

「そうか……」

「修さん、本当にありがとうございます！」

小室君が言った

「よせやい。俺はただ単に手伝っただけだ。自分の力で会えたもんなんだから素直に喜びな」

「でも、修さんがいなかったら僕たちはさらに時間を掛けていたかもしれない。それでも、僕たちは修さんのおかげだと思ってます」

小室君が言う

「嬉しい事を言ってくれるね？これからどうするんだい？」

「小ノ牧さんが言うには自衛隊が助けに来るって言ってるんです。」

「おろ？そんなんですか？小ノ牧さん」

俺が聞いた

「ああ、無線で適当に周波数を合わせていたら偶々繋がってな。輸送艦のおおすみがおおすみ沖合に停泊しているそうさ。ヘリが迎えに来る」

「そうですか……」

「因みに私らも本隊に戻されることになった。……本当は戻りたくないがね」

愚痴を言う小ノ牧さん

「それは何ですか？」

秀治が言った

「簡単だよ。君たちと居た方が楽しく過ごせる。それだけだ」

「だったら隊長、私達だけでも逃げませんか？」

綾瀬さんたら大胆な事を言う

「こら、綾瀬、何言ってるのよ」

そう言っつて拳骨を喰らわす訓子さん

「いった〜い！」

「理由を教えて貰えないか？綾瀬」

小ノ牧さんが言う

「簡単ですよ〜戻りたくないなら自由に行けばいい。それだけのことでですよ〜何より、私が秀治君と離れたくないんですけど〜」

そう言っつて秀治の腕に絡む綾瀬さん

マジで羨ましいな……………もう、恋人宣言してるし……………

「あんだね……………」

訓子さんは呆れながら言う

「はっはっはっはっは！！！！確かに言う通りだな！！！！いやはや、本取られたな」

笑いながら言う小ノ牧さん

「よし、私も自衛隊から抜け出すとするか！！」

「隊長！？」

訓子さんが驚く

「綾瀬の言う通りだ。自分の意思で決めなければこの先、やっていけない。師匠の言葉を思い出したよ。」

「で？訓子はどつするの？」

綾瀬さんが言う

「どつって……はあく分りましたよ。付いていきますよ。」

「と言う訳だ。修君、これからもよろしく頼むよ」

「ええ、こちらこそ」

そう言っ互いに握手をする

「さて、決まった所で外に出るとしますか。」

そう言っ俺らは外に向かう

く外く

「それで、自衛隊は何時頃来る予定ですか？」

「速くても明朝と言われたな」

「なら、奴らがここに来ないように見張りでもしますか？」

「そうだな。それが、我々にできる仕事だな」

そう言っ俺らは動き出す、俺と秀治と小ノ牧さんは正門に向かい門を閉じた、門の前にはハンヴィーを置き機銃陣地を作った。その後ろにはangleとXM-102を停車させ、最終防衛線として

置いた。その前には机などを置き機銃が置けるようにしてある。もちろん、小学校の前には有る道路にはブービートラップが仕掛けてあり、奴らが来た時には数十体を巻き込めるようにしてある

「さて、こんぐらいかな。秀治、そっちは良いか？」

俺が言った

「ああ、大丈夫だ。このまま見張っちまおうぜ」

「了解」

そう言って俺らは見張りをすることになった

深夜の防衛

俺らは自衛隊の救助が来るまで、正さん達の護衛を行う事になった。しかし、自衛隊の救助は明朝・・・つまり、次の朝日までである。それまで、俺達は周りを警戒する事にした

〔小学校正門前〕

「修」

秀治がやってきた

「おう、裏はどうだった？」

俺が言った

「大丈夫だ。ゾンビ共はいなかったが、一応、封鎖はしておいた。簡単に破れないようにしてある。」

そう言って親指を立てる

「そうか。じゃあ、こっただけ気にしていればいいな」

「ああ、俺は東側の壁を見張っておくよ。体育倉庫が良い見張り台になる」

「そうか。どうせ、綾瀬さんとだろ？」

俺はニヤニヤしながら言った

「か、薫さんは素敵な人だ／＼命を掛けても良い」

秀治は赤くしながら言った

「お〜お〜熱い熱い」

「そう言う修だって美麻さんと一緒だろ？」

「ああ、そうや」

俺はしれっと答える

「なんか悔しいな……………まあいいや、じゃあな」

「ああ」

そう言うって秀治は倉庫の方へと向かった

「修さん」

同時に美麻さんがやってきた

「応、こっちだぜ〜」

そう言うってハンヴィーの上から手を振る。美麻さんは屋根に昇った

「よいしょつと……………修さん、夜食を持ってきましたよ」

そう言うってバスケットの中からサンドイッチを出す

「お〜サンドイッチか〜懐かしいな〜もしかして、美麻さんの手作り？」

「はい、きつと喜んでもらえるだろうって琥珀さんが」

そう言って渡してくる。

全く、あのおせっかい野郎が………まあ、今回は甘えとしますかね

「頂きま〜す」

そう言ってサンドイッチを頬張る

「ど……どうですか？」

不安そうに言う美麻さん

「うん、おいしいよ。やっぱり手作りはいいね！」

そう言って親指を立てる俺

「そ……そうですか／＼良かった……」

美麻さんもそう言ってサンドイッチを頬張る

静かな時間が二人を支配していく

「じつそうさま。うまかったよ」

「はい、ありがとうございます……修さん」

「ん？どうした？」

「私達、これからどうなるんですかね……秀治さんの両親を探した後って……私、不安なんです。これから先、世界がどんな風が変わって行っちゃうのか……もし、ずっとこのままだったら……」

不安そうな顔で言う美麻さん

「さあな……正直な所、この騒動は終わりが見えないのが現状だしな。だけど、人間は失敗を繰り返して成長するんだ。今までの歴史がそれを示している。だからこそ、俺達は生きなきゃいけない。どんな未来が待っているような。例え、地獄の先でも……」

「修さん……」

「大丈夫だ。美麻さんは俺が守る。絶対に」

そう言って顔を近づける

「んっ」

「んっ」

二人の唇が交わる。甘く、静かな時間が過ぎて行く

「修さん／＼私、どこまでも付いていきます」

「ああ、任せてくれ」

そう言った瞬間だった。

「ピピピピピ！……！……！」

「！……？」

警戒用に張っていたトラップが作動したようだ

「修……！」

無線から秀治の音がする

「どうした……？」

「こっちにゾンビ共がやってくるぜ！数は五十……！」

「分かった！そっちはそっちで対処しろ！こっちのも奴らが現れた
「！」

「了解……！」

そう言って無線を切る

「修さん……」

美麻さんが不安そうな顔で言う

「大丈夫だ。さっきも言っただろ？何があっても守るって、美麻さんはパソコンで周囲の状況を調べてくれ。何か分かり次第、報告を」

そう言っただ俺はハンヴィーの中からバレットXM110を取り出す

このバレットは最新型で今までのバレットよりも高い威力を持っている。一部の噂では、戦車をも破壊するほどの能力を秘めていると言われている。弾は18.5mm x 99弾である。これは新開発の専用の弾薬である

全長も今までのより長くなっており、どでかさが一目で分かる。俺は屋根の上で伏せ撃ちの状態に入った。因みに美麻さんは車両の中に入っている

「こちら、修、少佐、聞こえますか？」

俺は無線で言った

「こちら、アリスだ。奴らが来たのか？」

「ええ、東と南にそれぞれ、戦える人を向かわせてくれませんか？」

「了解だ。西の方は来てないようだな」

「はい、琥珀から何の連絡も来ないんで大丈夫かと」

「よし、今から向かわせる。数分待っていてくれ」

そう言って無線を切る

〜数分後〜

「修君！」

やって来たのは小ノ牧さんだった。他にも数名やって来ている

「小ノ牧さん、こっちです」

「どうだ？状況は」

隊長が言う

「まだ、姿を確認できていません。暗視装置で探してはいますが・・・」

「そうか。今の内に配備しておこう」

「ええ、お願いします」

そう言って隊長はそれぞれに指示を出す

「修さん」

「ん？おお、平野君か」

話しかけてきたのは平野君だった

「俺も手伝いますよ」

そう言っつて自分の銃であるSR - 25風のAR - 10を掲げる

「ありがたい。少しでも戦力は必要だからな。平野君はそっちの詰所の屋根に昇っつて狙撃してくれるかい？」

「ヤー！」

そう言っつて平野君は指示通りに動く

「修さん、地域の分析ができました。南に集団がやって来ています。東はすでに交戦状態のようですね」

美麻さんが言っつた瞬間、秀治のいる東側から銃声が聞こえ始めた

「おっぱじめたか。とっこっちにもお客さんか」

暗視装置でゾンビ共を視認する事ができた。少なくとも50以上はいるか

「団体様、ご案内しまゝす」

そう言っつて引き金を引いた。ドン！という鈍い音と共に衝撃が体にかかる。弾は勢いよく出て、一番前にいたサラリーマン風のゾンビの頭に命中、しかし、弾は止まることなく後ろにいたゾンビの頭を貫いていく

「さすがは究極系だな。本当に戦車をぶっ壊せるかもな」

そう言いつつ、射撃を繰り返していく

最初は少なかったゾンビ共だが、やがて10〜20と増えて行く。まさに数による暴力だ

「機関銃！撃て！撃ちまくるんだ！」

小ノ牧さんが指示を出していく

俺も攻撃の手を休めることなく攻撃を行う

「美麻さん、弾を」

「はい、どうぞ」

そう言って箱型マガジンを受け取る

「ありがとう。」

「いいえ、それよりも数が増えてきましたね。」

「ああ、トラップを発動しますか」

そう言ってポケットからC4用のリモコンを出す

「小ノ牧さん！全員、伏せるように行って下さい！」

「了解だ！全員伏せろ！！どでかい花火が来るぞ！！」

小ノ牧さんが言うと全員伏せた。俺は伏せた事を確認すると

「あばよ。彷徨える子羊達」

そう言ってリモコンを押す、次の瞬間、廃車に仕掛けてあったC4が次々と爆発していく、同時にガソリンに引火し爆発の威力を高めに行く

一通りの爆破を行った後、俺は顔を上げる。そこには無残に燃える廃車とゾンビ共の散らばった肉片だった。

「汚ねえ花火だ。」

しかし、それでもなお、ゾンビ共は人肉を求めてやってきた

「おいおい、終わりにさせてくれよ。全く、キリがないな……美麻さん、どれぐらい来てる？」

「えーと、まだまだ、増えてますね。もしかしたら予想以上に音で引き付けてしまったんでしょか？」

「だろうな。今夜は眠れなさそうだ」

そう言って再び、バレットをぶっ放すのであった

深夜の防衛2（前書き）

今回は琥珀視点からどうぞ！

深夜の防衛2

（side琥珀）

私達は小室様の親御様を救出するべく床主第三小学校へ来ていた。やっと親御さんを見つけられたものの自衛隊は明朝に迎えに来るそうだ。だから、今は校庭にて見張りをしている

私が担当するのは西地区だ。ここは正門や東側に比べたら道幅が広く、何か動きがあればすぐに分かる状態である

余談ではあるが修様にも春が訪れたみたいですね。美麻様とずいぶん仲良くなっているご様子で何よりです。私としては複雑な気持ち。最初は、ありましたが、今では妄想で3Pもいいかなって思っているこの頃です。

私は愛車のangelに乗りながら暗視装置で周囲を見張っている。その時だった。angelの車体を叩く音が聞こえた

「はい、どちらさまでしょう？」

私が言った

「ああ、勲だ。開けて貰えるかな？」

外で勲さんが言った

「あ、はい、少々お待ち下さい」

そう言って私は後部ハッチを開けた

「いや、すまないね」

勲様が言う

「いえ、それで、どのようなご用件で？」

私が言った

「いやなに、琥珀さんも夜食はまだだったろう？カップ麺ですまないが持ってきたよ」

そう言うつすでに湯が注がれたカップ麺を渡す

「ありがとうございます。私に気遣ってくれて」

そう言うつ笑顔で言う。勲様は顔を赤くしているようです

「そ、それより、こっちはどんな感じかな？」

話を逸らそうと勲様が言う

「はい、こちらは至って平穩です。この子も早く暴れたいってうねっていますよ」

そう言うつ angee を叩く

「はは、ずいぶんと好戦的だな。それなら、安心できるよ」

そう言うつ笑う勲様

「ふふ、そういう勲様も本当は暴りたいのでは？」

「あれ、ばれてたか」

「ふふ、顔に書いてありますよ？」

「そうか。私も世界が変わってから自分も変わったと言う事だろうな。琥珀君は修君に仕える前は何をしていたのかね？」

勲様が質問をする

「あまり、表向きには言えないような仕事です。勲様が光なら私は影つと言ったところでしょうか。」

「なるほど……裏の仕事をしていた訳か」

「軽蔑しますか？」

「いや、そんな事で私は好き嫌いにはなったりしないよ。人にはそれぞれの人生つてものがあるんだ。他人が無闇に言う資格は無い。少なくとも私はそう思っているがね」

「そうですね……こんなことを言われたのは三人目ですね」

私が言った

「一人は修君としてもう一人は誰なんだい？」

「もう一人は……修様のお父様です。あの方は……心

が乱れ切った私に光をくれました。希望と言う名の光を……

「そうか……それは良かったな」

「ええ、今、ここにいるのもあの方と修様のおかげです。私は心に決めていたんです。絶対、何があるともあの方と修様だけは守って見せるって、だから、私は武器商人をやめ、ここに仕える事になりました。今では、本当に幸せだと思ってます」

顔もきつと緩み切っているだろうな……私

「そうか。君を見ていると娘を思い出すよ」

「娘さんですか？」

「ああ、あの子は私立の学校にいた。丁度電話をしていて、この騒動が起こってな。電話口からあの子が必死に助けを求めているのが分かったよ。だが、最後に聞こえたのは……あの子の断末魔だった……切ろうとしたが……切れなかった……私はついに一人になってしまった。妻は先立たれ、男手一つで育ててきた宝物が……一瞬のうちに崩れ去ったよ……だから、決めたんだ。もう、こんな事は起きて欲しくないってね……あつとすまないな。男の愚痴を聞いてもらって」

「いえ、大変だったんですね……勲様も」

そう言って私は運転席から離れ、勲様の元に行った。そして、抱きしめた

「安心して下さい。私はあなたの娘さんにはなれませんが、一人の女性としてあなたを支えたいです」

自然と口が走っていた

「そうか……ありがとう」

勲様が言った瞬間

「琥珀君！聞こえるか！！」

無線機から少佐の声が聞こえた

「アリス少佐、どうかしましたか？」

私は無線で答えた

「奴らが現れた！正門と東側に！そちらは異常は無いかね！？」

「ええ、こちらは……」

そう言っつて暗視装置を付けた。

「！！いえ、前言撤回です。奴らが現れました！数は一目で100！」

「くそ！音で引き付けられたか！構わん！全力で排除しろ！」

「分かりました！」

そう言って無線を切る

「どうしたんだね？」

「奴ら現れました。正門と東にも」

「そつか。私も手伝わせてもらおうとするかね」

そう言って上部ハッチを開け、付属で付いているM2キャリバーに弾を装填する

「攻撃開始！」

そう言ってブッシュマスターを奴らに向かって放って行くのだった

〈side琥珀out〉

〈side秀治〉

俺達は東側で防衛していたが、如何せん数が多すぎる。今は綾瀬さんのM70と俺のMINIMIで弾幕を張っている。少佐の所からハンヴィー（米軍仕様）を持ってきてもらい訓子さんがM2キャリバーで撃っている。他にも戦えそうな人達を応援に来てもらっている（主に小室君のチーム、他の市民は全部俺達に押し付けている）。

あつ因みに薫さんのM70は米軍で持たれているM60の後継機版で弾数がなんと200発、総弾数は1000発以上と驚異の力を持っている。さらにM60として問題にされていた機関などをすべてとっかえてすぐに壊れないように耐久性を上げてある代物だ。それゆえに持てる人が限定されている。薫さんはそれを何なく使ってい

るから本当にすごい

俺は修から借りたゾロターン S-18/1100という対戦車ライフルを使用している。こいつはスイスのゾロターン社が開発した S18/1000をオートマチック化した口径20 mmの大型対戦車ライフル。1936年に輸出されたが、移動用の二輪付き台車が用意されているほど長大で、また精密工作がなされ高価であるため、あまり商業的には成功しなかった。だが、修の親父さんはそれに改良を加え弾数を増やし、弾自体も自分の会社で作っていたため、弾切れの心配は無いとの事だ（修談）。

俺は遠慮なしにぶっ放している。対戦車ライフルと言う事もありゾンビは容易く五体以上の体を貫いている

「秀治君！弾はある！？」

薫さんが言う

俺はバックで持って来ていた補給用の弾薬を手渡す

「どうぞー！」

「ありがとう！」

そう言ってボックスマガジンを装填し、すぐに弾幕を張った。が、奴らの勢いも止まる気配がない。

「くっそ、これじゃあアラモだな！」

俺が言った

「それは皮肉？」

薫さんが言う

「いや、冗談ですよ。簡単に諦めたりしません！」

「ふふっそれでこそ秀治君」

薫さんが笑う、それにつられて俺も笑う

「二人とも！攻撃の手を緩めない！ほら！撃った撃った！！」

そう言っつてM2の弾を入れ替える篠田さん

「sir yes sir！」

「あ〜ん、訓子、ぶたないでね！」

そう言っつて俺らは再び銃撃戦を繰り返していく

（正門）

「おらおらおら！！！！しねやー！！」

小ノ牧さんがM134を回転させながら言っつた

（てか、小ノ牧さんってあんな性格だっけ？）

俺はバレットを撃ちながら思った。俺は車両から平野君のいる詰所

とは反対側の壁に昇って狙撃をしている

「修さん！奴らがすぐそこまで来てます！」

平野君に言われて目を下ろすとそこには手を伸ばしたゾンビ共がたむろっていた

「Wow、気持ち悪いね！」

そう言っつてM870を取り出し近くにいたゾンビを粉々にする

「うーん、気持ちいいね！！てか、バレットじゃあ、意味がないかな・・・。。。。そうだ！」

そう言っつて一旦、壁を降りハンヴィーの後ろに周りトランクを開ける

「あつたあつた。」

俺はニヤケながら言っつた

ある装備を一式抱えて、再び戻つた

「修さん！どこに・・・。」

平野君が言うのをやめた。そりゃあそつたろう俺の持っている”武器”を見ればな

「悪いね。平野君、こいつを取りだすのに苦労したよ」

俺が持っているのはGAU-8の個人用武器として改良されたガト

リング砲だった。本来はA-10に積み込まれているガトリング砲でガトリング砲の中で最大・最重・最強の三拍子がそろった砲である。こいつを喰らえば、人間なんてあっという間にミンチにされちまう。個人用として成功したのは世界を探しても修の所しかないだろう。それを可能にするのが彼の父親の会社だ。弾はそのままの口径にして小型化を実現してしまったのだ。本体だけ修が持ち、弾は下に置いてある

「行くぜ!!!実験体共!!!」

そう言ってトリガーを引いた。ゆっくりと回転していきやがて高速回転して弾が放たれる。毎分3900発という弾の嵐を食らってしまえば、人間であることすら忘れてしまう。まさに無痛風と言われるだけある。ゾンビ共はあっという間にミンチになって行く

「す……すごい……」

一緒に戦っていた民間人が言った。平野君は目を輝かせながらガトリング砲を見ている。小ノ牧さんは……暴走中だ

「よし」

そうやって俺は一旦、止めるのをやめた

俺が撃った方はすべて穴だらけになりゾンビ共はただの肉片に変わっていた

「美麻さん、こっちの状況は？」

俺が言った

「はい、普通のゾンビ共は消えましたが……かわりにお客さんが来たようですよ。」

「OK もう一勝負と行きますか」

そう言って向き直る。その先にいたのは

「なんだ……あれ……」

平野君が言う。そういえば、初めて見るんだったな

「平野君、重火器は使えるかね？」

俺が言った

「え……ええ、一応は」

「よし、美麻さん、彼にグスタフを」

「分かりました」

そう言って駆けて行く

「修君、どういう作戦かね？」

隊長が言う

「まあ、最初は弾幕を張りましょう。平野君」

「は、はい！」

「俺が合図をしたらどでかいのを一発かましてくれや。」

「りよ、了解です！！」

そう言って一旦、詰所から降りる

「さあ、地獄の幕開けだ」

俺は笑いながら言った

アドレナリンMaxだ！！

俺らは学校でヘリが来るのをひたすら待っている。その中、音を聞きつけたのかゾンビ共が大量にやって来ていた。俺が守る正門は一波が過ぎたが第二波がやって来ていた

（正門）

「お客さんだな。しかも、団体様と来た。今日は宴会かね？」

俺は皮肉交じりに言った

「修さん！何なんですか！？あれ！」

平野君が言う

「ああ、あいつは変異体だろうな。偶然、普通のゾンビだった奴が変化してあんなムキムキになったんだろうよ。どう思う？」

俺が言った

「すごく……大きいです……」

「貴重なギャグ、ありがとう。久々に聞いたよ。そのネタ」

「えへへ……ありがとございます。それより……あれ、どうするんですか？普通の銃弾じゃあ効かなそうな気がしますけど……」

「ああ、ついでに言うとおバレットでも効かなかった」

「ええ！？あのアンチマテリアルライフルでも！？」

平野君が驚いた。そりゃあそうだろう。遮蔽物ごと相手を射抜くほどの威力を持っている対物ライフルでさえ効かないとなれば驚きもある

「大丈夫だ。方法はある」

「本当ですか？」

「ああ、あいつには重兵器が一番効く。どんな化け物でもやはり、勝てなかったからな」

「でも……対物ライフルも十分、重兵器のような気がしますけど……」

「気にしない気にしない。さて、このガトリングは置きますか」

そう言っつて小型のGAU-8を地上に下ろす、と言っつてもやはり重い、いくら人間用に小型で来ても重量はギリギリまでしか下げられていないのだ

「今度は何を使うんですか？」

質問をする平野君

「そつだな……」

そう言っつて俺は顎に手を乗せた

（奴は普通の銃弾では効かない。さっきのガトリングのせいで結構、肩に負担が掛かってるからな・・・対戦車ライフルなんかあったけ？）

そう思っつて再びハンヴィーの後ろに回り込んで探った

「うーん、無いな」
「angleに積みっぱなしだっけ？しょうがない、他ので代用するか・・・」

そう言っつてさらに探す

「おっこいつは・・・新しい対物ライフルだっけ？」

そこに出てきたのはXM112アンチマテリアルライフルだった。名前はヘラクレス。ギリシャ神話に出てくる狂戦士の名前である。これは、アメリカで作られた試作品の対物ライフルである。弾の口径は18.9mm弾薬は308型と呼ばれる新型の弾薬だ。こいつは他の弾薬より二回りでかい物で外見だけで見てしまうとライフルと言っつよりは砲に近い物である。が、カテゴリーではライフルに分類されるらしい（米軍中将殿が言っつてた）

「お、修さん、それっつて・・・」

「ああ、新型の対物ライフルさ。」

「もしかして・・・XM112ですか？」

「おっ良く知っつてるね」
「正解だよ。名前はヘラクレス。しかし・・・」

・まだ、どこにも出されていない物なんだけど？」

「ああ、ネットじゃあ良くありますよ。外人の武器マニアがあちこちの基地を見学してる時、偶々見つけたらしいんです」

「へ〜情報が早いな〜」

「修さん、そんなこと言ってる場合じゃないですよ。団体様、こちらに進軍中です」

美麻さんがパソコン片手に言った

「OK・・・実地試験と行こうじゃないか」

そう言っつてハンヴィーの前に伏せ撃ち状態になってバイボットを出した

「効いてくれるかな？・・・そら！！」

一瞬の衝撃が体に走るが、そこまででかいものでもないんで安定して撃てる。また、肩の部分には衝撃吸収パッドもあるので使用者にそこまで酷いダメージを与えないようだ

因みに今使ってるのは新型の手甲弾である。これはヘラクレス専用で作られた物で先がドリルのように鋭利になっている

弾はまっすぐ進み、一体のデカマツチヨの足に直撃する。普通なら弾き返されてお終いなのだが、そんな事にならず貫いた。さすがに聞いたようにデカマツチヨもその場で膝をついた

「よっしゃ！！今回は行けるぞ！皆、撃つちまえ！！」

そう言うとその場にいた全員がありったけの弾丸をデカマツチヨ共
に食らわしていく

「平野君！」

「はい！」

平野君はそう言ってグスタフを構え、膝をついたデカマツチヨに照
準を合わせる

「これで………終わりだ！！！」

ロケット発射音と同時にミサイルが直進して行ってデカマツチヨの
顔に直撃した。その瞬間、爆発が起き、デカマツチヨのいる所は煙
でよく分からなかった

「やった………か？」

小ノ牧さんが言う

段々と煙が晴れ、ミサイルを喰らったデカマツチヨは民家に突っ込
んでいた

「いつちよ上がり！よし、このまま続けるぞ！」

俺がそう言って残りのデカマツチヨの掃除に掛かる

（side琥珀）

私と勲様はangelを使って防衛を行っていた。私はブッシュマスターを勲様はM2キャリバーで応戦している。他にもアリスさんが援軍として使える男性をこっちに送って頂いたので戦闘はだいぶ楽です。

「弾、交換!!」

そうやって勲様はM2のマガジンを交換する

「ブッシュマスター発射!!」

ドン、ドン、ドンとタイミング良く弾が発射されていき、ゾンビ共を襲っていく

「くそ!どんだけいるんだ!?!」

援軍として来ていた若い兄ちゃんが言う

「諦めないでください!正確に弾薬を無駄遣いしないでください!」

私はスピーカーを通して皆に伝える

「しかし、琥珀君、これでは埒が明かないのでは?」

勲様が言う

「確かにそうですね……よし」

そうやって私はangelに付いているパソコンを出し、キーボー

ドに打ち込んで行く、すると、砲塔の横に付いていた四角いボックスが起動する

「勲様、一旦、中に入って下さい」

「分かった」

そう言うて中に入ったのを確認すると同時に発射ボタンが点滅する

「ミサイル、発射！！」

そう言うてボックスからミサイルが発射される。これはTOWミサイルと言って本来なら対戦車用兵器として使われる物だ。これは使用者が被っているヘルメットと同期されており、首を動かすとミサイルも方向転換するようにできている。半自動指令照準線一致誘導方式（SACLOS）と呼ばれる装置で使用者が目標を捉え続けなければならぬ

このミサイルを使っている兵器と言えばアメリカ軍のM2ブラットレー歩兵戦闘車である

ミサイルは順調に進んで行きやがて、ゾンビ共の中心に着弾し爆発を起こした。近くにいたゾンビはそのまま碎け散るか吹っ飛んで行くかのどちらかだった

「着弾！」

私が言った

「うまいもんだ。そろそろ夜明けだな……もう少しか」

勲様が言う

確かに西の空は段々と明るくなってきているのが分かる。太陽が昇り始めたのだろう

「皆さん！あと、もう少しです！それまで、防衛し続けましょう！」

私が言うと皆、「応！！」と答えてくれた

「よし、私達もやるか琥珀君」

「はい！勲様！」

そう言って銃撃を続ける私達だった

作戦完了!

〔正門前〕

俺らは正門であのデカブツくんと対峙している。一体、倒したので残りは後、二体である

「おら！弾幕を張り続ける！！」

俺が言つと皆はありつたけの弾薬をデカブツ共にぶつけて行く

俺はXM112をぶつ放して奴らの足に直撃させ速度を落としている

「修君！グスタフは！？」

小ノ牧さんが言う

「弾薬が底をついちゃいましたよ！こんな時に限って！」

俺が言った。そう、肝心のグスタフの弾薬が底をついてしまったため、こうして弾幕を張って時間を稼いでいるのだ

「修さん！新手です！」

美麻さんが言う

「どこだ！？」

「さらに普通のゾンビが追加です！」

「マジかよ!?!」

「くそ!ミニガンの弾薬も切れてしまった!」

そう言つて小ノ牧さんはハンヴィーから出てM4のカスタム版を持ち出す

「修君!戦車はどうなっているんだ!?!」

「あれは、今、整備中です!動かさせません!」

「くそ!状況が厳しいな!」

その時だった。無線が入る

「修!聞こえるか!?!こつちに例のデカブツが出た!」

秀治から無線で言つた

「修様!こちらにも同じく!」

琥珀から連絡が入る

「くそ!何とか足止めしろ!時間を稼ぐんだ!」

そう言つて無線を切る

「自衛隊はまだか!?!早く来て欲しいもんだ!」

空は段々と明るくなっており、すでに太陽が顔を出していた

「本当にな！全く、仲間とはいえ遅すぎる！」

小ノ牧さんが言う

その間にもありったけの弾薬を奴らに注ぐ

その時

「……修さん！東の空に航空機が出ました！」

美麻さんが言う

俺は東の方を見る

「やっと来たか……」

東の空にはCH-47とその護衛にアパッチロングボウが姿を現していた。銃の音だけでなくエンジン音が割り込んできている

「修君！救援が来たぞ！」

無線でアリス少佐が言う

「ええ、見えていますよ！アパッチにこの化け物を始末するようお願いします！」

「了解した！」

そう言って無線を切る

数秒後、二機のアパッチがCH-47から離れ一機はその場に留まって東側を殲滅し始める。もう一機は西側に行きそのままロケット弾を発射していく

「ふう、後はここだけだな」

小ノ牧さんが言う

「ええ、そのためにも弾幕を張り続けましょう」

「ああー!!」

そう言って銃撃していく、すると、東側にいたアパッチがこっちにやって来てチューインガンとロケットを同時に発射していく

弾は俺達に当たることなくデカブツや他のゾンビを巻き込みながら爆発していく

「!!!!!!!!!!」

デカブツは断末魔を上げながら倒れて行った

「銃撃やめ!!」

俺が言うと皆は銃撃をやめた。それと同時にエンジン音が辺りを支配していく

CH-47は校庭に着陸し、アパッチは警戒のためか上空で待機し

ているようだ

「よし、戻るとするか」

俺が言うとは皆は安どの表情を浮かべた。俺はそのままハンヴィーで移動しアリス少佐がいるテントまで行った

（テント内）

「今回はありがとうございました！」

テントに戻ると少佐が救助に来た自衛隊に敬礼をしていた

「いえ、これが我々の仕事です。まさか、アメリカ軍の少佐殿にお見えになるとは光栄でしたよ。よく、無事でしたね」

救助に来た自衛隊が言った

「ええ、これもすべて彼らのおかげです。」

少佐が言う

「さあ、もう安全ですよ。すぐに搭乗準備をして下さい。沖合でお済みが待機していますから、それと、アメリカ軍からあなたに伝言がありましたね。できれば、我々の仕事を手伝って欲しいのです
が……」

「本当ですか!？」

少佐が驚く

「ええ、アメリカ軍は首都を放棄して南部に防衛線を作ったそうです。指揮は大統領ではなくハーマン大將が行っているとの事です」

「大統領は……」

「ええ、エアフォーースワンが行方不明だとの事です。全力で捜索はしているらしいですがね」

「そうですか……」

「少佐、ちょっとよろしいですか？」

俺が言った

「ああ、すまない。少し、時間をくれないか？」

「ええ、待っていますから」

そう言って俺らはテントを後にする

「少佐、戻るんですか？」

俺が言った

「ああ、本国からの命令でな。自衛隊の手伝いをする事になったらしい。幸い、アメリカ軍は生きているとの事だ」

「それは良かったですね。で、どうするんですか？」

「ああ、君達と別れるのは寂しいが、軍の命令には逆らえない。もし、間接的にでも手伝う事ができれば、ここに連絡して欲しい。それと、個人用の無線周波数だ」

そう言って紙に書いたメモを出す。どうやら、俺達に乗らない事は先方に話したようだ

「分かりました。ここで、お別れですね。でも、今生の別れにならないようにしますね」

俺は笑いながら言った

「君達なら大丈夫だと思うが、祈っているよ」

少佐も笑いながら言った

「そうですね。また、会えたら奢ってもらいますよ？」

「ははは！いいよ。その時はパーっとやろう」

そう言って互いに握手をした

「じゃあ、私はしなければならぬ事があるんでな。これで失礼する」

そう言って再び、テントの中に入って行った

「修さん！」

「ん？おっ小室君じゃないか」

やって来たのは小室君だった

「乗らないって本当ですか!？」

「ああ、俺達には俺達の目的がある。それはまだ、達成できていない。君達はもう達成できたんだ。後は身の安全に気を配ればいい」

「で、でも」

「小室君、君は強い子だ。この先、何があっても頑張って行けるさ。せいぜい達者でな」

俺が言った

「はい！修さんも道中お気をつけて下さい！」

小室君が涙を流しながら言った

「男が簡単に泣くもんじゃないぞ。男が涙を見せるのは大切な人を失くした時だけだ。いいな？」

「・・・はい！」

そう言って小室君を別れる

数分後、避難民と小室君のチーム、アリス少佐、亀爺は乗り込んだ
ようだ

「では、お気をつけて下さい」

自衛隊員が言った

「ええ、そちらも無事に届けてやって下さい」

俺が言った

自衛隊員はそのまま頷いてへりに乗り込んだ

へりはそのまま離陸し、おおすみのいる沖合に向けて飛んで行った

「行っちゃまったな……」

秀治が言う

「ああ、本当にこれで良かったのですか？小ノ牧さん」

俺が言った

「ああ、これは私達が決めた事だ。修君や秀治君、美麻さんの親捜しに手伝わせてもらう。これに拒否権はないからな」

小ノ牧さんが言う

「そうですね。なら、付き合ってもらおうとしますかね。琥珀、弾薬はどんな感じだ？」

「はい、今回は結構消費してしまったようでミニガンの弾は0になつてしまいました。それに重兵器・・・特にミサイルが底をついてしまっています。ハンドガンやショットガン、アサルトライフルは

まだ、ありますね」

「なるほどな……どっかで弾薬を補給したいが……
こちら辺に駐屯地は無いしな……」

「確かに……それに親も気になる」

秀治が言う

「戦車の方は？」

「幸い、アリス少佐が直してくれたよういつでも動かせます。でも、人数が割に合わないんですよ」

「車両の方が多いって事が……一台、置いていくか」

「だとしたらどうする？」

小ノ牧さんが言う

「ハンヴィーは置いていきましょう。米軍の方を」

「そうだな。それと弾薬の方を心配無いぞ」

「え？どういうことですか？」

美麻さんが言う

「小学校に入る前に言っただろう？政府専用の秘密倉庫が……」

「

小ノ牧さんがニヤリと笑う

「……………なるほど、もらっていけばいいって事か」

秀治が笑う

「しかし、隊長、それは自衛隊が守っているのでは？」

訓子さんが言う

「大丈夫だ。この騒動のおかげで倉庫の方は誰もいない状態らしい。それにあそこを守るために派遣された自衛隊員は連絡が途絶しているそうだ。これはチャンスだぞ」

「なら、まずは補給と行きますか。秀治、それでもいいか？」

俺が言った

「ああ、準備不足のまま敵に突っ込むのは愚の骨頂だろう？それに家の親は長生きするタイプだしな」

そう言って笑う

「（本当は無理しているくせに……………）分かった。なら、進むとしますか！全員乗車！」

『応！』

そう言って俺らはそれぞれの車両に乗り込む、そのまま小学校を後

にした。

作戦完了！（後書き）

少佐と別れる羽目になりました・・・グスン、結構いい人なんだけどな・・・次回弾薬を補給に向かいます！楽しみにして下さい！

謎の外人部隊（前書き）

遅れて申し訳ない！！後、少し短いかも・・・

謎の外人部隊

俺らは小学校の生存者を見送った後、本来の目的である秀治の両親を探す事に専念する事にした。しかし、その前に先の戦いで弾薬類を大量に消費してしまったため小ノ牧さんの案内で港付近にある政府専用の秘密倉庫に向かう事になった

（国道）

俺らは港に向けて走っていた。先頭は俺が乗る戦車だ。そうそう、この戦車に名前を思いついたんだ。名前はリンカーンアルファだ。リンカーンはもちろんアメリカ大統領であるアブラハム・リンカーンだ歴史があつて良いと思わないか？

「修さん、もうすぐ港に続く道に出ますよ」

砲台付近で座る美麻さんが言う

「了解、この先はどんな感じになつてる？」

俺が言った

「他と同じですね。事故車があつてゾンビ共がいて、どんな風に広がったのか。逆に不思議ですね。発生源が分からない」

そう言いながらパソコンを弄る

「そうだな。俺は最初街の中心から一気に広がったのかと思つてたけど、これじゃあ、各地で一気に広がった感じだしな」

俺が言う

「でしようかね……それはともかく、秀治さんの御両親が心配ですね。まだ、無事だといいいんですけど」

「そうだな……秀治の奴一番気にしてると思うぜ。あいつは親に孝行してやるんだっていつも言ってたしな」

「秀治さんのためにも早く、弾薬を見つけて親を探しましょう」

「ああ、そうだな」

そう言っただけ俺らは先へと向かうのだった

↳ side 秀治

俺は自分の両親の安否確認のため港に向かっていった。家は港のすぐ近くにあるため先に寄る弾薬庫に近い感じである

「秀治君、親が心配？」

薫さんが言う

「まあ、心配って言うっちゃあ心配ですけどね。そんな事を言っただけ安全って訳じゃないですけどね」

俺は苦笑いしながら言った

「そう……私、何かしてあげられることってないかな？」

「そうですね……自分の傍にいて貰えますか？落ち着く
んで」

「秀治君ノノ分かったわ！いつまでも傍にいる！」

そう言っつて薫さんは手を握った

（親父、お袋、待っててくれよな。もう少しの辛抱だ）

俺は心の中で親の安否を心配しながら銃の整備を行っていった

（秀治 side out）

（国道）

俺らは港に続く道へと入って行く、ここら辺も予想通り酷い事にな
っていた（と言っつよりも美麻さんが衛星を使って事前情報を仕入れ
たからである）

「そろそろかな？」

俺はリンカーンを操作しながら言った

「そうですね。風に乗って潮の匂いもしてきましたし」

ハッチを開けて外の様子を探りながら言っつ美麻さん

「あっ修さん！見えてきましたよ！でっかい倉庫が見えてきました
！」

「おっ本当か！よし、小ノ牧さん、聞こえますか？」

俺は無線機で小ノ牧さん呼び出す

「ああ、どうした？」

「例の倉庫が見えて来たんですけど、どれだか分からないんで小ノ牧さんなら分かるかなって思って」

「ああ、こちらからも見えてきたよ。一番手前にある大きな倉庫だ」

「あの、赤く塗られてる奴ですか？」

「ああそつだ。」

「よし、一気に進むぜ！アクセル全開！」

そう言っつてペダルを思いつきり踏む、キヤタピラが大きな音を立てながら事故車やゾンビ共踏みつぶしていく

「ヒィー！！最高！！！」

俺は大きな声で言った

数分後例の倉庫前までやってきた

「……………どうなってんだ？こりゃあ」

俺は目の前の惨状を見て言った。

「さすがに私でも分からないな。何かあったんだ？この場所で」

小ノ牧さんが言う

俺らの目の前には政府専用の秘密倉庫があるのだが、その手前、きつとここを監視していた自衛隊であろう死体が無残にも転がっていた。ここら辺までならゾンビの襲撃を受けて全滅したのが妥当と考えていいだろう

しかし、その近くには所属不明の外人部隊が死体となって転がっていた

「自衛隊の方もゾンビのせいで死んだんじゃないな。銃撃戦で死んだのか……」

俺は近くの自衛隊員を調べて言った

「でも、修、こっちの外人部隊はどうなんだ？」

秀治が言った

「そうだな……どう見ても装備は反政府の使われるような物じゃない。すべて一級品の物ばかりだ。それこそ特殊部隊が使っているような装備ばかりだな」

外人部隊の装備はコンバットアーマーなど軍で支給される物ばかりが装着されていた

「だったら、こいつらは何者なんだ？」

小ノ牧さんが言う

「まあ、とりあえず中に入って弾薬があるかどうか確認しよう。もしかしたらこいつらだけじゃないかもしれないかも」

俺はそう言ってSIG550を抱えた

「だな。弾薬が盗まれてるかもしれない。早いとこ確認しよう」

秀治もそう言ってM870を取り出す

「修君、我々はもう少し、こいつらを調べてみるよ。何か分かったら連絡しよう」

「小ノ牧さん、私も手伝います。良いですよ？修さん」

美麻さんが言う

「ああ、頼む、何か分かったら連絡してくれ。秀治、琥珀、行くぞ」

そう言って俺らは中に入って行く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3838u/>

DEAD of PARADISE

2011年11月10日03時02分発行